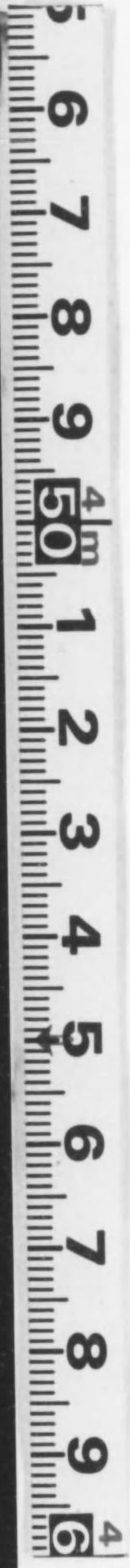


373-518
73
1200501450349
518



始



昭和八年版

北海道炭礦案内

北海道石炭鑛業會

昭和八年版

北海道炭礦案内

北海道石炭鑛業會



373-518

北海道炭礦案内

目次

道勢一斑	一
一、土地	二
二、氣溫	三
三、戶口	四
四、交通	五
五、商業及金融	七
六、產業	一〇
石炭鑛業概況	一八
總說	一八
一、沿革	一八
二、炭田	二三

目次

三、鑛區.....三五

四、稼行炭鑛及產額.....三六

五、需給關係.....四一

六、運輸.....四三

七、鑛夫.....四六

各鑛狀況.....五一

北海道炭鑛汽船株式會社.....五一

夕張.....五三

夕張新夕張坑.....五七

眞谷地鑛.....六〇

登川鑛.....六三

萬字鑛.....六六

幌內鑛.....七〇

幌內鑛幾春別坑.....七三

空知鑛.....七六

三菱鑛業株式會社.....八〇

○三菱美唄鑛業所.....八〇

三菱芦別炭坑.....八四

三菱大夕張鑛業所.....八七

三井鑛山株式會社.....九一

三井砂川鑛業所.....九一

○三井美唄鑛業所.....九五

住友炭鑛株式會社.....九九

住友上歌志內鑛.....九九

住友歌志內鑛.....一〇三

住友新歌志內坑.....一〇六

住友奔別鑛.....一〇九

住友唐松鑛.....一一二

大倉鑛業株式會社.....一一五

茂尻鑛業所.....一一五

太平洋炭鑛株式會社.....一一九

春探坑.....一一九

別保坑.....一三三

雄別炭礦鐵道株式會社.....一三六

○ 雄別礦業所.....一三六

尺別炭坑.....一三九

明治礦業株式會社.....一三一

昭和礦業所.....一三一

淺野雨龍炭礦株式會社.....一三四

淺野雨龍礦業所.....一三四

東邦炭礦株式會社.....一三七

彌生礦業所.....一三七

茅沼炭礦株式會社.....一四〇

○ 茅沼礦業所.....一四〇

北海道協同炭礦株式會社.....一四四

美流渡礦業所.....一四四

昭和礦業株式會社.....一四七

新幌內礦業所.....一四七

遊覽案内

函館より小樽迄.....一五〇

小樽より札幌迄.....一五三

札幌及其附近.....一五五

旭川及其附近.....一五七

室蘭及其附近.....一五八

釧路及其附近.....一五九

野付牛及其附近.....一六一

稚內及其附近.....一六一

地名考.....一六三

附圖

北海道炭礦案内

道勢一斑

本道の面積は五千七百五十五方里にして、臺灣樺太及四國を併せたるものに近く、千島列島を除くも、尙ほ東北六縣及新潟縣を合せたるものに匹敵す。海岸線は延長一千三百五十五里にして、到る處魚介海藻に富み、地勢は概ね平潤、地味豊沃にして最も農牧に適し、加ふるに千古斧鉞の入らざる森林と、地下無限の礦物とを蔵せり。

本道の開發は遠く七百年前に着手されしも功程の見るべきものなく、寶庫は堅く鎖されて徒らに荆棘の蔓るに委せたり。然るに王政維新の宏謀定まり、明治二年開拓使を置かるゝに及び、開拓の基礎初めて立ち、爾來六十餘年を経、事業の進捗眞に顯著なるものあり。殊に歐洲戰亂の餘響は本道産業界にも好果を齎らし、諸般の施設面目を一新せり。且つ輓近我邦人口食料問題の高調せらるゝに及び本道拓殖の前途は益々朝野の關心を深からしめつゝあり。

昭和七年末調査の結果に依れば、本道人口は二百八十万餘にして年々著しく増加すれども、其密度

は未だ内地府縣中最も粗なる岩手縣の半數にも達せず、又其生産價額は昭和六年度に於て三億二千百餘萬圓に上りしも、開拓の業程は尙ほ二分の一にだも達せず。即ち此彪大の地域と無盡の資源に向つて開發の餘地頗る大なるを知るべく、本道の前途や實に多望なりといふべし。

一、土地

本道の面積は五千七百五十五方里即ち八百九十五万一千四百八十二町歩にして其種別は左の如し。

(昭和六年末現在)

國有林	三、四八七、〇三五町歩	貸付地(起業中)	六二、九六二町歩
公用地	二三〇、七三九町歩	未處分未開地	三六一、七〇五町歩
御料地	九一八、二九二町歩	道路河川湖沼其他	四三五、三七二町歩
民有地(公共團體有ヲ含ム)	三、四五五、三七七町歩	合 計	八、九五一、四八二町歩
賣拂地(起業中)	一五〇、〇三四町歩		

山林は國有林・御料林・公有林・社寺有林・大學演習林・私有林を合せ六百六十四万七千百一十一町歩(昭和六年末現在)にして、林相は針葉樹林・闊葉樹林・混生樹林の三種に別れ、闊葉樹林最も多く、針葉混生樹林之に亞ぎ、針葉樹林は最も少なし。

農耕適地は總面積約百五十八万町歩にして、昭和六年末に於ける既成耕地は八十七万一千五百六十

二町歩、未成適地七十万八千四百三十八町歩なり、其内譯左の如し。

農耕適地	一、五八〇、〇〇〇町歩	水田適地	四五〇、〇〇〇	既成水田(昭和六年末)	三〇八、三三三
		畑適地	一、一三〇、〇〇〇	將來造田面積	二四一、六六八
				既成畑(昭和六年末)	六六三、三三〇
				將來畑地面積	四六六、七七〇

二、氣温

本道は面積の廣さと、寒暖潮流の影響に依り、南北兩端及東西沿岸と内陸との氣温自ら異れり。左に各測候所發表昭和七年中平均温度を示す。(攝氏)

測候所	一月	二月	三月	四月	五月	六月	七月	八月
函館	〇・三	(-) 二・〇	六・七	一〇・七	一四・四	一八・二	二一・一	二二・一
室蘭	(-) 〇・一	(-) 一・九	〇・二	五・四	一〇・一	一四・八	一八・五	一九・六
札幌	(-) 二・五	(-) 五・六	一・二	五・四	一〇・一	一四・八	一八・五	一九・八
羽幌	(-) 二・一	(-) 五・八	一・四	四・六	一〇・〇	一四・七	一八・三	一九・七
旭川	(-) 五・四	(-) 九・九	三・〇	三・九	一〇・四	一六・八	二一・三	二二・八
浦河	(-) 〇・一	(-) 三・一	〇・二	四・五	八・六	一三・八	一八・〇	一九・〇
帶廣	(-) 六・九	(-) 八・一	一・七	三・八	一〇・七	一六・一	二一・二	二二・八
釧路	(-) 三・八	(-) 五・九	一・八	三・〇	七・三	一二・〇	一六・五	一九・五
根室	(-) 二・三	(-) 四・四	一・七	二・八	七・四	一二・〇	一六・三	一九・三
網走	(-) 三・九	(-) 六・七	二・九	三・一	九・五	一四・〇	一八・五	二二・五
紗那	(-) 三・二	(-) 六・二	四・五	〇・九	五・八	一〇・〇	一四・八	一九・九

最 低	最 高	年			
		九 月	十 月	十 一 月	十 二 月
(-) 一四・〇	三三・〇	九・三	一・四	七・六	一八・一
(-) 九・三	二八・六	八・七	一・四	七・四	一七・七
(-) 二〇・三	三三・八	七・七	(-) 一・六	五・二	一六・三
(-) 二四・六	三〇・七	七・三	(-) 一・二	五・六	一五・一
(-) 三〇・一	三三・七	六・一	(-) 五・三	三・三	一四・七
(-) 一一・三	二五・五	七・九	〇・八	七・二	一七・〇
(-) 二四・三	三三・四	五・九	(-) 三・六	三・六	一四・六
(-) 二〇・二	二二・三	五・五	(-) 二・〇	四・五	一三・四
(-) 一三・五	二六・六	五・九	(-) 〇・二	五・九	一三・二
(-) 一九・〇	三〇・〇	六・〇	(-) 一・八	五・〇	一三・八
(-) 一六・〇	二七・〇	四・三	(-) 一・五	四・七	一一・三

三、戸 口

昭和七年末現住世帯數五十万六千七百六十一戸、人口二百八十八万五千八百五十二人（一戸平均五・五三）にして、大正十一年末に比し六万三千二百七十八戸、四十三万一千五百五十三人の増加を示す。本道の人口増加は、死亡對生産超過に依るものと、移民來往の差に依るものとあり、前者に於ても其増加率は本邦中優位に置かるゝが、拓殖の促進と人口政策より見て、後者の増加も亦大に必要なりとす。體性は男子百四十五万四百一人、女子百三十五万五千四百五十一人にして、女子百人に付男子百七人の割合なり。年齢構成は最近の材料なきも、大正十四年の國勢調査に依れば、生産的人口百三十三万五千三百八十八人、不生産的人口百十六万三千二百九十一人にして、生産人口は總人口の五割三分

を占む。

密度は昭和五年十月一日現在（國勢調査、總人口二、八一二、三三五）一方里四百七十七人、千島を除くも五百三十九人にして、之を東北六縣の平均一方里千三百三十六人に比するに、僅かに其三割六分に當り、全國中人口の最も稀薄なる岩手縣の一方里九百八十八人に比するも尙ほ其半數に過ぎず、今千島を除きたる本道の地積に對し、東北六縣又は岩手縣の例に依り可容人口を算出するに

東北六縣千三百三十六人に依れば

六、八〇〇、三四〇人

岩手縣九百八十八人に依れば

五、〇二八、九二〇人

となり、岩手縣を標準とするも、今後尙ほ優に二百二十万人を收容し得べし。

土人は一般に「アイヌ」と稱するも、其種族は本島「アイヌ」及色丹土人（北千島アイヌ）の二種なり。昭和六年末現在此等土人の數は三千五百七十七戸、一万五千九百六十九人にして、相當保護を加へらるゝも榮養不良、衛生設備不充分、幼兒保育不全、血族結婚、飲酒等の爲め漸次減少の趨勢を辿りつゝあり。

四、交 通

本道の鐵道は、幌内炭礦の開坑に伴ひ、石炭の輸送の爲め、明治十三年十一月、札幌手宮間四十六

秆三の建設ありたるに始まり、昭和七年末に於ては國有鐵道三千六秆、私設鐵道五百五秆、計三千五百一十一秆に達せり、私設鐵道は鐵道省補助の外、拓殖費を以て補助の途を開きて以來頗に發達の著しきを見たり。然れ共本道の鐵道と其面積との比例を見れば、國有鐵道は一・九八方に付一秆、私設鐵道を加へ一・六四方方に付一秆の割合にして、之を内地府縣の國有鐵道一・三一方に付一秆（昭和五年末）に比すれば、國有鐵道の敷設は尙全からざるを感せずんばあらず。

道路は昭和七年三月末現在總延長一万三百九十六里餘にして、内開拓使以來國費を以て開鑿したるもの四千二百六十一里、その他は地方團體又は私人の開設に係るものなり。

交通の便否は産業の發達に至大の關係あること云ふ迄もなし。然るに地方にありては、根室支廳管内の一方里當道路延長二十三町といふ如き甚しきを除くも、大部分一方里僅かに一里三十五町に過ぎず、市部を入るゝも尙ほ二里餘の貧弱さなり。しかも從來の道路は所謂拓殖道路にして、單に延長を主とし、極めて簡單なる工法に依れるものなれば、新設と同時に此等粗道の改修を要すべきもの尠しとせず、加之近年自動車の發達に伴ひ、樞要地區に通ずる國道、地方費道は運輸經濟上又軍事上極めて重要性を帯び來れるを以て、漸次自動車道の完成に努めざるべからず、道路の完備は實に拓殖の先驅なり。

本道に於ける商港の主なるものは、函館・小樽・室蘭・釧路・留萌・網走・稚内・根室の八港とす

函館は本道の海産市場として殷盛を極め、小樽は農産物・木材及石炭の集散に依て近年異常の發達を遂げ、室蘭は石炭港として重きをなし、釧路は木材・石炭の移出港、根室は水産物の集散港、網走は北見沿岸唯一の避難港、稚内は樺太との連絡港、又留萌は將來の石炭港として、各特有の使命を擔へり。

昭和五年中入港船舶二十一万二千七百十四隻、噸數二千二百八十万五千三百八十八噸にして、之を大正九年の好況時代に比するも、船數に於て二十七割一分、噸數に於て九割の増加を示す。以て本道海運界の進展と、産業界の發達をトすべきなり。

五、商業及金融

本道移輸出は逐年異常の發達を示し、昭和五年に於ては移輸出三億三千四百四十万四千九百四十三圓、移輸入三億四千六百九十四万一千二百十圓、合計六億八千三十四万六千五百五十三圓に達せり。

先づ内國移出入に就て見るに、本道より府縣に移出するものは、開拓使の中頃迄は水産物の外殆ど見るべきものなかりしが、其後産業の發達に伴ひ、水・農・礦・林産等自然的産物の外工産品の移出を見るに至り、新聞紙・バルブ・亞麻製品・セメント・澱粉・小麥粉・罐詰類・乳製品等を其主要なるものとす。府縣より移入するものは米・酒類・味噌・醬油・麵類・衣類・煙草・肥料等にして、本道

よりは主として原料品を移出し、府縣よりは加工品を移入する如き關係にあるも、由來本道は天與の資源に富み、動力燃料亦豊なるを以て將來一大工業地として躍進すべきは豫想に難からざる所なり。

昭和五年

移出額 二九三、六六、九一九

移入額 三〇、三三、二六四

入超 二六、三三、七三三

外國貿易は、安政六年初めて箱館が開港され、明治六年の輸出入は合計五十万圓に過ぎざりしが、爾來道内の開拓、産業の發達に従ひ、昭和六年に於ては輸出二千二百二十六万二千六百八十一圓、輸入千七百三十七万八千九百四十五圓、合計三千九百六十四万千百圓に上れり。本道の貿易は普通貿易及漁業貿易の二種にして、普通貿易における輸出品は農産・工産を主とし、林産・水産・礦産之に亞ぎ、仕向地は昭和四年迄支那を第一とせしが日貨排斥の爲め昭和六年は漁業關係に於て蘇領亞細亞を第一とし、支那・英國・北米合衆國・佛國・比律賓・獨逸之に亞ぐ。輸入品は農産・工産・礦産・林産等にして、蘇領亞細亞を第一とし、支那・北米合衆國・佛領印度・關東州之に亞ぐ、漁業貿易は漁夫食糧等を仕込み(輸出)、勸察加・オコック・ニコライエフスク・サガレン・沿海洲方面に出漁し、漁獲物を積載歸航(輸入)するものにして、普通貿易外に一系統をなせり。

商業の發達に従ひ金融機關の整備亦見るべきものがあるが、開發途上にある本道はあらゆる方面に資金の需要繁く、一般金利他府縣に比し高率なるを免れず。

銀行は明治六年三井組が札幌・函館に支店を設け爲替業務を經營せるに始まり、爾來拓殖事業の進

展と共に今日の盛況を見るに至れり。特殊銀行たる北海道拓殖銀行は、明治三十二年本道拓殖開發に關する資金供給の目的を以て設立され、現に道内二十ヶ市町村に其支店を置き、拓殖金融の中心を成せり。普通銀行は昭和六年末現在本店數六、支店數五十四、貯蓄銀行は本店二、支店八を有し、又道外に本店を有する銀行支店は其數三十五に上り、共に本道金融界に重要な役割を演じつゝあり。

銀行預金及貸金は財界の變動に依り時に消長を免れざるも、昭和六年末に於ける預金殘高は二億四千五百八十一万餘圓、貸金殘高は二億七千八百八十四万餘圓を算し、之を十年前に比すれば、前者一倍六分、後者一倍四分の激増を示し、更に第一期拓殖計畫樹立當初の明治四十二年に比すれば、前者は實に十倍六分、後者は十三倍の増加にして、以て本道拓殖事業の發展と富力の増進を窺知するに足るべし。

次に昭和六年末に於ける預金及貸金殘高を以て前年末に比較すれば、前者の一千九百四十九万餘圓減少に對し、後者は千六百三十三万餘圓の増加を示し、貸金殘高の預金を超過すること三千三百二十七千餘圓にして前年とは全く反對の狀態を示し、資金融通の稍々常態に復せるを知る、財界未だ回復せずと雖も其好轉を看取し得べし。

本道に本店を有する會社數は二千五百五十五、此資本金二億八千二百餘万圓にして、之を業態別に見れば左の如し。

業態別	会社数	資本	業態別	会社数	資本
農業	八七	七、三四、三〇〇 <small>円</small>	商業	一、〇六九	二、二八、八二七 <small>円</small>
水産業	一〇〇	九、八五、九〇〇	運輸業	三三五	五三、九一〇、七五〇
工業	二六	一、五四五、〇〇〇	計	二、一五五	二八二、一四四、一五三
	五四八	六、九九、三七六			

物價は近年低落の一途を辿り（物に依り例外あるも）小樽市場に於ける主要物價は、大正十一年を一〇〇とする昭和六年の指數最高一三二最低二九平均六八を示す、之を全國十三主要都市と比較するに昭和四年十二月中の平均價格を一〇〇とする昭和六年末の小樽物價指數は七五にして、十三都市平均七二・八より二・二高きも、京都市に比し三・〇の低位にあり。

勞働賃銀は市場の不況、事業經營の合理化に依り、失業者の増加となり、勞働力過多の結果必然的に低下を來たし、小樽の大正十一年を一〇〇とする昭和六年の指數は、最高一四九最低四一平均八一を示す。之を全國十三都市と比較すれば、大正十年乃至十二年を一〇〇とする昭和六年の小樽市賃銀は八四・二にして十三都市平均四・八〇を超えること〇・二、最高大阪の九一・三より下ること七・一なり。

六、産 業

本道産業は時に弛張ありしも、大體に於て順當の發達を遂げ、殊に歐洲戰時の好況に乗じたる各種工業の勃興と農産物の海外輸出激増とは、駢行翼進全く從來の面目を一新したり、但昭和六年の激減は打續く財界の不況と農産物の凶作に依る一時的現象にして之を以て常態と見做すべからざること勿論なり。

年次	農産	畜産	林産	水産	鑛産	工業	合計
明治四十二年	三、〇八四、三三〇 <small>円</small>	一、三六四、三〇三 <small>円</small>	五、六四九、五三五 <small>円</small>	一〇、五八九、六六三 <small>円</small>	七、三三三、三〇七 <small>円</small>	二、八〇三、〇八五 <small>円</small>	六七、七三三、〇一三 <small>円</small>
大正八年	一、九四、一三三、九九二	九、一八五、六〇四	五九、八二七、二〇四	一一、〇、五五四	八一、七六八、六〇二	六、六九九、九九一	六三二、七三四、九〇六
昭和四年	一、五〇、一七九、四〇六	一、五、四七八、三二八	二八、四一六、三三五	一〇、〇九〇、三四一	五、六〇、七七二	一、八七、三三七、七三〇	五四八、二二二、八〇七
昭和六年	五九、八五一、九四〇	一〇、六〇一、七三四	一四、七四七、〇四一	六九、三四六、七〇一	三七、〇五三、九七二	一、三三〇、〇五一、三三〇	三三二、五五一、七〇七

農業は本道産業の中樞をなし、昭和六年末に於ける農業戸数は十九万二千九十八戸に達し、全道戸数の三割八分を占め、其耕地面積八十七万町歩に及び、併かも尙ほ七十一万町歩の未開適地を殘存し更に移民を招來して生産を増大すべき餘地充分なり。地味は概して豊饒にして、穀物・果樹・蔬菜、一として栽培に適せざるなく、重要作物は米・麥類・馬鈴薯・菜豆・大豆・小豆・豌豆・玉蜀黍・亞麻・薄荷・除蟲菊・玉葱・林檎等なり。

石炭鑛業概況

總説

一、沿革

本道石炭鑛業の起源は確實なる記録の徴すべきものなきも、赤山紀行に「寛永十一年（西曆一七九九年）「オタノシキ」川（釧路國釧路郡）より左に原を見て行けば原愈々廣く「クスリ」川迄は皆原なり。此附近石炭あり、又桂戀（釧路國釧路郡）の附近なる「シヨンテキ」海岸には磯の中にも石炭夥しく總て「トカチ」嶺より「クスリ」嶺迄の内山谷海濱とも石炭なり。今度「シラヌカ」（釧路國白糠郡）にて石炭を掘りしに坑内凡そ三百間に至れども石炭毫も盡くることなしと云ふ」と記せる一節あり。之れ恐らく本道石炭鑛業の嚆矢なるべく、實に今を距ること百三十四年前なり。

其後弘化三年（西曆一八四六年）に至り幕府大に蝦夷地の開拓を計畫し庶民を移住せしめ、特に鑛山の開發に意を注ぎ、其の發掘を欲するものには之を許可し、尙成功者には身分に應じて士には加祿庶民には金又は物品を賞し、立身出世の途を啓く。之より諸鑛山開發せられ、白糠炭山亦此年開坑、

安全燈を使用せりと傳ふ。

尋で安政三年（西曆一八五五年）四月、加賀出生の漁夫忠藏なるもの、後志國岩内郡「カヤマ」にて漁具材伐採の爲め登山の際石炭を發見、翌年松前藩人を遣はして之を掘探し、呷入三十個を岩内に運搬す。

又當時松浦武四郎蝦夷地を跋涉し空知川を溯りし際沿岸に於て炭層の露出を認めしこと、其の空知日誌に記せり。

文久元年（西曆一八六一年）幕府、米國地質鑛山學士ブレイキ、バンベリー二氏を聘し本道地質鑛物を調査せしめし時、兩氏茅沼炭鑛を以て調査區域中有用なるもの第一位に置けりと云ふ。翌年同鑛開坑、大島高任をして擔當せしむ。

慶應三年（西曆一八六六年）幕府は英人イー・エツチ・エム・ガール氏を鑛山師として本坑に聘し二哩餘の軌道を敷設し、英國より蒸氣機關車を輸入し四噸車を運轉す、是れ本道本邦鐵道敷設の嚆矢なり。

徳川幕府は夙に本道鑛業に著目し、特に其末期開港の議起るや、白糠・茅沼炭山に重きを置き、銳意其開發に努め、外人を招聘し新知識を輸入し、斯業開發上多大の事蹟を遺せり。

明治二年（西曆一八六九年）本道に開拓使廳を置き、同年八月蝦夷を改めて北海道と稱し、鑛山事

務の統轄せらるゝや、岩内に詰所を置き茅沼炭山を管理す。開拓使亦本道鑛業を重視し、一の財源たらしめんとし、特に石炭鑛業の開發に意を注ぎ、資金の充實、外人の招聘、人材の登用、諸法規の制定、交通機關の設備等種々の施設を爲し、以て斯業發展の緒を開けり。

明治四年八月、米人トーマス・アンチセル氏諸鑛山を巡視し岩内炭山改良の議を進む。

同五年九月、自今開鑛せんとするものは鑛脈の性質、鑛業の成否及願人身元等を糺し、確實と認めたる時は開拓使限り之を許可し後開申すべきこととし、鑛山開採略則を定む。

同六年二月、全道地質鑛物調査順序を商議し、地質鑛物學者米人ヘンリー・スミス・ライマン及モンロー二氏を招聘し、助手を附し地質鑛物を調査せしめ、同年八月該調査の略々成るや、從來の開採略則を廢し日本坑法を制定し、開拓使本廳をして全道鑛山を管理せしむ。

同九年七月、茅沼炭坑を物産局の所管となす。

此年ライマン氏北海道地質總論を呈す。

明治十年(西曆一八七七年)十二月、「ボロナイ」炭山開坑の議決す。

同十一年二月、本道に於ける鑛業は近寒積雪の爲め操業日時尠きを以て、自今鑛區税は月割を以て徴收する事を公布せらる。

同十二年二月、鑛山師米人クロフォード・ゴウジョー氏を鑛山監督に任じ、坑夫頭エドワード・バ

レー、エツネ・タウス兩氏を雇入れ「ボロナイ」炭山を開坑す。同三月炭山より「ボロナイフト」に至る鐵道線を測定す。

同年七月「イワナイ」炭山に電信を開く。

同年十二月「ボロナイ」より「エベツ」「サツボロ」を経て小樽港手宮に達する鐵道の敷設を許し、十三年(西曆一八八〇年)一月該工事に着手、同年十一月手宮札幌間鐵道開通す。

明治十五年開拓使廳を廢し、札幌・函館・根室の三縣を置き鑛山事務を工部省に屬せしむ。

開拓使廳時代十四年間は本道鑛業發展上大に貢獻する處あり。就中ライマン氏一行の調査の如き、苦業三年、當時未開不便にして踏査困難を極めたるにも拘はらず、幾多の危険窮迫を冒して遂に全道地質狀態を調査し、有田鑛物の分布を明かにし、特に意を炭田の開發に致し本道石炭鑛業の基礎を作れり。即ち現時隆盛を誇る夕張其他の各鑛は、當時の調査が開發の因をなせるものにして、其勞に負ふ所誠に大なりと謂ふべし。且つライマン氏の建言、クロフォード氏の調査に依り幌内手宮間鐵道開通を見、單り炭鑛經營上のみならず、石狩平野開拓の端を開き、鐵道敷設の緒を作りしが如き、本道開拓史上特筆大書すべき功業を遺せり。

明治十五年一月、開拓使廳廢止後は所謂三縣一局時代にして、本道の鑛業は炭鑛鐵道と共に先づ工部省に屬し、後北海道事業管理局に移り、次で幌内炭山及鐵道は炭鑛鐵道事務所なる一分科を設け管

理することゝなれるが、此期間鑛業は何等發展の見るべきなく、寧ろ其發達を阻害せるが如き觀あり。明治十九年(西曆一八八六年)一月、三縣を廢し北海道廳の置かるゝや、鑛物の試掘及借區願は總て本廳限り之を許否し後開申せしむることゝし、更に全道の地質鑛床の精密なる調査を企圖し、山内徳三郎氏を主任とし大島六郎・桑田知明氏等之を助く。又「ソラチ」煤田調査を計畫し大日方一輔・米倉清族・前田精明諸氏之を助く。

此年「イクシユンベツ」炭山を開坑す。

同年八月、炭價下落收支償はざるに因り、空知集治監をして幌内炭山探掘を管理せしむ。

明治二十年鑛山事務取扱手續を定め「ソラチ」煤田調査を地質鑛物調査事業に合併し、技師西山正吾氏を加ふ。

同二十一年岩内郡茅沼炭山及空知郡幾春別炭山の借區を許す。地質鑛物調査主任山内氏、林務に轉じ、理學士河野鯨雄氏をして之に代らしめ、更に坂市太郎・石川貞治・神保小虎・加藤清の諸氏を増員す。

同年九月、空知郡空知炭山の試掘を許可す。

同二十二年北海道炭礦汽船株式會社の前身なる北海道炭礦鐵道株式會社成立し「ボロナイ」炭山及所屬物件を拂下げ、又空知・夕張二炭山を開く。

二十三年七月岩見澤・砂川間、同年七月夕張線、二十五年二月空知・空知太間の各鐵道敷設工事を起し、同年八月何れも竣成す。

之より木道石炭鑛業は漸く民業として重きを爲すに至り石狩・天鹽・釧路の各地方に於て企業せらるゝもの相次ぎ、以て今日の盛況を致せり。

此間鑛業行政上にも幾多の變遷あり、即ち明治二十三年九月鑛業條令の制定を見、同年十一月鑛山事務を鑛山局に移す。

明治二十四年北海道地質調査報文を出版す。

同二十五年六月札幌鑛山監督署を置き本道鑛業を管理せしめ、後同署を廢し秋田鑛山監督署の管轄に移し、更に東京鑛山監督署に移せしが、同二十九年再び札幌鑛山監督署を設置す。

明治三十八年現行鑛業法及鑛業登錄令、同四十二年砂鑛法、大正四年石炭坑爆發取締規則、同五年鑛業警察規則及鑛夫勞務扶助規則發布せらる。

大正二年六月、鑛山監督署を鑛務署と改稱し、同十三年十二月更に鑛山監督局と改む。

大正三年七月 社團法人北海道石炭鑛業會設立せらる。

二、炭 田

石炭鑛業概況

豫想炭量

一、三〇四、七〇一、〇〇〇

東北地方埋藏炭量

九二四、八五九、〇〇〇 噸

内 譯

現存炭量

一五一、七二四、〇〇〇 噸

推定炭量

一五七、六七三、〇〇〇

豫想炭量

六一五、四六二、〇〇〇

關東及中部地方埋藏炭量

(茨城・長野・新潟・福井)

二九一、三五六、〇〇〇 噸

内 譯

現存炭量

五六、八七六、〇〇〇 噸

推定炭量

一三一、二二八、〇〇〇

豫想炭量

一〇三、二五二、〇〇〇

近畿中國及四國地方埋藏炭量

(山口・京都・三重・奈良・和歌山・鳥根・岡山・香川)

八六五、八三五、〇〇〇 噸

内 譯

現存炭量

四八六、九四九、〇〇〇 噸

推定炭量

二〇一、五五五、〇〇〇

豫想炭量

一七七、三三一、〇〇〇 噸

亞 炭 埋 藏 量

(山形・宮城・愛知・岐阜等)

四七三、四六〇、〇〇〇 噸

内 譯

現存炭量

六五、七六五、〇〇〇 噸

推定炭量

一三二、五八二、〇〇〇

豫想炭量

二七五、一一三、〇〇〇

全國埋藏炭量

一六、六九一、三三三、〇〇〇 噸

炭層は全部第三紀層に介在し、頁岩・砂岩・蠻岩・礫岩等と互層をなす。

之を各炭田に分ち略述すれば左の如し。

天、北炭田 北見國宗谷・枝幸・天鹽國天鹽の三郡に跨り宗谷山脈の東西兩側にあり。北は宗谷海

峽の近くより南は天鹽川本流附近に及び南北六十軒、東西八軒乃至十六軒に互る、之を宗谷東區、同

西區、幌延區及枝幸區に分つ。

炭層は宗谷東區に於て主要なるもの三層あり、厚さ〇・九米、一・八米、二・七米なり、西區に於て

は三層乃至五層厚さ〇・六米乃至四・二米に及ぶ。幌延區に於ては多數あるも主要なるものは六層にし

て一・二米乃至四・五米、枝幸區に於ては數層あるも採掘に適するは一・八米の一層なり。

炭質は褐炭に屬するものなるべく、暗褐色乃至黑色にして粘結性なく、樹脂光澤又は弱光澤、堅質なるもの及細片に破壊し易きものとあり。發熱量四、五〇〇乃至六、五〇〇カロリーなり。

中川炭田 天鹽國中川郡の南部を占め北は常盤村咲來より南は美深町紋穂内に至る天鹽川東岸に沿ふ區域にして咲來市街地は北端に、恩根内市街地は略中央に位す。

炭層數多きも主要なるは各上位より北部に於ては四尺層・六尺層、南部に於ては四尺層（一番層）三尺層（二番層）及下層（厚〇・四米）なり。

炭質は黒褐炭に屬し大部分は褐色土狀光澤を呈し一部黒褐色瀝青光澤強きものあり、不粘結性にして發熱量五、〇〇〇乃至五、五〇〇カロリーなり。

苦前炭田 天鹽國苦前郡苦前・羽幌・初山別の三町村に跨り東は石狩國境に接し、北は初山別川より南は古丹別川支流「チエボツナイ」川に達し、西は日本海に面す、南北二十八軒、東西約十二軒其廣袤三百八平方軒あり、「セタツコナイ」及羽幌の二區に分つ。

炭層數多きも「セタツコナイ」區に於ては「セタツコナイ」上流に主要なるもの三層あり、下位より一番層（〇・九米）、二番層（〇・六米）、三番層（〇・九米）と稱し、「チユクベツ」上流に下位より二番層（一・八米）、三番層（〇・九米）あり。羽幌區に於ては主要なるもの一番層（〇・四米）、二番層（〇・五米）、三番層（二・二米）、五番層（〇・七米）の四層あり。

炭質は亞瀝靑炭と稱すべきものにして、多くは光澤鈍く層面に沿ひ分離し易く褐炭の薄片を挟むこと多く、不粘結性にして發熱量四、五〇〇乃至五、五〇〇カロリーなり。

留萌炭田 天鹽國留萌町及小平藥村の大部分を占め北は苦前郡界に及び南は國鐵留萌線を境とし東は石狩國境を以て雨龍炭田に接し廣袤約四百六十二平方軒あり。

炭層は小平藥北部、小平藥川北岸、小平藥川鷺ノ巢澤、下ケネベツ下流、同上流、ボロオキナイ、留萌炭礦、大和田炭礦の各方面に數層又は十數層現はれ、厚さ〇・五米より八・二米に及ぶも概して斷層多く下ケネベツ上流の如き褶曲又は斷層の爲め同一炭層にして二個所以上に現出するものあるが如し。

炭質は普通黑色にして樹脂光澤を有し斷口は屢々介殼狀をなし粉炭となり易く低度瀝靑炭に屬す、區域により變化あれども概して不粘結性にして、發熱量小平藥川沿岸四、五〇〇―一六、〇〇〇、ケネベツ川五、〇〇〇―七、〇〇〇、留萌炭礦六、五〇〇―七、二〇〇カロリーなり。

雨龍炭田 石狩國雨龍郡沼田村に屬し雨龍川支流「ボロニタチベツ」川の流域にして東は雨龍川本流と「ボロニタチベツ」川の分水嶺、北及西は石狩天鹽國境、南は國鐵留萌線を界とし、東西十四軒、南北約二十軒、廣袤二百七十七平方軒あり、昭和區及雨龍區に分つ。

昭和區に於ては中央部に一番層乃至八番層厚さ一・四米乃至二・一米、東部に十一番下層（一・三米）

十一番層(二・四米)、十二番層(一〇・八米)、西部に十四番層乃至十九番層及番外層あり、厚さ〇・六米より六・九米に及ぶ。

雨龍區に於ては四番層(〇・八米―一・三米)、五番層(二・二米―二・四米)、西翼本層(七・〇米)、東翼本層(四・九米)、同下層(二・四米)、同上層(一・〇米)、八番層(二・一・一米)、九番層(二・八米)、十番層(二・五米)なり。

炭質は深黒色にして樹脂光澤を有する所謂瀝青炭に屬し、粘結性のものと稍粘結するものとあり、發熱量六、〇〇〇―八、〇〇〇カロリーなり。

石狩、炭田、石狩國空知・夕張兩郡に跨る含炭地にして北は空知川沿岸より南は夕張川上流一帯の區域を占め、石狩・膽振兩國々境山脈に達し南北百軒、東西十二軒に互り面積一千二百平方軒を占む北より芦別區、百戸區、歌志内區、砂川區、美唄區、幌内區、萬字區、夕張區、大夕張區、登川區の十區に分つ。

芦別區 炭層は上、中、下の三層群ありて數十枚の炭層あり、主要なるもの

- 上層群 七層 〇・三米乃至三・三米
- 中層群 十六層 〇・六米乃至一・八米
- 下層群 七層 〇・六米乃至一・四米なり

百戸區 主要なる炭層は上層群にして十枚あり、〇・六米乃至二・七米なり。

歌志内區 芦別及百戸區の西に連り主要なるものは下層群に屬する九層にして、平均厚〇・七米乃至一・八米、次は空知上層群に屬する十層にして平均〇・六米乃至一・八米なり。

砂川區 下層群に屬するものは十二層、厚さ〇・六米乃至二・二米、空知上層群に屬するものは〇・九米乃至二・四米の數層なり。

美唄區 砂川區の南に接し上層群三層(〇・三米乃至〇・六米)、中層群九層(〇・五米乃至一・八米)下層群八層(〇・四米乃至一・八米)あり。

幌内區 空知郡三笠山村にあり、美唄區の南に奔別斷層を境として連り、上層群特に幾春別夾炭層に屬する炭層を主要なるものとし十三層(〇・九米乃至二・四米)に達す。

萬字區 幌内區の南に連り栗澤村及岩見澤町に跨り、下層群三層(一・五米乃至三・九米)、上層群五層(〇・六米乃至二・四米)あり。

夕張區 萬字區の南に位し、夕張町の北方に在り、角田村の一部をも含む。

夕張方面にては夕張下層(〇・六米乃至一・二米)、夕張本層(〇・六米乃至七・三米)を主とし、尙上位に夕張上層(一・一米)、西北部に二股層(一・一米)、中央附近に最上層(〇・五米)あり。

大夕張區 夕張町の東部に在り、下層群に屬し炭層數四、内一層は厚さ一・二米なるも他は一・八

米乃至七・三米なり。

登川區 夕張町の南端にあり石狩炭田の最南端に位し、南は分水嶺を以て勇拂炭田と接す、全部下層群にして眞谷地に六層(二・一米乃至四・八米)、登川に數層あるも本層(二・四米)を主とす。

本炭田所産の炭質は炭層極めて多數なる爲め一様ならず、漆黒色又は暗黒色或は黒褐色にて樹脂光澤強きもの又は弱きもの等あり、良好なる瀝青炭にして、概して下層群に屬するものは膨脹粘結性強く、上層群に屬するものは粘結性無く、中層群に屬するものは粘結性強きものと然らざるものとあり本道炭中上位に屬し優に九州炭に匹敵す。

樺戸炭田 石狩國樺戸郡新十津川・浦臼及月形の三村に跨り、南北二十軒、東西四軒乃至八軒の區域にて廣袤百二十三平方軒あり、炭層は北部一番層より四番層、厚さ〇・五米乃至〇・八米、中央部一番層より五番層、厚さ〇・三米乃至二・六米、西南部一番層(〇・九米)、二番層(二・八米)、三番層(三米―五・二米)あり。

炭質は一般に良好ならず、黒褐色乃至暗黒色にして光澤無く褐炭の部に屬すべきか、發熱量五、〇〇―五、三〇〇カロリーなり。

勇拂炭田 膽振國勇拂郡厚真・穂別及占冠の三村に跨り、一部日高國沙流郡に及ぶ。穂別區・邊富内區及「ニニウ」區に分つ。

穂別區 厚真村及穂別村にあり、三層内外を認むるも主要なるは本層(一・八米乃至六・〇米)のみなり。

邊富内區 穂別村邊富内を中心とし一部日高國沙流郡に及び、炭層は多數あるも主なるものは、北部にては上位より一尺層、八尺層、四尺層、西南部にては一番層乃至四番層(〇・三米乃至四・一米)、南部にては一番層(一・五米乃至一・六米)、三番層(一・九米)なり、ニニウ區にては上位より一番層乃至四番層(〇・四米乃至二・五米)なり。

炭質は瀝青炭にして漆黒色にて光澤あるもの、稍褐色を帯びたるもの及暗黒色にして光澤鈍きもの等あり、不粘結性にして、發熱量五、〇〇―七、三〇〇カロリーなり。

白糠炭田 釧路國白糠郡及阿寒郡に跨り廣袤約九百平方軒に及ぶ石狩炭田に次ぐ廣大なる區域にして、白糠區・縫別區・雄別區・上流區の四に分つ。

白糠區 白糠郡白糠村及阿寒郡舌辛村に跨る幅約十二軒の南北に細長き區域にして、炭層は合計十七層あり。〇・五米より三・二米に及ぶも厚きものは夾み多し。

縫別區 白糠村に在り、白糠區の西に連り南は十勝炭田に接す。炭層は九層あり、縫別川上流に一番層乃至四番層(〇・三米乃至一・七米)、茶路川支流東南部に五番層乃至八番層(〇・六米乃至二・三米)、同西北部に九番層(〇・六米)あり。

雄別區 阿寒郡舌辛村に在り、炭層數薄きものを數ふれば約五十層に及ぶも主要なるものは上位より上層(一・三米) 徹別層(一・一米) 下層(本層(五米)) 等なり。

上流區 白糠・音別兩村に跨り雄別區及縫別區の西に連り南は十勝炭田に接す。炭層數多きも主要なるものは南部に於ては上位より上五尺層(一・六米)、本層(二・五米)、下五尺層(一・六米)、北部の西南に下一番層乃至四番層(〇・四米乃至二・五米)、南に中一番層乃至中八番層(〇・三米乃至三・四米) 及上一番層乃至上六番層(〇・四米乃至一・四米) あり、又一部に此等の上位に舌辛一番層乃至舌辛六番層(〇・三米乃至一・四米) あり。

炭質は概ね黒色又は暗褐色を呈し樹脂光澤乃至土狀光澤を有し、發熱量五、五〇〇—六、八〇〇カロリーなり。

尺別炭田 十勝國十勝郡浦幌村及釧路國白糠郡音別村に跨り、炭層は東部に八層(〇・四米乃至四・八米)、西部に三層(一・二米乃至四・二米) あり。

炭質は暗褐色又は黒色を呈し多少樹脂光澤を有し、發熱量五、五〇〇—六、五〇〇カロリーなり。

釧路炭田 釧路國釧路郡東半部より厚岸郡西部に跨り東西二十四軒、南北十二軒なり。

炭層は全部にて九層あるも現在稼行に堪え得るものは二、三層に過ぎず、〇・六米より三米に膨縮す炭質は黒色不粘結性にして樹脂光澤を有し、發熱量五、五〇〇—六、〇〇〇カロリーなり。

茅沼炭田 後志國古宇郡泊村茅沼に在り、約二十三平方軒の小炭田にして、炭層は一番層より六番層迄六層あり〇・五米乃至五・二米に及ぶ。

炭質は瀝靑炭に屬し黒褐色にて樹脂光澤あり、一般に粘結性少なきも一部粘結性あり、發熱量七、三〇〇—七、七〇〇カロリーなり。

以上の外山部・千歳等の小炭田あり。

三、鑛區

鑛區は本道の開發と共に漸次増加せるが、時に經濟界の影響により著しき變調を示すことあり。即ち大正五、六年より七、八年の好況時には試掘鑛區數著しく加はり、其後經濟界の恐慌に依り權利を拋棄するもの續出したるが如きはなり。但採掘鑛區は之と異り、一時的經濟事情の爲め甚しき變化を見ず。之れ本道鑛業は地勢・氣候・交通其他の關係上、初めより大資本を要し、一時の好況に乘じ泡沫的企業を許さざると同時に、大資本家は恐慌に際して隱忍能く難關を支持し得るが爲めなり。(第二表)

第二表 石炭試掘採掘鑛區數及面積

(昭和七年末日現在)

國別	種別	試掘		採掘	
		鑛區數	面積	鑛區數	面積
渡	鳥	4	100,970.9	—	—
後	志	2	19,815.0	1	32,443.8
石	狩	273	6,485,979.3	56 41	2,616,173.1 1,029,737.9
天	鹽	119	3,149,303.2	24	483,171.7
北	見	36	806,373.8	1	25,875.1
膽	振	32	872,186.2	1	8,708.7
日	高	7	190,478.8	—	—
十	勝	21	517,427.3	8 26	389,396.8 623,222.2
鋼	路	95	2,507,239.1	9	224,210.7
根	室	—	—	—	—
千	鳥	—	—	—	—
計		589	14,649,773.6	65 102	3,038,013.7 2,394,926.3

◎採掘鑛區欄太字ハ現在稼行セルモノヲ示ス
◎面積ノ單位ハ(アール)トス

四、稼行炭鑛及産額

昭和七年中に於ける稼業炭鑛は採掘三十七個所、試掘十六個所、合計五十三個所にして、其鑛名・産額・鑛業權者左の如し。

炭鑛名	位 置	産 額	鑛 業 權 者	備 考
夕張	石狩、夕張	七四三、七三三	北海道炭礦汽船株式會社	
新夕張	同	二九〇、二九九	同	
萬字(美濃川)	石狩、空知	二九四、二五八	同	
登川	石狩、夕張	一五三、五四〇	同	
眞谷	同	一四三、三三三	同	
空知	石狩、空知	二七三、八九七	同	
幌春	同	二八六、八三六	同	
幾春	同	一一四、三九〇	同	
二股	石狩、夕張	一四、一三〇	同	
三菱美唄	石狩、空知	六四五、三三四	三菱鑛業株式會社	
芦別	同	一三六、一九八	同	
大夕張新坑	石狩、夕張	三〇五、二五七	同	
砂川	石狩、空知	五三三、八四五	三井鑛山株式會社	
三井美唄	同	二五、〇二二	同	
上歌志内	同	一四、四九二	住友炭礦株式會社	
歌志内	同	一一、九四四	同	

第三表 石炭産額調

年次	産額	数量	年次	産額	数量	年次	産額	数量
明治元年	120	120	明治23年	185,271	185,271	大正元年	1,884,845	1,884,845
2年	410	410	24年	79,781	79,781	2年	2,026,805	2,026,805
3年	1,224	1,224	25年	228,256	228,256	3年	2,586,714	2,586,714
4年	2,653	2,653	26年	646,453	646,453	4年	2,611,562	2,611,562
5年	2,985	2,985	27年	387,934	387,934	5年	2,967,701	2,967,701
6年	7,730	7,730	28年	890,782	890,782	6年	3,614,640	3,614,640
7年	1,101	1,101	29年	457,164	457,164	7年	4,135,561	4,135,561
8年	1,081	1,081	30年	596,195	596,195	8年	4,762,833	4,762,833
9年	2,264	2,264	31年	592,005	592,005	9年	4,509,590	4,509,590
10年	3,537	3,537	32年	633,282	633,282	10年	3,605,619	3,605,619
11年	7,935	7,935	33年	654,506	654,506	11年	4,335,065	4,335,065
12年	284	284	34年	820,322	820,322	12年	4,844,505	4,844,505
13年	524	524	35年	964,096	964,096	13年	5,192,791	5,192,791
14年	4,035	4,035	36年	1,053,355	1,053,355	14年	5,639,103	5,639,103
15年	3,678	3,678	37年	1,078,168	1,078,168	昭和元年	5,905,979	5,905,979
16年	17,301	17,301	38年	1,177,511	1,177,511	2年	6,537,860	6,537,860
17年	31,684	31,684	39年	1,454,018	1,454,018	3年	6,847,308	6,847,308
18年	36,071	36,071	40年	1,384,349	1,384,349	4年	7,172,014	7,172,014
19年	51,384	51,384	41年	1,607,304	1,607,304	5年	6,726,579	6,726,579
20年	63,113	63,113	42年	1,691,930	1,691,930	6年	6,134,037	6,134,037
21年	95,282	95,282	43年	1,591,695	1,591,695	7年	6,054,709	6,054,709
22年	113,258	113,258	44年	1,702,051	1,702,051			

五、需給關係

本道は工業未だ發達せざる爲め石炭の需要少なく、主として内地に販路を求む。最近の需給關係を示せば

採炭	昭和五年	昭和六年	昭和七年
採炭	六、七二六、五七九噸	六、一三四、〇三七噸	六、〇五四、七〇九噸
前年	八一八、四九七	九九一、三三六	九八九、四〇九
内國計	七、五四五、〇七六	七、一二五、三七三	七、〇四四、一一八
内國移送	三、〇二六、五三九	二、八四八、三三三	三、一三八、七七六
外國輸送	一四四、〇六三	八九、二八四	一一四、九八五
内外船舶燃料	一、〇九三、〇一九	一、〇二二、六五四	八一九、四五二
鐵道納炭	四一〇、一九六	四三二、四一一	三七〇、四二七
道内消費	一、八七九、九二三	一、七四三、二八二	一、六五一、一九〇
計	六、五五三、七四〇	六、一三五、九六四	六、〇九四、八三〇
年末現在貯炭高	九九一、三三六	九八九、四〇九	九四九、二八八

にして内地移送高は産額の約五割、外國輸出は約二分、内外船舶燃料は約一割五分、鐵道納炭高（道内使用）は約六分、道内消費高は約二割七分なり。

内地に於ける仕向先は左の如し。

方 面	年 別		
	昭 和 五 年	昭 和 六 年	昭 和 七 年
東 北	五四五、九五四	四九四、二六五	五四二、二三二
京 濱	一、三三一、七一六	一、二七九、一二四	一、三〇三、二五一
關 東			五三
中 部			九七
北 陸	四二九、一一〇	四〇四、一八五	四二四、四三九
山 陰	一一、四一八	一九、〇六八	二〇、七八八
伊 勢	三三九、七五二	二九八、四七八	四三五、〇〇四
阪 神	三三三、六一四	三三〇、八四〇	三九四、一一三
瀬 戸 内	四、五三五	一、〇〇四	六、〇二三
四 國	一、一一二		一五
九 州	六、七八一	二、二一五	四四
樺 太	一二、九八三	三、六四七	三、六一八
朝鮮	九、五六四	一四、四九〇	九、〇九九
其 他		一、〇一七	
計	三、〇二六、五三九	二、八四八、三三三	三、一三八、七七六

六、運 輸

運輸の便否、運賃の高低が石炭鑛業の發達に至大の關係あるは勿論にして、特に本道の如く山元より遠距離の市場に搬出を要するものにおいては其影響最も甚し。本道炭鑛の中心石狩地方より港頭に至る距離及鐵道運賃は第四表に示すが如く、最近距離を室蘭真谷地（沼の澤驛）間の二二九・八籽、二圓三十六錢、手宮幌内（幌内驛）間の八九・二籽、一圓八十九錢とし、遠距離は函館陸送の如き特別な場合を除き、室蘭上芦別間の二二三・六籽、三圓二十四錢、手宮夕張間の二五七・七籽、二圓六十八錢を示す。之を筑豊地方の一〇・八籽三十九錢乃至五六・九籽一圓四十一錢に比すれば其懸隔の甚しきを見るべく、本道炭の常に九州炭に壓倒せらるゝ所以を首肯すべし。嘗に運賃のみならず輸送設備、港灣施設に於て九州地方に比し不利なる點多く、爲めに事業の發展を阻害さるゝこと少しとせず。本道鐵道は石炭輸送に始まること沿革の項に述べたる如く、明治二十二年北海道炭鑛鐵道株式會社の創立せらるゝに及び其業益々進み、明治三十八年末調査に據れば、總延長九六一籽に對し同社所有鐵道三三三籽にして實に其三四・七%を占む。炭鑛の開發が如何に交通機關の發達を促し、延いて本道の拓殖に貢獻せしかを知ると同時に、往時特約又は特定運賃制を設け斯業の保護獎勵に努められたるの偶然ならざるを察するに足る。（第四表）

本道鐵道總延長哩數は大正十年一、九八〇桿、昭和七年末三、五一一桿（私線五〇五桿を含む）にして最近十余年間に約一・八倍の延長を見たるが石炭は一、二礦を除く外殆んど全部鐵道の力を藉り其數量は全發送貨物の五〇%以上を占む。

港灣設備としては室蘭、小樽兩港に石炭積込高架棧橋あり。室蘭は總積込高の六四%、小樽は其六五%迄之を利用す。其他釧路には臨港鐵道の高架棧橋、留萌には留萌鐵道經營の高架棧橋あり。

尙ほ鐵道省に於ては小樽・室蘭兩港に新式積込設備施工にして、室蘭は其一部竣成使用中なり。

石炭積込費は小樽荷物炭九十錢乃至一圓三十錢、焚料炭一圓三十錢乃至一圓七十錢、室蘭荷物炭七十錢乃至一圓四十錢、焚料炭一圓三十錢乃至一圓七十錢なり。

小樽・室蘭の兩港より横濱に至る海運賃は時に甚しき變動あり。大正二年一圓十錢、大正三年八十五錢乃至一圓二十錢、大正四年一圓五十錢内外なりしが、大正七年に至り十圓臺に上り、其後騰落定まりなく、昭和六年二月より漸騰七年末に於ては室濱一圓七十錢、樽濱二圓を唱へ、最近に於ては室濱一圓四十五錢、樽濱一圓七十五錢なり。

第四表

主要驛間料程及石炭運賃表

(對一噸)

著驛 發驛	函館	手宮	小築 樽港	札 幌	東室 室蘭	旭 川	西留 留萌	濱釧 釧路	知 人
上芦別	395.0	149.0	144.1	114.0	205.5	213.6	81.9	103.7	—
茂尻	4.60	2.58	2.58	2.25	3.24	3.24	1.82	2.34	—
神威	381.7	135.7	130.8	100.7	192.2	200.3	72.5	95.4	—
歌志内	4.60	2.47	2.47	2.14	3.12	3.24	1.68	2.16	—
上砂川	368.7	122.7	117.8	87.7	179.2	187.3	74.7	97.6	—
美唄	4.50	2.36	2.25	1.89	2.90	3.01	1.68	2.16	—
美唄山	371.4	125.4	120.5	90.4	181.9	190.0	77.4	100.3	—
幾春別	4.50	2.36	2.36	1.96	3.01	3.01	1.75	2.23	—
幌内	364.2	119.0	113.3	83.2	174.7	182.8	70.2	93.1	—
美流渡	4.40	2.25	2.25	1.82	2.90	3.01	1.68	2.09	—
萬炭山	338.4	92.4	87.5	57.4	148.9	157.0	81.4	104.3	—
楓	4.30	1.96	1.89	1.41	2.58	2.68	1.82	2.23	—
登川	353.4	109.4	102.5	72.4	163.9	172.0	96.4	119.3	—
沼澤	4.83	2.49	2.42	1.94	3.11	3.21	2.35	2.76	—
清水澤	339.7	93.7	88.8	58.7	174.6	158.3	116.3	139.2	—
鹿谷	4.30	1.96	1.89	1.41	2.90	2.68	2.25	2.73	—
夕張	335.2	89.2	84.3	54.2	141.4	153.8	111.8	134.7	—
昭野山	4.30	1.89	1.82	1.32	2.58	2.68	2.25	2.62	—
上別保	332.1	96.9	92.0	61.9	148.0	150.7	119.5	142.4	—
春採	4.19	2.03	1.96	1.50	2.58	2.68	2.25	2.73	—
	340.0	104.8	99.9	69.8	150.5	158.6	127.4	150.3	—
	4.30	2.14	2.03	1.59	2.68	2.68	2.36	2.84	—
	313.0	144.0	139.1	109.0	126.2	131.6	166.6	189.5	—
	4.08	2.58	2.47	2.14	2.36	2.47	2.79	3.27	—
	316.1	147.1	142.2	112.1	129.3	134.7	169.7	192.6	—
	4.08	2.58	2.58	2.25	2.36	2.47	2.79	3.27	—
	311.2	142.2	137.3	107.2	121.7	129.8	164.8	187.7	—
	4.08	2.58	2.47	2.14	2.36	2.36	2.79	3.27	—
	316.7	147.7	142.8	112.7	127.2	135.3	170.3	193.2	—
	4.08	2.58	2.58	2.25	2.36	2.47	2.90	3.27	—
	323.3	154.3	149.4	119.3	135.6	141.9	176.3	199.8	—
	4.19	2.68	2.58	2.25	2.47	2.58	2.90	3.38	—
	326.7	157.7	152.8	122.7	137.2	145.3	180.3	203.2	—
	4.19	2.68	2.68	2.36	2.47	2.58	3.01	3.38	—
	—	—	—	—	—	—	73.6	61.4	—
	—	—	—	—	—	—	2.56	1.58	—
	—	—	—	—	—	—	64.6	52.4	—
	—	—	—	—	—	—	1.78	1.31	—
	—	—	—	—	—	—	—	—	10.4
	—	—	—	—	—	—	—	—	.39
	—	—	—	—	—	—	—	—	13.1
	—	—	—	—	—	—	—	—	.64
	—	—	—	—	—	—	—	—	4.1
	—	—	—	—	—	—	—	—	.26

備考 上段ハ料、下段ハ運賃ヲ示ス
昭和、西留萌、淺野炭山ハ發着驛ニヨリ割引アリ

七、鑛夫

鑛夫數及移動 昭和八年六月末現在本道炭鑛鑛夫總人員は坑内一二、六一六、坑外五、二四九、計一七、八六五人にして、其中男一六、九四四人、女九二一人なり。九州・常磐地方と異り坑内に女鑛夫を使用せざるは本道特種の事情なり。隨て賃金は他地方に比し嵩加を免かれずと雖も一方保護鑛夫に關する種々の問題に抵觸すること少なく、能率又他に比し優良なり。(第五表)

鑛夫の移動は戰時好況の際に於て最も甚しく、之が爲め能率の低下を來たし生産の増進を妨ぐるこ
と尠なからざりしが、其後事業界の不振に依り稍々鎮靜し、殊に募集法、待遇法の改善、勞資協調機
關の設置等に依り人心安定し、移動率著しく減少せり。本會の調査に據れば大正六、七年の炭鑛夫平
均移動率は一〇%以上、最も烈しき四、五月にありては實に一三%以上の移動を見たるが、大正八年
平均一〇%、同九年八・四%、同十年六・二%、同十一年六・三%、昭和五年三・二%と漸次低下し、昨
昭和七年に於ては送炭調節擴張に依る一時的解雇ありしに拘はらず、僅かに二・二%を示し、移動季
節なる四、五月に於ても尙三乃至二%に止まれり。由來本道は地元鑛夫に乏しく、大部分内地各府縣
及朝鮮より募集し來たる關係上移動も比較的行はれ易く、殊に四、五月融雪の頃に至れば鮮漁場其他
各種事業に誘出せられ移動最も多し。經營者は之が防止策に就いて常に研究施設を怠らず、現在に於

鑛夫員數

第五表 昭和八年六月末現在

種別 炭鑛名	員				數		計 計
	坑 男	内 女	坑 男	外 女	合 男	女	
夕張	1,477	—	575	80	2,052	80	2,132
夕張	539	—	104	40	643	40	683
夕張	545	—	228	44	773	44	817
夕張	408	—	83	36	491	36	527
夕張	328	—	73	23	401	23	424
空幌	568	—	157	65	725	65	790
空幌	637	—	192	53	829	53	882
空幌	272	—	82	27	354	27	381
空幌	1,086	—	456	57	1,542	57	1,599
空幌	101	—	39	7	140	7	147
空幌	586	—	213	23	799	23	822
三上	1,102	—	340	49	1,442	49	1,491
三上	429	—	176	37	605	37	642
三上	224	—	81	15	305	15	320
三上	216	—	95	20	311	20	331
三上	107	—	71	12	178	12	190
新唐	436	—	179	38	615	38	653
新唐	139	—	37	3	176	3	179
新唐	714	—	207	41	921	41	962
新唐	414	—	148	35	562	35	597
新唐	189	—	43	10	232	10	242
雄尺	388	—	97	29	485	29	514
雄尺	133	—	51	35	184	35	219
雄尺	143	—	90	—	233	—	233
野龍	147	—	76	10	223	10	233
野龍	623	—	135	45	758	45	803
茅美	285	—	139	27	424	27	451
茅美	117	—	69	41	186	41	227
茅美	107	—	29	13	136	13	149
茅美	37	—	13	1	50	1	51
茅美	24	—	7	5	31	5	36
新幌	95	—	43	—	138	—	138
合計	12,616	—	4,328	921	16,944	921	17,865

ては九州方面に比し遙かに良好の成績を示すに至れり。

雇傭方法 山元に於て直接採用する外、出張募集・縁故募集・新聞廣告等に依り内地各府縣及朝鮮より募集採用す。應募者には旅費を支給し、若干の前貸金を與ふるを一般の慣習とす。採用に當りては戸籍謄本を徴し身体検査を行ふを通例とし、炭鑛に依りては採用後一定期間熟練鑛夫を附し之を訓練す。

賃金 賃金の支拂は出炭高拂(請負)・日給(本番)の二種にして、前者は採炭夫・支柱夫・運搬夫に適用せられ、後者は選炭夫・工作夫・雜夫等に適用せらる。支拂日は概ね月一回又は二回なるも炭鑛に依りて毎日現金拂を行ひつゝあり。

奨励法 奨励法は炭鑛に依り制度を異にし、又時々改廢あるも、普通一般に行はるゝものは精勤賞・工程賞及勤続賞なり。勤続奨励は募集鑛夫の多き本道炭鑛に於て最も考慮を費され、毎年五月山神祭を兼ね盛大なる表彰式行はる。又勤続奨励の二法として畑地の貸與等をなす所あり。

扶助及共濟 健康保險に就ては各鑛組合を設け其成績良好なり。共濟會は大抵鑛夫委員會をして之を管掌せしめ、事業主より資金半額を補助し、以て勞資協調・相互扶助の實を擧げつゝあり。

協調機關 大正八年第一回國際勞働會議に送るべき勞働代表選舉の事ありてより勞働者の自覺著しく、將來勞資間の融和を圖るには、先づ兩者意思疏通の機關を設くるの急務なるを認め、主なる炭

鑛に於ては同年末より相前後して一種の工場委員制を實施し、爾來十餘年順調の發達を遂げ、良好の成績を收めつゝあり。戦後勞働問題喧傳し、到る處紛争を惹起せるに拘はらず、本道各炭鑛鑛夫は極めて平靜を保ち生活の安定と共に移動率著しく減少し、漸次能率の増進を示しつゝあるは、事業主に時勢透視の明ありて夙に協調機關を設け、兩者の意思疏通を圖れる結果なりと謂ふべし。

住宅 本道炭鑛は最初無人荆棘の地に開かれ、初めは「バラック」式棟割長屋を以て一時を凌げるも、事業の發達と共に漸次改善せられ、殊に最近十年間に待遇法著しく進歩し、住宅の建設に就ても健康増進・移動防止・能率増進の點より多大の注意を拂ひつゝあり。

物資供給 各鑛直營の配給所を設け日常必需品を附近市街地より廉價に供給し、以て生活の安定を圖りつゝあり。

衛生・醫療 住宅・飲料水等に充分の注意を拂ひ、且つ鑛夫住宅は概ね別區劃をなし、清潔法の施行を怠らざるを以て傳染病の發生少なく、一般市街地に比し其成績良好なり。

醫療は各鑛附屬醫局を設け、之なきは附近町村醫に囑託す。鑛業上の疾病負傷者にして其必要あるものは札幌大學病院又は市立病院に入院せしめ、或は温泉地に轉養せしむ。

教育 小學校は到る所の鑛業地にありて兒童教育上何等不便を感じず。小學卒業者に對しては實業補習教育を施しつゝあり。夕張には北海道炭鑛汽船株式會社の創立に係る夕張工業學校(甲種)

あり。

修養に關しては各鑛委員會・軍人分會・青年會等を通じて常に適當の施設を怠らず、又石炭鑛業會に屬する炭鑛にありては臨時會より講師又は活動寫眞班を巡回講演せしむ。

運動は近時漸く重きを置かれ、各鑛とも相當保護獎勵を與ふ。擊劍・野球・庭球・スキー等就中盛なり。

慰安 主なる炭鑛にては鑛夫集會所を設け撞球・圍碁・將棋・蓄音機等を備付け、又一般に毎年五月の山神祭、八月の盂蘭盆に演劇・活動寫眞等を開催す。平時にても附近市街地に活動常設館・劇場を有する所多く、慰安の途缺くる所なし。

各 鑛 狀 況

北海道炭礦汽船株式會社

當會社は明治二十二年十一月十八日の創立に係り、商號を北海道炭礦鐵道株式會社と稱し、石炭の探掘と鐵道運輸とを營むを目的とし、資本金六百五十万圓なりしが、其の後事業擴張と共に資本金を増加して明治三十九年上期には二千七百万圓に達し、同年十月社有鐵道の國有に歸するや、商號を北海道炭礦汽船株式會社と改め、主力を炭礦の經營に集注す。大正八年十一月三井鑛山株式會社所屬登川炭礦を買收し同年十二月資本金を五千八百七十五万圓に増加し、翌九年一月石狩石炭株式會社を合併して資本金を七千万圓に増加し、以て今日に及べり。

石炭探掘高は最初年額僅かに一六〇、〇〇〇噸なりしが、爾來年を閱すること四十有餘、其の間多少の消長ありしも、概して年と共に増加し、昭和七年には二、三二三、〇〇〇噸の記録を示せり。

現有石炭鑛區は石狩・天鹽・釧路・膽振の四個國に跨り探掘鑛區面積二千八百三十万坪、試掘鑛區面積九千四十万坪、合計一億一千八百七十万坪にして、埋藏炭量約十七億噸を算す。現に稼行せる炭鑛は夕張・新夕張・眞谷地・登川・楓・萬字・美流渡・空知・神威・幌内・幾春別の十一個所なり。

○夕張礦

位置 石狩國夕張郡夕張町の北端に在り、海拔三三三米、省線夕張驛は當礦と市街地の中間に位し室蘭港に一四五籽、小樽港に一五八籽なり。又市街の南端に傍系夕張鐵道會社線新夕張驛あり、栗山驛を経て野幌驛迄五三籽、小樽迄一〇五籽なり。同鐵道の完成により當礦と小樽間の距離を短縮すること五三籽とす。

鑛面區積 一一、七九〇、〇〇〇坪

沿革 明治九年開拓使廳雇人ライマン氏、北海道地質測量の成績を報告するに當り、既に夕張地方に石炭の存在することを明言せるも、地勢峻嶮にして探險を試むること能はず、其後夕張郡アノロ川に石炭の流出せるを目標したるものありとの説ありしも敢て調査を遂ぐるものなく、越えて明治二十一年の秋、北海道廳技師坂市太郎氏曾てライマン氏に従つて測量を實習し、夕張地方の地理に詳しく且つ氏の言を信ぜるにより、進んで之れが踏査を企て、幌内より炭層の走向を逐ひ夕張に入り、シホロカベツ川上流に沿ふて下ること十數籽、初めて今の夕張町に出でしに、炭層累々として溪谿に露出せるを發見せり。爾來道廳は氏をして精密なる調査をなさしめたる結果夕張炭山の

名漸く知らるゝに至り、明治二十二年四月村田堤氏其の一部の試掘許可を得、同年十一月當會社創立せられて之を讓受け、二十三年六月開坑に着手し、二十五年十二月鐵道完成し、汽車輸送開始と共に營業を始め、爾來年を逐ふて益々發展、現今の盛況を見るに至れり。

地質及炭層 地質は下部第三紀層に屬し、夾炭層は頁岩及砂岩の互層より成る。炭層は夕張川支流シホロカベツ川左岸諸溪流に起り、アノロ川上流に連り、南北凡そ八籽、十五度乃至二十度の傾斜を以て東北に走り、地下に進むに従ひ傾斜緩和し二度乃至六度となる。石狩炭田下層群に屬し、炭層三枚あり。上層は厚さ一・二米、本層は上層下約五十五米を隔て、存在する七・三米の大炭層にして〇・二二米乃至一米の夾雜物を二枚有し、其夾雜物により更に本層を六尺・八尺・十尺の三層に分つ。下層は本層より百十二米下に存在し、厚さ一・二米なり。目下稼行中のものは本層の六尺・八尺・十尺の各層にして上層及下層は稼行せず。

炭質及用途 粘結性瀝靑炭にして火力強烈、其の質堅緻にして粉碎すること少し。隨て最良炭として用途極めて廣く、就中瓦斯製造用としては本邦炭中匹儔なく、又該炭製造、汽罐燃料として最も賞用せらる。分析表左の如し、

水分	揮發分	固定炭素	灰分	窒素	硫黄	發熱量	炭質性質	灰色
一・一八	四三・七三	五二・一三	二・〇四	一・一三	〇・三三	八、三八五	粘結膨脹	褐
夕張礦								五三

坑名 現在稼行中のもの左の如し。

本坑方面

天龍坑 (日産七五〇觔)、石狩坑 (日産六五〇觔)、大新坑 (日産五〇〇觔)

丁未坑方面

千歳坑 (日産四〇〇觔)、北上坑 (日産四〇〇觔)、最上坑 (日産三〇〇觔)

計 三、〇〇〇觔

採炭法 採炭法は残柱法、無充填式長壁法等を経、現在は切羽面七十米内外の片磐向長壁式採炭を前進式に行ふ。採炭順位は八尺層・六尺層・十尺層の順にして、拂跡は濕式或は乾式充填を行ふ。採炭にはコールピツクを使用す。

排水法 水準以上の湧水は自然に坑外に流出せしめ、水準以下の湧水は其量及場所に応じ、各種唧筒を以て揚水す。

通氣法 全部機械通氣法に依り、現在左記扇風機を設置す。

天龍坑	シロツコ (毎分二、二〇〇立方尺)	千歳第三風井	チャンピオン (毎分二、四〇〇立方尺)
大新坑	チャンピオン (毎分二、四〇〇立方尺)	北上坑	チャンピオン (毎分二、四〇〇立方尺)
石狩坑	シロツコ (毎分二、二〇〇立方尺)	最上坑	チャンピオン (毎分二、四〇〇立方尺)

保安 大正五年より坑内湧水又は坑外水を鐵管にて各坑道に導き、噴霧器及ホースを以て撒水し

浮游炭塵の發生を防ぎ、又岩粉撒布を行ひ乾燥炭塵の處置を講ぜしが、最近充填設備完成し濕式充填を行ふに至り、坑内濕潤し其必要なきに至れり。非常設備としては坑内を區劃し、防火區域を定め、遮斷棒を設置して災害を局限するに便ならしめ、救命器プロト型一六・ドレガー型八・ホースマスク・瓦斯マスク・消火器其他應急用品を坑内外主要個所に配置し不時の變に備ふ。

坑内照明 全部エヂソン帽上燈を使用す。備付數二、四五六個。

運搬法 切羽はシェーキングコンベヤー又はベルトコンベヤー、水平坑道は單線エンドレス又は馬匹により豎坑・斜坑は各種捲揚機及エンドレスに依り、坑外は機關車に依る。礦車は木製及鐵板製
○八觔車なり。

選炭法 本坑及丁未の二個所に選炭場あり。

本坑選炭場は十時間三千觔の能力を有し、大塊²⁰以上、中塊²⁰以下、粉炭²⁰以下の三種に篩分け、中塊粉炭共に樋流式水洗機にて精選す。貯炭庫は容量二、六〇〇觔なり。

丁未選炭機は能力十時間二千四百觔にして、大塊²⁰以上、中塊²⁰以下、粉炭²⁰以下に篩分けし、中塊はブラケット式、粉炭はパウム式水洗機にて精選す。貯炭庫容量は三、二〇〇觔なり。商品炭は各々大塊・洗中塊・二塊・特粉・一粉の五種とす。

動力 夕張に火力七、〇〇〇キロワット、夕張線清水澤驛附近に火力一、〇〇〇キロワット、同瀧ノ上驛附近に水力二、四〇〇キロワットの發電所を設け當礦初め社内各礦に配電す。

産額 六月末現在 坑内夫一、四七七名、坑外夫六五五名、計二、一三二名
最近五ヶ年の産額左の如し。

昭和三年	九四七、五五二吨	昭和六年	七九六、五二〇吨
昭和四年	一、〇一二、〇〇〇	昭和七年	七四三、八七二
昭和五年	九二〇、二一〇		

夕張礦新夕張坑

位置 石狩國夕張郡夕張町字新夕張に在り、省線鹿ノ谷驛より約一・八軒、夕張鐵道新夕張驛より約〇・六軒にして交通至便なり。

礦區面積 一〇、七〇〇、〇〇〇坪

沿革 明治二十一年坂市太郎氏此地を調査し初めて露頭を發見し、同三十七年谷七太郎氏探掘に着手すると同時に附近の礦區を合併し、谷新夕張炭山と稱せしが、三十九年十月所有礦區を舉げて石狩石炭株式會社及淺野泰次郎氏に讓渡し、新夕張及若鍋の二礦として經營、四十三年六月東京瓦斯株式會社の經營となり、大正三年二礦を合し新夕張礦と改稱す。次で同六年九月石狩石炭株式會社及三井礦山株式會社の有に歸し、九年一月石狩石炭株式會社が當社と合併の結果、當社の經營に移れり。同年七月若菜邊礦は新夕張礦より分離し、新夕張礦は夕張礦の神通坑・宇治坑を併合せるも、昭和五年六月に至り再び兩礦合併し、昭和七年六月更に夕張礦に併合せらる。

地質及炭層 地質は第三紀層に屬し、夾炭層は頁岩及砂岩の互層より成る。炭層の主要なるものは夕張本層の連續にして二枚の夾みあり、厚さ七・三米、若菜邊に連互す、上層一・八米、中層二・四

米、下層三米。本層の上約四十九米を隔て、〇・九米と二・一米の二層あり、傾斜十度乃至七十度なり。

炭質及用途 炭質は夕張炭と同一にして瓦斯及骸炭の製造用に供し、現に東京瓦斯株式会社使用炭は一手に之を供給す。瓦斯發生量の多きと硫黄分の少きとは夕張炭と共に本社の誇とする處なり。分析表左の如し。

水分	揮發分	固定炭素	灰分	窒素	硫黄	發熱量	骸炭性質	灰色
一・五二	四三・二九	四九・七五	五・七三	一・四三	〇・三五	七、五九〇	粘結膨脹	淡黄橙

坑名 現在稼行中のものは松島坑（日産四〇〇〇噸）、橋立坑（日産五〇〇〇噸）なり。

探炭法 水準上にありては露頭より直ちに坑道を開き、水準下にありては斜坑を開鑿し此斜坑を下ること約六〇米毎に坑道を設け、長壁式探炭法を行ふ。探炭にはコールピツク・ジャツクハンマー・コールカッター等を使用す。

排水法 水準以上の湧水は總て坑道下水に依り、水準以下は各種電氣唧筒により排水す。

通氣法 一般に機械通氣法に依り、橋立坑チャンピオン（毎分一、三〇〇立方米）、松島坑オーラス（毎分三、四〇〇立方米）、住吉坑チャンピオン（毎分一、四〇〇立方米）を設置す。

保安 炭塵爆發豫防のため坑道全般に互り常に岩粉撒布を行ふ外、要所には岩粉棚を備へ不時の

災害に備ふ。尙ほ救護隊を組織しプロト型七、ドレガー型二個の救命器を備ふ。

坑内照明 エヂソン及びニツフェ帽上燈を使用す。備付數九三八個。

運搬法 切羽は切羽運搬機に依り、斜坑は捲揚機・エンドレス・水平坑道は架線式電車又は馬匹に依る。炭車は〇・八噸木製なり。

選炭法 當選炭場は能力十時間一千五百噸にして大塊^{ゴロ}以上、中塊^{ゴロ}、粉炭^{ゴロ}以下の三種に篩分け、中塊・粉炭共にブラケット式水洗機にて精選す。貯炭庫容量は一、五〇〇噸にして、商品炭

は大塊・中塊・二塊・特粉の四種とす。

産夫 六月末現在 坑内夫五三九名、坑外夫一四四名、合計六八三名。

産額 最近五ヶ年の産額左の如し。

昭和三年	三五二、八六〇噸	昭和六年	三二三、四一六噸
昭和四年	三六二、七二九	昭和七年	二九〇、二一九
昭和五年	三九八、七八九		

眞谷地礦

位置 石狩國夕張郡夕張町字眞谷地にあり、夕張線沼ノ澤驛を距ること東方約四軒にして、此間専用鐵道の便あり。

礦區面積 六、八九〇、〇〇〇坪。

沿革 明治三十八年八月頭山滿・金子元三郎兩氏より讓受け、同年十一月開坑に着手し、以來設備を改善擴張し今日に至れり。

地質及炭層 地質は下部第三紀層にして頁岩及砂岩より成り、バンケマツチ川を挟みて一大斜層を構成せり。炭層は石狩炭田下層群に屬す。走向概ね南北、傾斜は東又は西に向ひ褶曲甚しく、其度數不定なるも平均七十度内外の堅層なり、主要なる炭層六層あり。現在採掘する炭層左の如し。

一番上層 二・一米 同下層 四・八米 二番層 二・一米 三番層 二・一米

炭質及用途 夕張炭に酷似せる粘結性炭にして、火力強烈、汽罐用、瓦斯發生爐用として賞用せらる。分析表左の如し。

水分	揮發分	固定炭素	灰分	窒素	硫黄	發熱量	骸炭性質	灰色
一・七三	四三・三七	五〇・五	四・四五	一・五	〇・四	七、九三〇	粘結稍膨脹	褐

坑名 桂（日産三〇〇噸）、榊（日産二五〇噸）の二坑にして、前者は堅坑、後者は横坑及斜坑なり
採炭法 桂坑方面は堅坑第一坑道及第二坑道より堅入を以て各層に當て沿層坑道を開鑿し、更に垂直三三米乃至六六米毎に中切坑道を設け、榊坑方面は炭層に沿ひ水平坑道を設け、水準以下は斜坑を開鑿し片磐坑道を設く。採炭法は乾式土砂充填長壁法に依り堅層に於ける完全なる厚層採掘をなすに至れり。手掘の外コールピック・ジャツクハンマーを使用す。

排水法 水準以上の湧水は總て坑道の下水に依り坑外に排出し、水準以下はタービン唧筒に依りて排水す。

通氣法 主として機械通風に依り、桂坑シロツコ（毎分二、八〇〇立方尺）、榊坑チャンピオン（毎分一、三〇〇立方尺）を備ふ。

保安 桂堅坑に於ては炭塵爆發豫防の爲め撒水鐵管を敷設し、噴霧器及麻管を備へ撒水をなし、又必要に應じ岩粉の撒布をなす。尙不時の變に備ふる爲め救護隊を組織しプロト型救命器六臺及附屬具を備ふ。

坑内照明 エヂソン帽上燈を使用す。備付數五四五個。

運搬法 坑内運搬はシュートを用ひて運搬坑道に搬出し、其後は馬匹・捲揚機・電車・エンドレス等に依り選炭場に送る。炭車は木製〇・六噸なり。

選炭法 當選炭場は十時間一千六百噸の能力を有し、篩目は大塊一・二號以上、三・四號以上、中塊一・二號以下、三・四號以下、粉炭以下にして、中塊・粉炭共に槌流式水洗機にて精選す、貯炭庫容量は一、二〇〇噸にして商品炭は一塊・洗中塊・二塊・特粉の四種とす。

産額 最近五年間の産額左の如し。

昭和三年	二〇六、七三〇噸	昭和六年	一五七、五八九噸
昭和四年	二〇一、一九八	昭和七年	一四三、三三三
昭和五年	一七〇、九四八		

登川礦

位置 登川本坑・楓坑の總稱にして、石狩國夕張郡夕張町字登川に在り。登川坑は夕張線紅葉山驛より分岐せる登川線の終點登川驛に在り、海拔二五〇米。楓坑は同線楓驛より七六三米、海拔二〇〇米共に交通便なり。

礦區面積 一一、九〇〇、〇〇〇坪

沿革 明治三十七八年頃發見せられたる如くなるも其顛末詳らかならず。明治四十二年八月結城虎五郎・飯田延太郎兩氏共同探掘權を得、翌年七月初めて探掘に着手せり。當時山元より鐵道の便なく三・二斤を距る楓驛に積込場を設け、馬匹に依りて石炭を運搬せしも、四十四年十一月三井礦山株式會社にて礦業權を讓受くと同時に楓驛山元間の鐵道開通を見たり。大正八年十一月本社之を讓受け今日に至る。

楓坑は眞谷地礦の開坑と共に其一部として經營し來りしが、當礦讓受と同時に眞谷地礦より分離し當礦所屬となせり。

地質及炭層 地質は第三紀層の最下部にして砂岩・礫岩・頁岩の累層より成り、東方白堊紀層と接

する所に主要炭層あり。即ち登川夾炭層は石狩炭田下層群より更に下層に位するものなり。炭層數枚あれども目下稼行中のものは一層のみ、走向概して南北、傾斜東方四十度乃至六十度厚さ平均三米なり。

楓坑は頁岩發達し一大鞍狀をなし、炭層は登川夾炭層の上部、即ち石狩炭田下層群に位し、走向略南北、傾斜東方四十度、厚さ上層一・五米、木層三米なり。

炭質及用途 堅硬にして光澤を帶ぶ。粘着度低く、發熱量大にして用途極めて廣く、汽罐用及び最近流行の貯炭式ストーブにも盛に賞用せられ、特に製陶用として名古屋地方斯業者に愛用せらる。又窒素の含有量多く瓦斯發生爐用として好評あり。分析表左の如し。

炭種	水分	揮發分	固定炭素	灰分	窒素	硫黃	發熱量	炭質性質	灰色
登川炭	二・六	四・六七	四八・四一	二・三六	一・五二	〇・四三	八、一九六	稍粘結	灰褐
楓炭	二・七〇	四・六五	四八・六五	六・四	〇・四七	一・七	七、四八〇	粘結稍膨脹	灰

坑名 本坑(日産四三〇噸)、楓坑(日産二五〇噸)

探炭法 水準上にありては炭層に沿ひ坑道を開鑿し、約六〇米毎に坑道を設け、炭層の状態を斟酌し残柱法と乾式土砂充填長壁法とを併用す。手掘の外、ジャックハンマーを使用す。

排水法 水準以上の湧水は坑道下水にて放流し、水準下は各種唧筒に依り排水す。

通氣法 全部機械通風に依り奥登川シロッコ(毎分一、一〇〇立方米)、楓批把キャベル(毎分三四

〇立方米)、楓一斜坑チャンピオン(毎分四三〇立方米)の扇風機を備ふ。

保安 乾燥炭塵防止の爲め撒水を行ひ、適當個所に岩粉棚を設け又救護隊を組織しプロト型救命器六臺及附屬具を備ふ。

坑内照明 エヂソン帽上燈・ニツフエ帽上燈・ウルフ帽上燈等を使用す。備付數四六〇個。

運搬法 水準以上の坑道にては各切羽漏斗より鑛車に受け、人力及馬匹に依り坑口迄搬出し、斜坑は捲揚機により本坑道に捲揚げ電車に依り搬出す。炭車は木製〇・八五噸及〇・六噸車なり。

選炭法 登川及楓の二個所に選炭場あり。

登川選炭場は能力十時間九百噸にして大塊²¹以上、中塊²¹、粉炭²¹以下に篩分け、中塊・粉炭共にブラケット式水洗機にて精選す。貯炭庫容量は九二〇噸なり。

楓選炭場は能力十時間三百噸にして大塊¹⁵以上、中塊¹⁵、粉炭¹⁵以下に篩分く。貯炭庫容量は二二〇噸なり。商品炭は各々大塊・中塊・二塊・粉炭の四種とす。

産額 六月末現在 坑内夫四〇八名、坑外夫一一九名、計五二七名。最近五ヶ年の産額左の如し。

昭和三年	一七二、七五五噸	昭和六年	一五五、六〇三噸
昭和四年	一六二、五〇〇	昭和七年	一五三、五四〇
昭和五年	一六七、八二九		

萬 字 礦

位置 石狩國空知郡栗澤村字萬字に在り、室蘭線志文より分岐せる萬字線の終點に當る。海拔二五四・五米、支坑美流渡坑は同線美流渡驛の西南二・七軒に在り。

礦區面積 一〇、二二〇、〇〇〇坪

沿革 明治三十六年一月朝吹英二氏より譲受けたるものにして、炭層の一部は夕張礦に接続す。明治三十八年十一月開坑に着手、同四十二年營業を開始せり。當時本礦出炭は全部玉村式架空索道に依り一旦夕張に輸送し夕張より鐵道を利用し居りしも、大正三年十一月萬字・志文間省線の開通と共に本礦より直接市場に輸送するに至れり。

地質及炭層 地質は下部第三紀層に屬し、頁岩及砂岩の累層より成る。萬字炭層は石狩炭田下層群に屬し、採掘に値するもの二層あり。上層は一・二米乃至一・八米、本層は二・一米にして、傾斜は北東十八度乃至三十度、露頭延長約六軒に達す。

美流渡炭層は石狩炭田上層群に屬し、主要なるもの三層あり。厚さ平均二・一米、一・二米、〇・九米にして走向概して東西、傾斜北に二十度乃至三十度なり。

炭質及用途 萬字炭は夕張炭に酷似せる粘結性炭にして其の質堅緻、汽罐燃料殊に瓦斯骸炭製造に適す。

美流渡炭は所謂冴え物にして粘結率甚だ低く、各種瓦斯發生爐用として、又最近流行の貯炭式ストーヅ用として愛用せらる。分析表左の如し。

炭種	水分	揮發分	固定炭素	灰分	窒素	硫黄	發熱量	骸炭性質	灰色
萬字炭	一・九〇	四一・〇四	五・七五	五・三二	一・三三	〇・三六	八、〇三五	粘結稍膨脹	帶赤褐
美流渡炭	五・六八	三七・七四	四九・四九	七・〇九	一・七〇	〇・五四	七、五四〇	粘結稍淡	褐

坑名 本坑(福壽、橘日産五五〇觔)、相生(紅葉日産一五〇觔)、美流渡(初音日産三〇〇觔)探炭法 水準以上は露頭より坑道を開鑿し、水準以下は斜坑を開鑿、約六〇米毎に片磐に沿ひ坑道を設け、長壁法に依り探炭をなす。長壁面は其面の長さを一〇〇米内外とし、コールカッター・ジヤックハンマー・コールピック等を使用す。

排水法 水準以上の湧水は總て坑道下水に依り自然に坑外に流出せしめ、水準以下は電氣唧筒に依り坑外に排水す。

通氣法 坑内通氣は總て機械通氣法に依る。

牡丹坑 チャンピオン(毎分 六〇〇立方米) 福壽坑 シロツコ(毎分三、〇〇〇立方米)

萬 字 礦

橋 坑 チャンピオン (毎分一、五〇立方米) 美流渡坑 シロツコ (毎分一、三〇立方米)

保安 坑内乾燥の個所には岩粉棚を設け岩粉撒布を行ふ。又救護隊を組織し、プロト救命器六組を備ふ。

坑内照明 エヂソン帽上燈を使用す。備付數九二五個。

運搬法 切羽に於てはフェースコンベヤーに依り、水準以下の石炭は斜坑に於て電気捲揚機に依り直接坑外或は水準坑道に捲揚げ、電車及循環機に依り搬出す。

選炭法 萬字及美流渡の二個所に選炭場あり。

萬字選炭場は十時間一千六百廂の能力を有し、大塊²⁰以上、中塊²⁰⁻⁷⁰、粉炭⁷⁰以下に篩分け、中塊はデツガー及びブラケット式にて、粉炭は樋流式水洗機にて精選す。貯炭庫は容量二、二〇〇廂なり。

美流渡選炭場は十時間六百廂の能力を有し、大塊²⁰以上、中塊²⁰⁻⁷⁰、粉炭⁷⁰以下に篩分け、中塊粉炭共にブラケット式水洗機にて精選す。貯炭庫は容量一、〇〇〇廂なり。

商品炭は各々大塊・中塊・二塊・洗粉の四種とす。

礦 夫六月末現在 坑内夫五四五名、坑外夫二七二名、計八一七名。

産 額 最近五ヶ年の産額左の如し。

昭和三年	三八八、三四二	昭和六年	三〇八、四〇〇
昭和四年	三九五、六四〇	昭和七年	二九四、二五八
昭和五年	三四九、四〇五		

幌 内 礦

位置 石狩國空知郡三笠山村字幌内、幌内線幌内驛に在り。

鑛區面積 五、四二〇、〇〇〇坪

沿革 本鑛の發見は明治元年石狩の人木村某、本願寺小樽別院建築用材を幌内附近の山中に於て伐採の際偶々炭層の露面を目標したるに始まると云ふ。同五年札幌の早川某、標本數個を採集し其に其狀況を開拓使廳に申告したるに、開拓使四等出仕榎本武揚氏親しく其狀況を質し、且つ之を分析せしめて初めて良質の石炭なる事を知り、翌六年より九年に至る間、同廳雇米人ライマン氏をして炭層の位置、埋藏量等を實地調査せしめ、同時に運炭鐵道敷設の設計をなさしむ。又雇米人モンロー氏をして再度分析比較研究をなさしむる等若々調査の歩を進め、同十二年初めて大坑道の開鑿に着手し、同時に瀧ノ澤及本澤露頭より數條の坑道を穿ち、同十五年春探炭準備をなし、翌十六年の秋愈探掘を開始するに至れり。爾來官業として探炭し來りしが、明治二十二年本社創立の際し之が拂下を受け、以て今日に至れり。

地質及炭層 地質は下部第三紀層に屬し、夾炭層は頁岩・砂岩より成り、一大鞍狀をなして其機軸

は長さ約四軒に及び東北より西南に走る。傾斜は概して西北側に緩にして十八度乃至四十度なるも東南は極めて急峻五十度乃至八十度に及ぶ。炭層は石狩炭田上層群に位し、其數甚だ多く大小二十餘層ありと雖も、探炭し得るもの八層、厚さ〇・九米より一・八米に及ぶ。

炭質及用途 不粘結性にして家庭燃料として最上位にあり。分析表左の如し。

水分	揮發分	固定炭素	灰分	窒素	硫黄	發熱量	散炭性質	灰色
二・二	四七・四三	四五・七三	三・〇三	一・二五	〇・四八	八、〇六七	不粘結	淡黄

坑名 現在探炭中の主なる坑は布引坑・養老坑の二坑とす。布引坑は深度二七二米、徑四・八五米の入氣排氣の竪坑を有し、養老坑は深度一六三米の竪坑にして、日産布引坑九〇〇噸、養老坑三〇〇噸なり。

探炭法 先づ坑底より炭層に直角に竪入を穿ち、炭層に會する毎に左右に坑道を設け延長一八〇米乃至二七〇米、深度九〇米毎に區劃し、前進式長壁法に依り探掘す。手掘の外、ジャックハンマーコイルピツクを使用す。

排水法 一般に湧水量少なく、水準以上のものは總て坑道下水より流出せしめ、水準以下は各種電氣唧筒を使用す。

通氣法 機械通氣に依り、那智坑口チャンピオン(毎分一、四〇〇立方米)、布引坑オーラス(毎分三、

三〇〇立方米)を設置す。

保安 隨所に撒水及岩粉撒布を行ひ、不時の變に對する設備として救護隊を組織し、プロト救命器九臺を備ふ。

坑内照明 エヂソン帽上燈を使用す。備付數七二一個。

運搬法 炭層の傾斜緩き所は鐵桶を使用し、急なる處は漏斗を設置し、人力・馬力・電氣機關車にて坑底に運搬し捲揚機を以て坑外に捲揚ぐ。坑外は布引坑は電氣機關車、養老坑は上綱式エントレスに依る。炭車は〇・八噸及〇・六噸木製なり。

選炭法 當選炭場は十時間一千六百噸の能力を有し、大塊²⁵以上、小塊²⁵以下に篩分け、小塊・粉炭共にブラケット式水洗機にて精選す。貯炭庫は容量七七〇噸にして、商品炭は大塊・洗小塊・二塊・洗粉の四種とす。

礦夫 六月末現在 坑内夫六三七名、坑外夫二四五名、計八八二名。

産額 最近五ヶ年の産額左の如し。

昭和三年	三二一、六三三噸	昭和六年	二七八、六二四噸
昭和四年	三五九、五五四	昭和七年	二八六、八三六
昭和五年	三一二、六六一		

幌内礦 幾春別坑

位置 石狩國空知郡三笠山村字幾春別、幾春別線の終點にあり。

礦區面積 一、二〇〇、〇〇〇坪

沿革 明治十三年中開拓使廳官吏島田純一及山際永吾の兩氏、此地方の探礦に従事し本礦を發見概測したるに始まり、翌十四年米人ボッター氏實地巡檢し、其後開拓使御用掛山内徳三郎氏稍精密なる調査をなせり。明治十八年六月農商務省始めて開坑に着手せしも、同年十月一時中止し、二十一年七月に至り、村田堤氏之を借區して工事を繼續し、二十二年十一月當社之を讓受け、漸次改善を加へ今日に至れり。

地質及炭層 地質は下部第三紀層にして頁岩・砂岩の互層より成り、炭層は幾春別川を中心とし南北延長凡そ四軒に亘る。傾斜は極めて急峻にして七十度乃至九十度に達し、概して東方に沈下すと雖も幾春別以北約一、〇九〇米に至り、傾斜實に九十五度以上となり却て西方に沈下せり。炭層は石狩炭田上層群に位し、其數多きも探掘し得るものは八層、厚さ一・一米より二・一米に及ぶ。

炭質及用途 不粘結性にして略幌内炭と同質なり。骸炭製造には適せざるも船舶汽罐或は家庭用に

適し、最近流行の貯炭式ストロウ用として盛に愛用せらる。分析表左の如し。

水分	揮發分	固定炭素	灰分	窒素	硫黄	發熱量	骸炭性質	灰色
三〇・五	四三・九	四六・四	七・八	一・二	〇・九	七、六三〇	不粘結	褐

坑名 錦坑(日産四〇〇觔)

採炭法 炭層の傾斜頗る急峻なるを以て垂直九一米を斜め長壁面に作り乾式土砂充填採炭を行ふ。

手掘の外、ジャックハンマー・コールピック等を使用す。

排水法 水準以上は全部坑道下水にて流出せしめ、水準以下は各種唧筒を以て排水す。

通氣法 機械通風に依り、青葉坑キャベル(毎分二、〇〇〇立方米)、錦坑水準坑道チャンピオン(毎

分二七八立方米)を設備す。

保安 隨所に撒水を行ふ。

坑内照明 エヂソン帽上燈を使用す。備付數四二四個。

運搬法 切羽に於ては漏斗を利用し、之より蓄電車・馬力又は人力を以て坑底に運搬し、捲揚機を

以て坑外に捲揚ぐ。坑外はエンドレスに依る。炭車は木製〇・八噸車なり。

選炭法 當選炭場は十時間九百觔の能力を有し、大塊²³以上、小塊²³以下に篩分け、

小塊は樋流式、粉炭はブラケット式水洗機にて精選す。貯炭庫は容量一、〇〇〇觔にして、商品炭

は大塊・洗小塊・二塊・三塊・洗粉の五種とす。

礦夫 六月末現在、坑内夫二七二名、坑外夫一〇九名、計三八一名。

産額 最近五ヶ年の産額左の如し。

昭和三年	一七七、四三二觔	昭和六年	一四〇、四二四觔
昭和四年	一七六、七〇二	昭和七年	一一四、三九〇
昭和五年	一五五、五九〇		

空 知 礦

位置 石狩國空知郡歌志内村に在り。歌志内・神威兩坑の總稱にして、歌志内線歌志内驛及神威驛に誇り、海拔一〇三米より一九〇米に及ぶ。鑛區は東北方赤平峠を越え空知川を渡りて赤間に至り、又北方赤平に連互せり。

鑛區面積 九、六一〇、〇〇〇坪

沿革 本鑛發見の時代は詳らかならずと雖も、安政年間松浦武四郎蝦夷地を跋涉し空知川を溯りし時、沿岸に於て炭層の露出を認めしこと同氏の空知日誌に記されたり。明治六年榎本武揚氏開拓使中判官として木道の物産取調を擔任し、親ら空知川を溯り沿岸に露出せる炭塊數個を採取し之を分析せしめたることあり。翌七年開拓使雇米人ライマン氏命を受け該地を巡廻し見取圖を作る。爾來十餘年間之を踏査するものなく、明治十九年北海道廳に於て測量に着手したるも翌二十年僅かに一段落を告げたるのみにて中止し、其後明治二十二年村田堤氏外二名初めて試掘をなし、纔かに炭層の調査を了したるに過ぎざりしを、同年十一月本社創立に際し之を讓受け、二十三年四月開坑に着手し、翌年七月鐵道開通と共に營業を開始し、爾來年と共に發展し大正六年三月隣接歌神・宮城

の兩坑を買收し、次で同年五月赤平・赤間の兩坑區を併合し今日に至れり。

地質及炭層 地質は第三紀層にして頁岩・砂岩・礫岩よりなり、歌志内にありては往々峻險なる鞍狀層をなすことありと雖も、概して南より北に向ひて走り、傾斜極めて急にして三十度乃至八十度に達す。炭層は〇・九米以上のもの十四層あり。又神威にては走向東南より西北に互り稍々北方に斜下し、西山にては南北の機軸を有する大鞍狀層をなして東及西に斜下し、傾斜稍々緩やかにして十度乃至四十度とす。炭層〇・九米以上のもの八層あり。此等炭層は石狩炭田下層群及中層群に位置し、下層群は空知下層群と稱し神威及奥澤方面にて稼行し、中層群は空知上層群として歌神・中ノ澤方面にて稼行す。

炭質及用途 概して粘結性に富み火力強烈にして、骸炭製造・汽罐燃料・鍛冶用に適す。分析表左の如し。

水分	揮發分	固定炭素	灰分	窒素	硫黄	發熱量	骸炭性質	灰色
一・五	四〇・七	五三・九	三・四〇	一・四〇	〇・五三	八、一五三	粘結稍膨脹	淡

坑名 歌志内（日産五〇〇匁）、神威（日産七三〇匁）

採炭法 炭層の走向に沿ひ坑道を開鑿し、上部に一〇米を隔て、通風坑を設け、十二米毎に目貫にて連絡せしむ。長壁採炭法を採用し切羽面は三〇米乃至四五米とす。コールピツク・ジャツクハン

マー等を使用す。

排水法 水準以上の湧水は總て坑道下水に依り、水準以下は各種電氣唧筒に依り排水す。

通氣法 機械通氣法に依る。

歌志内方面	上ノ澤向	チャンヒオン	毎分一、四六立方米
	下ノ澤(東一番)	〃	〃 九四
	(西方面)	〃	〃 一、七九
	奥澤向(西六番)	〃	〃 一、二七五
	龍田斜坑口	〃	〃 三三〇
神威方面	東四番	チャンヒオン	毎分 四三五立方米
	東一番	〃	〃 八五〇
	西四番	〃	〃 八五〇
	千早五番	シロツコ	〃 一、二三

保安 炭塵爆發豫防の爲め撒水鐵管を敷設し、一部に岩粉撒布を行ふ。不時の變に備ふる爲め救

護隊を組織し、プロト型救命器九臺を備ふ。

坑内照明 エヂソン帽上燈を使用す。備付數九六七個。

運搬法 炭層に沿ひ設けたる漏斗又はコンベヤーに依りて鑛車に移し、人力・馬力又は電力に依り

坑外に搬出す。又中切坑道上部の石炭は自轉車道に依り輕便なる捲胴を裝置し、又は吊漏斗等に依

り坑道に降す。鑿坑には捲揚機を設置し、坑外運搬は總て電車を用ふ。炭車は木製〇・八噸及〇・六噸車なり。

選炭法 歌志内及神威の二個所に選炭場あり、共に十時間一千應の能力を有す。

歌志内に於ては大塊²/₃以上、中塊²/₃以下、粉炭¹/₃以下の三種に篩分け、中塊・粉炭共にデツガー式水洗機にて精選し、貯炭庫は容量七〇〇應にして、商品炭は大塊・洗中塊・二塊・洗粉・一粉・鍛冶粉の六種とす。

神威選炭場に於ては大塊²/₃以上、中塊²/₃以下、粉炭¹/₃以下の三種に篩分け、中塊はデツガー式、粉炭はバウム式及デツガー式水洗機にて精選す。貯炭庫は容量一、〇〇〇應にして、商品炭は大塊・洗中塊・二塊・特粉・洗粉の五種とす。

鑛夫 六月末現在 坑内夫五六八名、坑外夫二二二名、計七九〇名。

産額 最近五ヶ年の産額左の如し。

昭和三年	四〇三、八八八應	昭和六年	三二三、〇六三應
昭和四年	三九九、六三六	昭和七年	二七二、八九七
昭和五年	三六三、一九二		

三菱礦業株式會社

の三菱美唄礦業所

位置 石狩國空知郡美唄町及三笠山村に跨り、礦業用地内に美唄炭山驛及常盤臺驛あり。美唄炭

山驛より省線美唄驛迄八軒、手宮迄一〇九軒、室蘭迄一七二軒、函館迄三五三軒なり。常盤臺驛は

美唄炭山驛より二軒、豎坑送炭の爲め大正十三年十二月開設せるものなり。

礦區面積 探掘試掘を合せ約千百萬坪。

沿革 明治二十七八年頃黒柳金二郎氏初めて本礦區中の主なる礦業權を獲得せしが、明治四十四年十一月前礦業權者飯田延太郎氏の手に移り、大正二年十一月第一坑を開坑、翌三年十一月美唄鐵道の開通と共に送炭を開始せり。

大正四年八月炭礦・鐵道共に三菱にて買收、大正六年一月第二坑、同七月第三坑を開坑し、爾來銳意事業の擴張と設備の改善に努め、大正十年豎坑の開鑿に着手し同十四年末完成し（深さ一七〇米）越えて昭和七年五月豎坑々口附近に美唄通洞の開鑿に着手し目下着々工事中なり。尙大正七年三月開坑の第四坑は送炭調節の爲め休止中なり。

地質及炭層 下部第三紀層に屬する砂岩・頁岩の累層より成り、十數層の炭層を夾有す。此等炭層は石狩炭田中層群及下層群に位し、探掘可能の炭層十數枚あるも、現在稼行するものは本層（一・八米）、二番層（一・五米）、下六番層（二・四米）、下七番層（一・五米）なり。
炭質及用途 不粘結性にして夾雜物少く、火付速く、發熱力強く、火持良し。塊炭・小塊炭は一般汽罐用に適し、軍艦、船舶、鐵道燃料、窯業用及家庭ストーブ用として賞用せられ、粉炭は一般工場用・船舶燃料等として好評あり。分析表左の如し。

	水分	揮發分	固定炭素	灰分	硫黄	發熱量
塊炭	二・〇	四二・五	五二・〇	四・五	〇・三	七、五〇〇
中塊炭	二・五	四二・五	四九・〇	六・〇	〇・三	七、四〇〇
粉炭	三・〇	四一・〇	四七・〇	九・〇	〇・四	七、一〇〇

坑名 現在坑別日産額次の如し。

第一坑（四〇〇應）、第二坑（六〇〇應）、第三坑（五〇〇應）、豎坑（一、〇〇〇應）、計二、五〇〇應

採炭法 第一坑は炭層露頭より開坑せる沿層坑道、第二坑、第三坑は豎入坑道に依り着炭後沿層坑道を掘進し、豎坑は坑底豎入坑道により着炭後沿層坑道を掘進せるものにして、採炭方式は主として後退式長壁法を採用し、各拂面は三六乃至九〇米にして徹底的機械採炭に依り、各種截炭機・鑿岩機・穿孔機・コールピツク等を使用す。

排水法 各坑共湧水量僅少にして第二坑は自然排水とし、他は電動唧筒に依り排水を行ふ。

通氣法 第一坑にシロツコ(毎分一、八五〇立方米)、第二坑にケーブル(毎分二、八五〇立方米)、第三坑にケーブル(毎分二、八五〇立方米)、及シロツコ(毎分四、二五〇立方米豫備)、竪坑にケーブル(毎分二、八三二立方米豫備)、及ラトール(毎分一、三三〇立方米)の各扇風機を備へ、隨所に局部扇風機を使用す。

保安 坑内乾燥炭塵の危険に對しては切羽撒水・噴霧装置・炭塵掃除・岩粉撒布・岩粉棚等の設備をなし、各見張所には應急救護用品を備ふ。又救護隊の組織あり、ドレーガー救命器八臺及蘇生器兼酸素吸入器一組を備ふ。

坑内照明 主要坑道は定置電燈を以て照明し、従業員はエヂソン(七〇八個)・ニツフエ(六二〇個)ウルフ(六五〇個)帽上燈及ウルフ安全燈(三、〇〇九個)を使用す。

運搬法 切羽運搬は水流し鐵錘・シエーキングコンベヤー・スクレーパー又は人力に依り、片磐坑道は蓄電池機關車・メーンエンドテール捲又は馬送により、各昇・卸には電氣捲揚機を使用し、竪坑々底・水平坑道には架線式電氣機關車を使用す。坑外は第一坑は蒸氣機關車、第三坑はエンドレス、第二坑は第一坑迄蓄電池機關車に依り、第一坑の分と合し選炭場に送る。竪坑は電動捲揚機に依る。炭車は本坑方面木製〇・七廔、竪坑木製〇・九廔及鐵製一・二廔なり。

選炭法 本坑及竪坑に各選炭場あり。本坑選炭場は第一坑・第二坑・第三坑所産のものを處理し、一號機七〇〇廔、二號機一、四〇〇廔、三號機五〇〇廔の最大能力を有し、別に一、〇〇〇廔の水洗機あり。合計二、〇〇〇廔の貯炭庫を有す。

竪坑選炭機は三、〇〇〇廔の能力を有し、一、四〇〇廔の貯炭庫を備ふ。其操業方法は本坑に於ては先づ塊・粉に篩別、粉炭の一部は直ちに貯炭庫に送り、更に塊・中塊・粉に篩別、塊炭は手選、中塊・粉炭は共益社式水洗機に依り精選す。竪坑に於ては塊・中塊・粉に篩別、粉炭は其儘貯炭庫に送り塊、中塊は手選す。

篩目は塊炭2'以上、中塊炭2'1"粉炭1'以下とす。動力 坑内動力は電氣及壓縮空氣により、之が基幹動力設備として、出力七、二〇〇キロワットの瀧ノ澤火力發電所を有し、坑所内に出力五五〇キロワットの豫備火力發電所を有す。坑外動力は電氣に依る。

産額 夫 六月末現在 坑内夫一、〇八六名、坑外夫五一三名、計一、五九九名
産額 最近五ヶ年の産額左の如し。

昭和三年	九二六、六八三	昭和六年	六四四、二八六
昭和四年	九四五、六〇七	昭和七年	六四五、二二四
昭和五年	八一四、八〇四		

三菱芦別炭坑

位置 石狩國空知郡芦別村字上芦別に在り。省線上芦別驛より手宮迄一四九籽、室蘭迄二一四籽函館迄三九五籽なり。別に上芦別驛より坑所迄専用鐵道を設く。

鑛區面積 探掘試掘を合せて約一千八百八十萬坪。

沿革 明治四十二年以來鑛區の出願登録を見たるも事業に着手せるものなく、大正二年二月其大部分を當社に於て買収、以來炭層調査と共に營業準備を進め、六年十月より營業開始今日に至る。

昭和七年十月送炭調節の爲め第一坑及第五坑を休止し、目下第二坑、第三坑を稼行中なり。

地質及炭層 地質は第三紀層に屬し砂岩及頁岩の交互層にして、十數層の炭層を夾有す。此等炭層は石狩炭田中層群に位し、目下探掘するものは二層なり。兩層の間隔は三六米内外、傾斜東南十度乃至四十五度、平均層厚、本層は約一・五米、下層約三・六米なり。

炭質及用途 炭質は堅緻にして稍粘結膨脹し、火力強く、焰長く汽船燃料及一般汽罐用に適し、特に塊・洗小塊はストーヴ用として恰好なり。分析表左の如し。

水分	揮發分	固定炭素	灰分	硫黄分	發熱量	炭質性質
三・四	四〇・七	五三・四〇	二・八五	〇・三六	七、七五三	不粘結

坑名 第二坑（日産一五〇噸）、第三坑（日産一〇〇噸）

探炭法 炭層の状態、上磐の關係等を斟酌し、長壁法に依り探炭す。長壁面の長さは五五乃至七三米とし、截炭機・ジャックハンマー・電氣ドリル等を使用す。

排水法 各坑共電氣唧筒に依り排水す。

通氣法 坑内の浅き處を除き殆ど機械通風にして、第二坑にターボコノイダル（毎分五〇、〇〇〇立方呎）、第三坑にキャベル（毎分三四、〇〇〇立方呎）の扇風機を設備す。

保安 炭塵爆發豫防の爲め岩粉撒布並撒水を行ふ。

坑内照明 ウルフ帽上燈四二三個の外ウルフ安全燈七〇二個を使用す。

運搬法 坑内切羽は人力又は切羽運搬機により、斜坑は捲揚機に依り主要坑道又は坑外に捲揚け、エンドレス又は馬匹に依り選炭場に搬出す。炭車は木製〇・七噸車を用ふ。

選炭法 十時間五百噸の機械選炭場あり。第二坑及第三坑の出炭を處理し、¹/₄及¹/₂の篩により大塊小塊・粉炭に篩分け、小塊及粉炭は各一時間四十噸の共益社式水洗機に依り精選し、六百噸の貯炭庫を有す。

動力 北海道電燈株式会社より最大一二〇キロワットの供給を受け、第二坑に豫備として一〇〇キロワット發電設備を有す。

鑛夫 六月末現在 坑内夫一〇一名、坑外夫四六名、計一四七名
産額 最近五ヶ年間の産額左の如し。

昭和三年	二〇六、八五五噸	昭和六年	一五〇、二五五噸
昭和四年	二二二、二七一	昭和七年	一三六、一九八
昭和五年	一八二、八七八		

三菱大夕張礦業所

位置 石狩國夕張郡夕張町字大夕張に在り。省線清水澤驛より北方約一七・四軒、夕張川の上流
海拔三一九米の廣濶なる傾斜地帯を占め、専用鐵道の便あり。清水澤驛より港頭迄の軒程左の如
し。

小樽(手宮)一四八軒、室蘭一三六軒、函館三一七軒。

鑛區面積 約一千四百萬坪。

沿革 明治三十九年十月京都合資會社が南大夕張に開坑したるに初まり、四十年七月大夕張炭礦
株式會社之を繼承し、四十四年清水澤、南大夕張間の専用鐵道八軒を敷設せり、超えて大正五年一
月三菱會社の經營に移り、爾來出炭漸増したるも、都合により昭和五年十一月休山せり。

現在稼行の北部新坑區域は大正元年以來調査に従事すること實に十有五年、愈其有望なるを確め
昭和元年南大夕張以北の専用鐵道延長工事及翌二年六月坑道開鑿に着手し、爾來極力諸般の工事を
急施せり。昭和四年五月延長三、〇五〇米の通洞貫通し、同六月鐵道完成と共に送炭を開始し、南
大夕張休止後は専ら力を北部に注ぎ以て今日の坑勢を見るに至れり。

地質及炭層 地質は下部第三紀層に屬し砂岩及頁岩の互層より成る。炭層は石狩炭田下層群に屬する夕張夾炭層にして、東西の横壓力により大褶曲をなし、東翼は隆起顛倒して逆層を形成す。稼行目的の炭層三あり、主要炭層の厚さ四・五米乃至五・五米にして夾雜物を含まず。走向は略南北、傾斜は十度乃至二十度にして層厚層位共に整然たり。

炭質及用途 炭質は粘結膨脹性にして、分析表左の如し。(昭和八年五月三菱礦業研究所分析)

	水分	揮發分	固定炭素	灰分	硫黄	發熱量
塊炭	1.00	42.00	49.50	7.50	0.35	7,700
洗中塊炭	1.00	43.50	49.50	7.00	0.35	7,800
洗粉炭	1.00	43.50	50.50	6.00	0.30	8,000

塊炭・洗中塊炭は灰分少く火力強烈、内外汽船燃料、其他一般汽罐用として名聲噴々たり。洗粉炭は揮發分多く、粘結力強大なるのみならず灰分及硫黄分僅少なるため特に瓦斯發生用、骸炭製造用・船舶燃料用に好適し、市場出廻り後幾何ならざるに、既に本邦第一級炭として一般に其眞價を確認せらるゝに至れり。

日産額 一、四〇〇噸

採炭法 通洞は坑口より一、四〇〇米の個所にて顛倒せる炭層を縫ひ、三、〇〇〇米にて正層部の磐

下に達す。

採炭方式はV型昇向長壁法にして拂面片翼の長さ七〇米乃至一〇〇米、拂の傾斜一〇度乃至一三度なり、層厚の關係上二段拂とし採炭跡は坑内研又は碎石を以て乾式或は濕式充填を行ふ。採炭は完全に機械化し、コールピツク・アイコフセーキングコンベヤー及チエーンコンベヤーを使用し、切羽より坑内ポケットに移し、ポケット下漏斗より炭車に積込む。保安上より坑内動力は多く壓搾空氣を使用、岩層掘進以外には全然發破を禁止せり。

排水法 現在主として通洞水準以上を稼行中なるを以て、通洞内の排水溝により排水す。卸掘進には壓氣動唧筒を用ふ。

通氣法 主要坑口に容量毎分四、二〇〇及五、〇〇〇立方メートルの扇風機を設備す。保安上より一切局部扇風機を使用せず掘進は風管通氣に依れり。

保安 坑内には常に撒水、噴霧、岩粉撒布を行ひ、炭塵及瓦斯爆發の絶無を期すると共に、万一に備ふる爲め救護隊を組織し、ドレーガー六臺、プロト二臺を備ふ。

坑内照明 全部帽上電氣安全燈を使用し、現在ウルフ型及エチソン型合計約一、五〇〇個を有す。

運搬法 坑内に於ける運搬は電氣捲・アイコフセーキングコンベヤー・チエーンコンベヤー・壓氣動ホイスト及逆轉エンドレス等に依り、又通洞奥より選炭場に至る間及坑外運搬には架線式電車並

に蓄電池機關車を使用す。炭車は一〇噸全部鐵製なり。

選炭法 石炭の精選には最新式の選炭機二臺並にバウム水洗機一臺（能力毎時一〇〇噸）及共益社式水洗機四臺（能力毎時各四〇噸）を設備す。

其操業方法は篩目²及³ジンマースクリーンにより塊・中塊及粉に分ち粉炭及中塊炭は總て水洗し各炭種共凡て貯炭庫に移す。

動力

北海道電燈株式会社より最大一、三〇〇キロワット、二二、〇〇〇ヴォルトにて受電、鹿島澤變電所に於て三、三〇〇ヴォルトに遞降配電す。又豫備として鹿島澤に三七五キロワットデイゼル發電機を有す。坑内は主として壓搾空氣を使用し、鹿島澤發電所附近に三七五キロワット壓搾機二臺及一一・二五キロワット壓搾機一臺を設置す。

礦夫 六月末現在 坑内夫五八六名、坑外夫二三六名、計八二二名
産額 開坑以來の産額左の如し。

昭和四年	四〇、〇七〇噸	昭和六年	二七〇、四八四噸
昭和五年	一八一、六三五	昭和七年	三〇五、二五七

附帶事業 大正七年以來南大夕張に於てビーハイヴ式窯五十二基を以て骸炭製造を行ふ。年額約一〇、〇〇〇噸にして鑄物、鍛冶及製鍊用として定評あり。

三井砂川礦業所

礦業權者 三井礦山株式会社

位置 石狩國空知郡砂川町及歌志内村に跨り、炭礦事務所は省線砂川驛より分岐せる上砂川驛附近に在り。上砂川より小樽迄一一七軒、室蘭迄一八三軒なり。

礦區面積 一一、一八四、七〇〇坪

沿革 本礦區發見の年月は詳らかならざるも、當會社の所有に歸したるは實に三十餘年前にして大正二年以來諸種の調査に従事し、同四年一月初めて炭礦事務所を開設し、同年二月より開坑に着手、爾來銳意擴張改善に努め、大正十一年三月田中礦山株式会社文珠炭礦を買収、同十二年七月砂川・文珠兩區域を合併一礦區となしたり。

地質及炭層 地質は下部第三紀層にして砂岩及頁岩より成り、多數の炭層介在す。炭層は石狩炭田下層群及中層群に位し、第一坑區域炭層は礦區中央部にして中層群に屬し、主要なるもの七層、走向略南北、傾斜六十度乃至八十度の急傾斜にして厚さ一・二米より二・一米に及ぶ。

第二坑區域炭層は下層群に屬し礦區東部にして南北兩部に分れ、南坑は一番層より五番層迄五層

三十度乃至六十度西に傾斜し、厚さ四番層二・六米、其他は〇・九米より一・二米、北坑は零番層より六番層迄七層、平均北十度乃至二十五度の緩傾斜にして厚さ〇・九米より二・二米に及ぶ。

第三坑は第二坑北坑と略同一にして、一番層・二番層・三番層・四番層・六番層を稼行す。走向略南北、傾斜西十五度乃至四十五度なり。

第四坑の炭層は下層群に屬し、第二坑の諸炭層と略同一にして傾斜十度乃至四十五度なり。

文珠坑の炭層は中層群に屬し、鑛區の北部に位し場所に依り走向傾斜著しき差異あり。主なるもの六層にして、三十度乃至五十度北西に傾斜し、厚さ〇・九米乃至一・八米なり。

炭質及用途 炭質緻密漆黒の光澤を有し、粘着性に富み、發熱量大にして用途極めて廣きも、就中汽罐用及瓦斯又は骸炭製造用に適す。其分析表左の如し。

	水分	揮發分	固定炭素	灰分	硫黄	窒素	發熱量	骸炭性質
第一坑炭	一・七四	四三・七	四九・八九	五・〇〇	一・三三	一・七五	七、五九〇	粘結僅膨
第二坑炭	一・三〇	三七・八〇	五二・六	四・七四	〇・三三	一・二〇	七、九五	粘結僅膨
文珠坑炭	一・八三	三〇・六	四三・二	六・九	一・二九	一・七九	七、六六	粘結僅膨

坑名 第一坑(日産七五〇噸)、第二坑(日産一、〇〇〇噸)、第三坑(日産六〇〇噸)、
文珠坑(日産二五〇噸)
探炭法 第一坑は水平坑・斜坑に依り開坑、第二坑は南坑・北大坑道・北坑及斜坑の四坑、第三坑

及第四坑は豎入坑道に依り開坑、文珠坑は三坑斜坑にて稼行す。急傾斜層にては斜向長壁探炭法を主とし、拂面は傾斜約四十度、面長約六十米とし、處に依り乾式充填をなす。緩傾斜層にては片磐向長壁法を採用し、前進式と後退式とに依る。手掘の外截炭機・コールピック・ドリル等を使用す。

排水法 水準坑道以上は自然排水、水準以下は各種唧筒に依り排水す。

通氣法 大部分機械通氣なるも第三坑、第四坑等水準上坑道の一部は自然通風を併用す。第一坑第一

斜坑シロッコ(毎分四、〇〇〇立方米)、同第二斜坑チャンピオン(毎分五五〇立方米)、第二坑斜坑シロッコ(毎分一、六六七立方米)、同南坑第一斜坑シロッコ(毎分一、六六七立方米)、同第二斜坑シロッコ(毎分二、〇〇〇立方米)、第二坑北大坑道シロッコ(毎分一、六六七立方米)、同北坑シロッコ(毎分一、一〇〇立方米)、第三坑シロッコ(毎分三、〇〇〇立方米)、文珠坑三坑シロッコ(毎分一、六六七立方米)を設備す。其他局部用として小型シロッコ・ヴァノプロペラー型及壓氣プロペラー型等數十臺を備ふ。

保安 瓦斯炭塵爆發防止の爲め岩粉撒布及撒水を行ひ、又救命器隊を組織しプロト十五臺、ドレ

ーガー六臺、ブルモーター一臺及瓦斯マスク・ホースマスク等附屬品を備ふ。

坑内照明 全部エチソン帽上燈を使用す。備付數一、九〇〇個。

運搬法 切羽に於ては急傾斜層は斜面を利用降下せしめ、或は固定樋を用ふることあり。緩傾斜層

にては主としてチエンドラックコンベヤーを用ふ。主要水準坑道には電氣機關車、斜坑及中切には捲揚機、遠距離にはエンドレスを使用す。鑛車は木製〇・八噸車なり。

選炭法 機械選炭場を設備し、先づ塊・中塊・粉炭に篩分け、中塊・粉炭は水洗機にて精選、中塊の一部は更に小塊に篩分け再洗機により精選す。篩目は $\frac{1}{2}$ 、貯炭能力三、〇〇〇噸なり。

動力 五〇〇キロワットの火力發電所を設け、他に四、二〇〇K・V・A變壓器を備へ、北海道電燈株式會社より一、〇〇〇キロワットを購入受電す。

鑛夫 六月末現在 坑内夫一、一〇二名、坑外夫三八九名、計一、四九一名

産額 最近五ヶ年の産額左の如し。

昭和三年	六八五、二一八噸	昭和六年	五五一、三六四噸
昭和四年	六九七、四四七	昭和七年	五三三、八四五
昭和五年	六二二、〇一三		

三井美唄鑛業所

鑛業権者 三井鑛山株式會社、日本石油株式會社

位置 石狩國空知郡美唄町及三笠山村に跨り、鑛業事務所を美唄町字美唄に置く。函館本線美唄

驛より南東約三軒の距離にあり、又此附近に美唄驛より分岐せる貨物専用驛南美唄驛在り、南美唄驛より小樽迄九五軒、室蘭迄一六〇軒なり。

鑛區面積 探掘六、三三三、〇二〇坪、試掘三、三一九、六〇〇坪。

沿革 本鑛區は元村井鑛業株式會社の所有なりしが、大正九年寶田石油株式會社之を讓受け、其の後専ら炭層調査を行ひ、大正十年十月、同社の日本石油株式會社に合併すると共に同社名義に移れり、大正十一年三井鑛山株式會社より東部隣接鑛區の一部を讓受け、光珠炭鑛と稱し、大正十二年七月起業に着手し、落合澤に水平坑並に斜坑を開坑し之を落合坑と名づけ、次で大正十三年三月田中汽船株式會社經營の沼貝炭鑛を買收し、奥澤第一・第二豎入坑の開鑿に着手し、同年十一月營業を開始せり。昭和三年八月其經營一切を三井鑛山株式會社にて引受け、同社所有鑛區の一部を併合して鑛區面積を擴大し、三井美唄炭鑛と改稱し、在來の落合坑を第一坑、奥澤坑を第二坑と改め

夏良 九六

昭和四年第三坑を開坑し、又同年奥澤通洞の開鑿に着手し昭和六年第一坑斜坑卸先と連絡せり。一方選炭機並に鐵道線路を新設し、昭和六年十二月新設備の運轉を開始し、爾後更に増産計畫の下に諸設備の改善並擴張を行ひ來れり。

地質及炭層 地質は下部第三紀層に屬し、頁岩及砂岩の互層より成り、炭層は石狩炭田上層群及中層群に位し其數十數條あれども、主要なるものは上層群三番層〇・九米、同四番層〇・九米、中層群二番層〇・八米、同三番層一・一米、同四番層〇・九米、同五番層一・五米、同上層二〇米、同木層一・一米の諸層なり。大体東西に走向を保ち南に二十度内外の傾斜をなす。

炭質及用途 炭質優良にして不粘結性なれば一般汽罐用・家庭用等に適す。分析表左の如し。

水分	揮發分	固定炭素	灰分	硫黄	發熱量	粘炭性質
三・三八	四〇・四〇	四九・四六	六・七六	〇・三五	七、七〇〇	不粘結

坑名 第一坑(日産九〇〇噸)、第二坑(日産一〇〇噸)、第三坑(日産二〇〇噸)

採炭法 第一坑は落合澤右股上流に於て斜坑及水平坑を開坑し、第二坑は一ノ澤右股上流に於て豎入坑道及斜坑を開坑し、第三坑は峯延山脈南側に於て豎入坑を開坑、奥澤通洞は一ノ澤中流より開坑せる二、三五〇米の大豎入坑道にして五番層及三番層に着炭、更に炭層に沿ふて坑道を延長第一坑卸先と連絡し、目下第二坑斜坑底及開鑿中の第四坑斜坑底に向ひ主要運搬坑道の掘鑿を急ぎつゝあり。

り。採炭法は各坑共片磐向長壁法を採用し、拂面の長さ百米にして、截炭機・空氣及電氣ドリル等を用ひ機械採炭を行ふ。

排水法 第一坑は斜坑より奥澤通洞下水に導き、第三坑は全部自然排水、第二坑は電氣唧筒に依り排水す。

通氣法 第三坑は自然通風、第一坑はシロツコ(毎分三、〇〇〇立方厘米)、第二坑はシロツコ(毎分一、五〇〇立方厘米)の扇風機に依り通風を行ふ。

保安 坑内濕潤にして瓦斯炭塵の危険なきを以て特に施設をなさず。

坑内照明 主としてエヂソン帽上燈を使用す、備付數四五〇個。

運搬法 切羽は電動切羽運搬機・小型捲揚機、片磐は手押・馬匹又はテールロープ機、斜坑は電氣捲揚機に依り、主要運搬坑道、通洞及坑外には總て電氣機關車を使用す。

選炭法 機械選炭にして、先づ塊粉に篩別、大塊は手選し小塊及粉炭はヂツガーにて水洗を行ひ精選す、篩目は25mmとす。貯炭庫は二、〇〇〇噸の能力を有す。

動力 主として電力を使用、北海道電燈株式會社より常時一、〇〇〇キロワットを受電す。

鑛夫 六月末現在 坑内夫四二九名、坑外夫二二三名、計六四二名
産額 最近五ヶ年の産額左の如し。

三井美唄鑛業所

九八

昭和三年	一三五、九六一	昭和三十六年	一九三、八三〇
昭和四年	一六六、六一〇	昭和十七年	二五六、〇一二
昭和五年	一九四、五五九		

住友炭礦株式會社

住友上歌志内礦

位置及面積 石狩國空知郡歌志内村大字上歌志内に在り、省線歌志内驛より東方約〇・八軒交通至便なり。

鑛區面積 四、二六〇、八〇〇坪。

沿革 明治二十七年坂市太郎氏出願許可を得、翌二十八年石狩石炭株式會社の設立と共に同社に起業を託したるも、水準下の探掘を好まず、大正元年之を坂氏に返却せり。大正二年中同氏斜坑を開鑿し、同三年第一豎坑を開鑿、大正六年九月坂炭礦株式會社を組織經營、大正十三年住友合資會社との共同經營となり、翌年住友坂炭礦株式會社と改稱、昭和五年四月住友炭礦株式會社の設立と共に同社の經營に移れり。

地質及炭層 地質は下部第三紀層に屬し、主として頁岩より成り、所々に砂岩を夾めり。炭層は石狩炭田中層群に屬し、現在稼行の炭層は下部より九番層・十番下層及十番層なり。層厚は九番層二・一米、十番下層〇・九米、十番層一・八米にして數多の斷層の爲め傾斜は水平より七十度に及べり。

住友上歌志内礦

九九

炭質及用途 粘結性瀝青炭にして火力強く船舶及工場汽罐用に適す。又瓦斯發生量多く、就中中塊及粉炭は製出骸炭の粘結力高きを以て瓦斯並に骸炭製造用として瓦斯會社及セメント會社に賞用せられ、特に十番層粉炭は鍛冶粉炭と稱し道内及東北地方に廣く賞用せらる。又塊炭及中塊炭は粘結適度にして灰分少く火力強く且つ火持宜しきを以て、普通型ストーヴ用に適す。分析表左の如し。

炭種名	水分	揮發分	固定炭素	灰分	硫黄分	發熱量
塊炭	〇・六五	四一・八五	五三・七〇	三・九三	〇・九八	七、八〇〇
洗中塊炭	〇・七八	四一・三六	五三・八四	五・二二	〇・九二	七、七〇〇
洗粉炭	〇・八三	四一・〇八	五三・二七	五・八二	〇・六八	七、六〇〇
鍛冶粉炭	〇・八二	四一・七七	四七・五五	九・八七	〇・九九	七、三五〇

坑名 第一豎坑(日産五五〇噸)

探炭法 現在稼行せるは第一豎坑(二四九・〇米)のみにして、第一豎坑々底より東方に九〇〇米の豎入坑道を開鑿し之を基準として區割探炭をなし、各々後退式長壁法を行ふ。急傾斜層にては研を以て自然勾配による手詰充填を行ふ。探掘に際しては鑿岩機及コールビットクを使用す。

排水法 湧水極めて少なく、坑内水は殆ど全部撒水より生ずるものにして、電動唧筒に依り排水を行ふ。

通氣法 本坑にケーブル(毎分二、五〇〇立方米)、サクシ坑にシロツコ(毎分一、六〇〇立方米)の扇

風機を設置す。

保安 切羽は撒水により、坑道は岩粉撒布を以て炭塵の發生、爆發及其傳播を豫防し、尙ほ救命器プロト八、ドレーガー五、其他の器具を備ふ。

坑内照明 ウルフ電氣安全燈(四〇〇個)を使用す。

運搬法 急傾斜の切羽は木樋又は鐵樋により流下せしめ、又緩傾斜に於ては壓縮空氣を動力とせるセーカーコンベヤーにて炭車に積み手押又は馬匹により捲立迄搬出し、坑道は蓄電池機關車にて第一豎坑底に運び、捲揚機にて坑外に捲揚げ、エンドレスに依り選炭場に送る。炭車は木製〇・七噸車なり。

選炭法 選炭機二臺を設置し、塊、中、洗粉、鍛冶粉、粉炭に篩別し、中塊、粉炭はバウム式水洗機を以て水洗をなし、一部粉炭は未洗の儘鍛冶粉又は十番粉として賣出す。篩目は塊炭²⁵以上、中塊¹、²⁵、洗粉炭¹以下、鍛冶粉炭¹以下、粉炭¹以下なり。容量三、〇〇〇噸の貯炭庫を有す。

動力 電氣及蒸氣を併用し、電力は北海道電燈會社より常時六〇〇キロワットの供給を受け歌志内、新歌志内礦と共同使用す。

鑛夫 六月末現在 坑内夫二二四名、坑外夫九六名、計三二〇名

産額 最近五ヶ年の産額左の如し。

昭和三年	一六〇、九九七吨	昭和六年	一六〇、〇六六吨
昭和四年	一七一、七一一	昭和七年	一四四、四九二
昭和五年	一六五、五五四		

住友歌志内礦

位置 石狩國空知郡歌志内村字神威に在り、歌志内線神威驛より西約一・五軒にして交通便なり。
 礦區面積 三、四一六、二〇〇坪。

沿革 明治二十三年頃河野鯨雄氏試掘許可を受け、同三十二年中村彌六氏之を買收して探掘に轉願し、同三十八年初めて開坑、中村炭礦と稱し、大正元年十二月佐々木愼思郎氏買收、歌志内炭礦と改稱、同六年八月奔別炭礦株式會社、翌七年十二月山下鑛業株式會社、十一年三月山下汽船鑛業株式會社、同十三年十二月北海道鑛業株式會社等に轉々して、昭和三年十二月住友坂炭礦株式會社に移り、同五年四月本社の創立と共に其經營となれり。

地質及炭層 地質は下部第三紀層に屬し、砂岩・頁岩の互層中に十數條の炭層を介在す。炭層は石狩炭田中層群に屬し一番層を最下層とし、二番層・五番層・七番層・八番層・番外層・九番層・十番層・十一番層・十二番層等あり。厚さ〇・九米より三・六米に達し、現在番外層及五・八・九番の各層を採掘す。地層變動甚しく走向、傾斜一定せざるも、概して三十度乃至五十度傾斜す。

炭質及用途 粘結性瀝青炭にして漆黒色の光澤を有し、火力強く、高壓通風装置を有する船舶燃料

に適す。又粉炭は粘結力特に強く骸炭分に富むを以て骸炭製造用に適す。其分析表左の如し。

炭種	水分	揮發分	固定炭素	灰分	硫黄分	發熱量
塊炭	〇・五〇	四一・三五	五三・二七	四・八	〇・九〇	七、八〇〇
洗中塊炭	〇・四一	三九・八三	五〇・二一	九・六五	〇・九〇	七、四〇〇
粉炭	〇・六九	三九・四三	五〇・三	七・五	〇・九〇	七、五〇〇

坑名 第一斜坑(日産二五〇噸)、第二斜坑(日産一〇〇噸)、目下東部採炭の目的にて通洞開鑿中なり(現在一、二〇〇米延長)。

採炭法 第一斜坑は十二番層中に偽傾斜に卸し、第二斜坑は岩石中に卸し、各鑿入坑道に依りて着炭せり。採炭は前進式又は退却式長壁法にして、切羽面の長さは炭層の傾斜に沿ひ三六米とす。

排水法 水平坑道水準上は自然排水、斜坑は各種唧筒に依り排水す。

通氣法 第一斜坑シロッコ(毎分八五、〇〇〇立方呎)、第二斜坑シロッコ(毎分五〇、〇〇〇立方呎)を設備し、通洞にはシロッコ型局部扇風機を使用せり。

保安 切羽は撒水、坑道は岩粉撒布により炭塵發生と爆發豫防に備ふ。

坑内照明 ウルフ帽上燈三〇〇個を使用す。

運搬法 切羽に於ては炭層の傾斜を利用し或は鐵板流に依り流下せしめ、水平坑道は手押又は馬匹により坑外に搬出す。斜坑は捲揚機に依り、坑外は馬匹・インクライン等に依る。炭車は木製〇・七

噸車なり。

選炭法 三組の選炭機にて、先づ塊・中塊・粉炭に分ち、2'以上を塊とし、中塊及粉炭は一時間九十噸能力のパウム式水洗機にて水洗、中塊2'以下及粉炭1'以下に篩別け、水洗機により洗出せられたる竊炭は二等塊炭と共に碎硬機により粉碎し、再び原料炭に加ふる事とせり。

動力 北海道電燈會社より上歌志内礦と共同にて供給を受け、又一部蒸氣を使用す。

礦夫 六月末現在 坑内夫二一六名、坑外夫一一五名、計三三一名

産額 最近五ヶ年の産額左の如し。

昭和三年	七八、七三二噸	昭和六年	一二〇、〇〇四噸
昭和四年	一〇七、四八〇	昭和七年	一一一、九四四
昭和五年	一三一、六二六		

住友新志内礦

位置 石狩國空知郡歌志内村字下歌志内に在り。歌志内線神威驛より南方三・九杆、海拔一千尺の分水嶺を夾み交通稍不便なり。

礦區面積 二、九七〇、〇〇〇坪。

沿革 明治四十年末日本興業株式會社に於て試掘許可を受け、同四十四年九月奔別炭礦株式會社に移り、大正六年十二月始めて現在の二番坑を開鑿し、同七年十一月探掘に轉願、其後山下礦業株式會社・山下汽船礦業株式會社・北海道礦業株式會社等を経、昭和三年十二月住友炭礦株式會社に移り、同五年四月本社の創立と共に其經營となれり。

地質及炭層 地質は下部第三紀層に屬し、頁岩・砂岩、稀に礫岩の互層より成り、炭層は石狩炭田下層群に當り十數條あるも、現在探掘中のものは一番・四番・五番・六番・七番・八番の各層なり傾斜大略西六十度、走向略南北、厚さは九番層の一・二米の外何れも一・八米乃至二・二米にして、中に三・六米に達するものあり。

炭質及用途 粘結性瀝青炭にして膨脹性强く、燃燒容易、火力強大、火持よく、汽罐燃料に適し、

又該炭分に富み、硫黄分少きを以て良質の骸炭製造に用ゐらる。分析表左の如し。

炭種	水分	揮發分	固定炭素	灰分	硫黄分	發熱量
塊炭	〇・六六	四三・二一	五〇・九三	六・五〇	〇・二九	七、七〇〇
洗中塊炭	〇・二九	三九・九四	五一・二五	八・五〇	〇・三三	七、四〇〇
洗粉炭	〇・四三	三九・二七	四九・八八	一〇・五三	〇・三三	七、四〇〇

坑名 上瀧坑（日産二五〇噸）を主とすれども目下水準下探掘の爲め斜坑開鑿中にして現在既に日産三〇〇噸の能力を有せり。

採炭法 豎入又は沿層坑道に依り開坑、長壁式採炭法を採用す。

排水法 上瀧方面は未だ水準以上の採炭なるを以て全部自然排水にして、斜坑には電氣唧筒を使用す。

通氣法 上瀧方面は全部自然通風により、斜坑は毎分二〇、〇〇〇立方呎の假扇風機を備ふ。

保安 瓦斯炭塵の發生極めて尠く特別の施設なし。

坑内照明 ウルフ帽上燈（一五〇個）を使用す。

運搬法 切羽に於ては炭層の傾斜を利用し自然に流下せしめ、坑道は手押又は馬匹に依り、主要坑道は蓄電池機關車により選炭場迄搬出、元山選炭場と神威驛積込場間は約三・五杆の循環架空索道を架設し、石炭及物資の輸送をなす。炭車は木製〇・七噸車なり。

選炭法 元山選炭場に於て2'以上の塊炭及以下の粗炭に篩別け、2'以上は元山にて手選し、2'以下は神威選炭場に於て一時間四十颯の共益社式水洗機により水洗し、中塊2'1'と粉炭1'以下に篩分水洗し、尚編炭は一時間二十颯の共益社式再洗機により精選、二等炭を採收す。

動力 北海道電燈株式会社より上歌志内礦と共同にて供給を受け、一部蒸氣を使用す。

産額 六月末現在 坑内夫一〇七名、坑外夫八三名、計一九〇名

昭和三年	六〇、三〇三颯	昭和六年	六五、九七二颯
昭和四年	七五、一八九	昭和七年	六三、五八九
昭和五年	七四、九七三		

住友奔別礦

位置 石狩國空知郡三笠山村大字幾春別字奔別に在り、幾春別驛の東北約二・五軒、徒歩三十分にして達す。

礦區面積 四、五二八、九〇〇坪。

沿革 明治十三年工部省御用係島田純一・山際永吾兩氏に依り發見せられ、其後北海道鑛床調査部大島六郎・桑田知明兩技師の調査に依り一煤田なる事確認せられ、明治二十九年奈良義路氏外二名試掘許可を受け、同三十五年始めて開坑、三十九年山縣勇三郎氏買收諸般の設備を擴張し、其後日本興業株式会社・奔別炭礦株式会社・山下鑛業株式会社・山下汽船鑛業株式会社・北海道鑛業株式会社等を経、昭和三年十二月住友坂炭礦株式会社に移り、同五年四月本社の創立と共に其經營となれり。

地質及炭層 地質は下部第三紀層に屬し砂岩・砂質頁岩及頁岩の互層より成り、其中に十餘の炭層介在し、概して炭層の變化甚しく走向傾斜一定せず、區域により十五度乃至八十度位の傾斜をなす現在稼行せるもの一番層より十二番層の十三層（八番層に下層あり）あれども、主として二番層・

三番層・四番層・五番層・九番層・十番層の六層を採掘す。厚さ概して〇・九米、一・二米、一・五米なれども、中には一・八米乃至一・七米に及ぶものあり。

炭質及用途 不粘結性、火附速にして、火焰長く、火力強し、又灰分硫黄分共に少なく、純不粘結性なるを以て汽罐燃料として各種工場並に船舶に使用せらる。殊に塊炭及中塊炭は質堅緻にして、粉化せざるを以て改良型ストーブ用として汎く賞用せらる。最近の分析表左の如し。

炭種	水分	揮發分	固定炭素	灰分	硫黄分	發熱量
塊炭	一・七六	四三・七六	四七・二三	七・三五	〇・三三〇	七、三三九
中塊炭	一・七六	四四・九	四六・五九	七・四六	〇・三三三	七、三三九
洗粉炭	二・二七	四三・七一	四五・四六	九・五	〇・二八	七、一〇五

坑名 萬世斜坑(日産二二〇噸)、萬世坑(日産二〇〇噸)、中ノ澤坑(日産二二〇噸)、計六四〇噸採炭法 各坑共充填又は無充填の前進式長壁法を採用し、鑿岩機・コールピック・電氣ドリル等を使用す。

排水法 水準以上は自然排水、斜坑は電氣唧筒に依り排水す。

通氣法 萬世斜坑にシロッコ(毎分五〇、〇〇〇立方呎)、中ノ澤坑にシロッコ(毎分四〇、〇〇〇立方呎)を備へ、萬世坑は自然通風に依る。

保安 概して瓦斯炭塵少く特記すべき設備なし。

坑内照明 エヂソン(二二〇個)ウルフ帽上燈(二九〇個)及ウルフ安全燈(二〇〇個)を使用す。

運搬法 切羽に於ては炭層の傾斜により自然落下せしむる外鐵板流し、水流し、チエーンコンベヤに依り流下せしめ、片磐坑道は手押又は馬力に依り、斜坑は電氣捲揚機に依り搬出す。坑外は下綱式エンドレスに依り選炭場に運ぶ。炭車は木製〇・五五噸車及〇・八噸車なり。

選炭法 先づ3'以上の塊炭は手選し、3'以下は毎時能力百噸のパウム水洗機にて精選したる後塊炭(3'—24')、洗中塊(24'—12')、洗粉炭(12'以下)に篩別す、尙毎時能力五十噸のパウム再洗機にて並中塊及並粉を採收す。

動力 電力は北海道電燈株式会社より平均五五〇キロワットの供給を受け、此外ランカツシャー七基、田熊式二基、多管式三基の汽罐を使用す。

産額 六月末現在 坑内夫四三六名、坑外夫二一七名、計六五三名
最近五ヶ年の産額左の如し。

昭和三年	一五六、二八九噸	昭和六年	一八二、六八五噸
昭和四年	一七八、〇九〇	昭和七年	一七五、七三九
昭和五年	二一二、八四〇		

住友唐松礦

位置 石狩國空知郡三笠山村大字市來知村に在り、幾春別線唐松驛より西北約一・六軒なり。
鑛區面積 六二〇、〇〇〇坪。

沿革 明治三十一年六月奈良義路氏奔別炭鑛發見の際、炭層の連絡を調査し、試掘權を得たるも當時炭況不振、交通又不便なりし爲め開坑に至らず、同三十八年六月漸く着手、同年十二月より探炭輸送を開始せり。大正五年九月住友合資會社の經營となり、當社の創立と共に其經營に移れり。昭和二年七月以來擴張工事に着手、同五年六月完了年産十二万噸の設備となれり。

地質及炭層 地質は主に上部第三紀層に屬し頁岩發達し、含炭層は砂岩・頁岩の互層より成る。炭層は石狩炭田上層群及美唄炭層群に屬するもの大小十餘層あり。現在は上層群の一番層(二・一米、三番層(二・四米)を稼行す。略東西に背斜軸あり、南翼炭層は傾斜四十五度、走向北八十二度三分西、北翼炭層は傾斜五十度、走向北六十度東なり。

炭質及用途 火力強く灰分少く、又煙極めて少なく、絶対に粘結せざるを以て塊炭及洗中塊炭は改良型ストーヴ用に適し、洗粉炭は自動給炭設備ある汽罐用として最適なり。分析表左の如し。

炭種	水分	揮發分	固定炭素	灰分	硫黃分	發熱量	炭質性質
塊炭	二・四	四五・八	四九・六	六七・三	〇・三五	七、一〇〇	弱粘結
中塊炭	二・四六	四六・九	四三・四	七二・二	〇・三九	七、一〇〇	同
洗粉炭	二・七〇	四三・七	四三・〇	一〇・八	〇・三七	六、九〇〇	同

坑名 通洞北斜坑及南斜坑(日産二〇〇噸)。

探炭法 通洞斜坑に依り、片磐前進式長壁法にて探炭し、拂跡には土砂充填をなす。手掘の外ジャックハンマナー・コイルピック・電氣ドリル等を使用す。

排水法 湧水少く大部分自然排水にして南斜坑には唧筒一臺を備ふ。

通氣法 南斜坑にシロッコ(毎分四〇、〇〇〇立方呎)、北斜坑にキャベル(毎分三〇、〇〇〇立方呎)を設備す。

保安 未だ稼行區域小にして瓦斯炭塵の發生少く特別の施設なし。

坑内照明 エヂソン帽上燈(一七〇個)及ウルフ安全燈(二〇個)を使用す。

運搬法 切羽に於ては炭層の傾斜を利用流下せしめ、水準上は人力及馬匹により、斜坑は捲揚機により、坑外は選炭場迄蓄電池機關車に依る。選炭場より唐松驛積込場迄は架線式電車にて搬出す。

炭車は鐵製一噸車なり。

選炭法 先づ2'以上の大塊及中塊以下に篩分け、中塊以下は毎時能力五十噸の共益社式水洗機にて

水洗、中塊(2'1')と粉炭(1'以下)に精選す。尚ほ毎時能力二十噸の共益社再選機により並中塊及並粉を採收す。

動力 北海道電燈株式會社より購入各所に配電す。

礦夫 六月末現在 坑内夫一三九名、坑外夫四〇名、計一七九名

産額 最近五ヶ年の産額左の如し。

昭和三年	一四、九一九噸	昭和六年	五七、六六一噸
昭和四年	七、一〇〇	昭和七年	四四、八七三
昭和五年	五二、〇五三		

尙目下美唄層開坑起業中にして近く右完成の上は産額増加し殊に品質著しく向上する豫定なり。

茂尻鑛業所

鑛業權者 大倉鑛業株式會社

位置 石狩國空知郡赤平村・芦別村・歌志内村に跨り、鑛業所は根室本線茂尻驛より僅か數町の處に在り。小樽港を距ること一三五・七籽、室蘭港を距ること二〇〇・三籽、留萌港を距ること九五・四籽、函館を距ること三八一・七籽なり。

鑛區面積 四百餘万坪。

沿革 明治四十年頃より大倉喜八郎男の所有なりしが、大正五年初めて炭層の調査を行ひ、同年一月大倉鑛業株式會社の手に移り、同年七月十三日事業を開始し、爾來着々施設を整備して今日の業態を見るに至れり。

地質及炭層 地質は下部第三紀層にして砂岩・頁岩及蠻岩の累層より成り、其中に三十有餘の炭層介在す。炭層は空知炭田の上層群・中層群・下層群の三群層に跨り、走向概して南北、傾斜は二十度乃至七十度東に及び、北方は緩かなるも南進するに従ひ急傾斜となる。主なる炭層は上層群に於て虎ノ皮層、八番層より十番層迄の本層下層を合して八層にして、厚さは虎ノ皮三・五米、九番層

一米乃至二米、他は一米乃至一・五米、中層群は五層より成り厚さ一・五米乃至三米、下層群は一番層より八層迄八層厚さ〇・七米乃至一・五米なり。

炭質及用途 粘結膨脹性に富み、火力強烈、一般燃料に適し、殊に硫黄の含有量僅少なるを以て優良なる骸炭及瓦斯原料炭として歓迎せらる。分析表左の如し。

炭種	水分	揮發分	固定炭素	灰分	硫黄	發熱量	炭質性質
塊炭	一・〇〇	四一・八〇	五三・九	四・三	〇・六	七、九五〇	膨脹粘結
中塊炭	一・五〇	四〇・二〇	四九・九〇	八・五〇	〇・四八	七、六〇〇	同
A洗粉炭	一・五五	四二・二五	五〇・九八	六・三三	〇・四二	七、七五〇	同
洗粉炭	一・七〇	元・七〇	四七・四六	二・二七	〇・五三	七、七〇〇	同

坑名 萬慶斜坑(日産二五〇噸)、一ノ澤坑(日産一五〇噸)、萬慶三坑(日産二〇〇噸)、上層斜坑(日産三〇〇噸)、右坑(日産一五〇噸)、新三坑(日産一〇〇噸)

採炭法 水準以上にありては露頭より直ちに水平坑道を開き、水準以下は岩石中又は炭層中に斜坑を開鑿し、炭層の傾斜、厚さ及上下盤の良否により充填長壁法を主とし時に残柱法を適宜應用、手掘の外ジャックハンマー及電氣ドリル等を使用す。

排水法 水準以上は全部自然排水、水準以下の各斜坑は唧筒により排水す。

通氣法 全部機械通風に依り、萬慶三坑シロッコ(毎分七〇、〇〇〇立方呎)、萬慶斜坑シロッコ(毎

分六〇、〇〇〇立方呎)、萬慶新三坑シロッコ(毎分五〇、〇〇〇立方呎)、上層斜坑シロッコ(毎分七〇、〇〇〇立方呎)、右坑シロッコ(毎分三〇、〇〇〇立方呎)、一ノ澤坑シロッコ(毎分五〇、〇〇〇立方呎)等を設備す。

保安 浮游炭塵の防止に對しては切羽撒水・噴霧装置をなし、主要坑道には岩粉棚を設け、岩粉撒布をなす。尙救護隊を組織し、ドレーガー式救命器六臺と酸素吸入器二臺を備ふ。

坑内照明 エチソン帽上燈(六四〇個)、ウルフ安全燈(三七八個)を使用す。

運搬法 切羽に於ては炭層の傾斜により漏斗落し、鐵樋流、チエーンコンベヤー及シエーカーコンベヤー等を用ひ坑道は電車、單線エンドレス、テールロープ、馬匹、人力、斜坑は捲揚機により、坑外は電車にて運搬す。

選炭法 選炭機は十時間能力一、五〇〇噸、先づ $3'$ 以上以下に分ち $3'$ 以上は手選し以下は三槽式バウム二臺の主洗水洗機にて精選、水洗塊(14 $1/2$)、水洗中塊(14 $1/2$)、別小塊(14 $1/2$)、洗粉(以下)、A洗粉(以下)の五種に分級し、再洗用五〇噸バウム機には主洗機二槽三槽よりの抜研を送り再洗を行ふ。

動力 二、〇〇〇キロワットの火力發電所を有し各所に配電す。

鑛夫 六月末現在 坑内夫七一四名、坑外夫二四八名、計九六二名

産額 最近五ヶ年の産額左の如し。

昭和三年	三〇二、七〇三	昭和六年	二九九、六〇八
昭和四年	三二五、七六九	昭和七年	二六七、二一五
昭和五年	三一、〇一六		

太平洋炭礦株式會社

春 採 坑

位置 釧路國釧路市春採に在り、釧路市の南東約四軒、春採湖畔に位す。根室本線東釧路驛より分岐せる釧路臨港鐵道線春採驛は坑所内に在り。同驛より四・二軒にして知人海岸積込場に達し海陸交通至便なり。

鑛區面積 採掘一、八〇八、〇〇〇坪。試掘約一一、〇〇〇、〇〇〇坪。

沿革 釧路炭田は明治初年米人ライマン氏の發見に係り、開拓使時代初めて桂戀村に於て採掘せりと云ふ。當坑は明治十九年山田朔郎氏の發見せる所にして、同二十年安田善之助氏之を讓受け、初めて開坑春採炭山と稱し、二十三年運炭用馬車軌道を釧路港頭迄敷設し、其後安田商事株式會社に移り、一時盛に操業せしも坑内出水多く且つ炭界不況の爲め大正三年以後休業す。大正六年十月末木村久太郎氏之を買收し、木村組炭礦と改稱し、漸次設備を改善し、銳意出炭に努め大正九年五月一日三井釧路炭礦と合併し、太平洋炭礦株式會社を組織し、同十二年桂戀炭礦を買收し現在に及

べり。

地質及炭層 白堊紀を整合に被覆せる第三紀層中に在り、砂岩・頁岩及礫岩中に介在し、稼行し得るもの二層あり、本層・上層と稱す。本層は厚さ二・四米、中に〇・二米・〇・三米の夾み二枚あり。上層は本層の上部七・六米乃至九・一米を隔て、〇・二米の縞炭を夾み、上部は〇・七米乃至〇・九米、下部〇・二米の厚さを有す。走向は略北三十度西、傾斜南西に五度乃至七度なり。

炭質及用途 堅緻なる不粘結性炭にして、粉炭少なき特徴とし、特に煤煙少なきを以て家庭用は勿論汽船燃料・各工場用・鐵道用等に適す。尙最近研究の結果、油化率大なるが故に油化原料炭として有望なり。分析表左の如し。

炭種	水分	揮發分	固定炭素	灰分	硫黄分	發熱量	炭質性質
上層	四・九五	四五・〇五	四三・六七	七・三三	〇・四八	七、二六〇	不粘結
本層	四・九六	四五・〇五	四四・三〇	五・七〇	〇・五五	七、三三五	同
塊炭	五・五六	四四・六八	三八・三五	一一・四二	〇・二九	六、四〇〇	同

坑名 春採一坑(日産約八〇〇噸)。

採炭法 現在は春採一坑(斜坑)のみを稼行し、二坑は休止中なり。一坑は平均六度の傾斜にて開鑿せる斜坑にして(約一、四五五米)七三乃至一三〇米毎に片磐坑道を設け、上層は前進式、本層は後退式長壁法に依りて、主として機械採炭を行ふ。機械採炭によるもの全出炭の七九%なり。截炭

機・鑿岩機・電氣ドリル等を使用す。

排水法 各所に電動唧筒を備へ揚水す。

通氣法 一坑管卸にシロッコ(毎分六〇、〇〇〇立方呎)扇風機を設置機械通風を行へども、冬季は自然通氣にて充分なり。

保安 爆發瓦斯の發生尠く、坑内一般に濕潤にて瓦斯炭塵に對する特別施設なし。

坑内照明 エヂソン(三二六個)及ウルフ(一九三個)、ニッフエ(五三三個)の帽上燈を使用し、一部ウルフ油安全燈(一三四個)を使用す。

運搬法 切羽には各種シエーカーコンベヤーを使用し、斜坑々口に一六〇馬力エンドレス機を設置し坑内より選炭場迄搬出す。鑛車は〇・七噸車なり。

選炭法 十時間千噸の處理能力を有する機械選炭場を設備。大塊丸目七六耗以上、中 三八耗以上七五耗以下、小塊一九耗以上三七耗以下、粉炭一八耗以下の四種に分ち、中塊以下は一時間四五噸のジッガーに依り水洗す。約三千噸の貯炭能力を有す。

動力 坑内外共全部電力を使用、北海道電燈會社鳥取變電所より最大二二〇キロワットを受電す尙豫備として三〇〇キロワット火力發電所を設備す。

鑛夫 六月末現在 坑内夫四一四名、坑外夫一八三名、計五九七名

産額 最近五ヶ年の産額左の如し。

昭和三年	一八五、九八一吨	昭和六年	二一六、三〇八吨
昭和四年	一九二、七九二	昭和七年	二二〇、六〇八
昭和五年	二一九、三六九		

輸送及積込 春採坑出炭は選炭場より直ちに臨港鐵道貨車にて知人貯炭場に輸送。同所は貯炭能力八万噸、釧路築港南防波堤上に鐵製積込棧橋を設け、貯炭場よりエンドレスロープ(一、一一一米)にて搬送、棧橋に設置せるベルトコンベヤーを以て本船直積をなす。積込能力一日千五百噸、三千噸乃至五千噸級汽船を繋留す。目下第二積込棧橋計畫中なり。

別保坑

位置 釧路國釧路郡釧路村字別保に在り。根室本線上別保驛より東南約三・二軒此間専用軌道あり、同驛より鐵路九・七軒にして濱釧路驛河岸貯炭場に、又其中間東釧路驛より釧路臨港鐵道により七・四軒にして釧路港知人貯炭場に達し、運輸交通便なり。

採掘面積 採掘四、七〇九、七〇〇坪、試掘約千七百万坪。

沿革 一坑は明治九年米人ライマン氏の發見に係り、明治二十九年日本炭礦株式會社及共立商會採掘權を得しも開坑するに至らず、同三十八年六月大阪礦業株式會社の有に歸し、大阪炭礦と稱し、翌年開坑に着手し、大正五年三月三井礦山株式會社之を譲受け、三井釧路炭礦と改稱設備の改善を圖り、大正九年一月釧勝興業株式會社所有の別保炭礦を買收し之を二坑と稱し、同年五月一日太平洋炭礦株式會社創立に際し舉げて同社の有に歸す。

二坑は明治十七年官有林地内に於て角材伐採中石炭露頭を發見、同二十六年初めて試掘を開始し同二十九年一月採掘に轉願、山縣勇三郎氏之を經營し、同四十一年釧勝興業株式會社に移り別保炭礦と稱せしが、大正九年一月三井礦山株式會社に買收せらる。

又大正十三年厚岸郡厚岸町大字苦多村上尾幌に探掘區設定別保三坑と稱せり。

地質及炭層 地質は第三紀層砂岩・頁岩・盤岩より成り、炭層は〇・六米乃至一・二米の厚さを有し夾雜物なく、走向百三十五度内外にして、北東より三度乃至七度南西に傾斜す。

炭質及用途 不粘結性にして、火付容易、煤煙少く、硫黄分・灰分少きを以て家庭用・汽船燃料・各工場用・鐵道用等に適す。分析表左の如し

塊	炭	水分	揮發分	固定炭素	灰分	硫黄分	發熱量	不粘結
	四・四三	四七・七	三九・二八	八・九三	〇・三七	六、六〇〇	不粘結	

坑名 別保一坑(日産三〇〇〇噸)、別保二坑(日産一五〇〇噸)。

探炭法 斜坑に依り開坑、前進式總拂長壁法に依り探炭す。長壁面は約九一米とし、截炭機及電氣

ドリル・鑿岩機を使用す。

排水法 各種電動唧筒に依り排水をなす。

通氣法 大部分機械通風にして、別保一坑シロッコ(毎分二〇、〇〇〇立方呎)、二坑シロッコ(毎分

三五、〇〇〇立方呎)を設備す。

保安 瓦斯炭塵の發生殆どなく特記すべき事なし。

坑内照明 ウルフ安全燈(二〇八個)、ウルフ帽上燈(二〇六個)を使用す。

運搬法 切羽に於ては各種切羽運搬機を使用、坑道は手押又は馬匹に依り、斜坑は捲揚機に依る。

炭車は木製〇・七噸なり。

選炭法 別保一坑に於ては切込炭(一八・二耗以上)及粉炭(一八・二耗以下)に篩分け、切込炭は二

坑に送り再選す。一日能力約三〇〇噸。

別保二坑には十時間三〇〇噸の機械選炭機あり、大塊丸目六三・五耗以上、中塊二五・四耗以上六

三・四耗以下、粉炭二五・三耗以下に篩分け、大塊は手選し、中塊及粉炭は各一臺の水洗機にて精選す。

動力 全部電力を用ひ、北海道電燈會社鳥取變電所より一二〇キロワットを受電各所に配電す。

礦夫 六月末現在 坑内夫一八九名、坑外夫五三名、計二四二名

産額 最近五ヶ年の産額左の如し。

昭和三年	一〇五、七六九噸	昭和六年	七五、二二一噸
昭和四年	一一八、七一九	昭和七年	五七、六五一
昭和五年	九二、〇八六		

輸送 一部は釧路臨港鐵道線に依り釧路港知人貯炭場に、一部は省線に依り濱釧路驛(頓化貯炭場)に送る。前者は春採坑に記述せる直積棧橋を利用して積込み、後者は釧路河岸土場として汽船燃料を取扱ひ居れり。

雄別炭礦鐵道株式會社

雄別礦業所

位置 釧路國阿寒郡舌辛村に在り。阿寒山より發する舌辛川の上流に位し、根室本線釧路驛より雄別炭山驛迄四十四軒（外に大曲迄約三軒間岐線延長）は自社經營の私設鐵道を敷設省線と貨客の連帶運輸をなす。片道約二時間なり。

礦區面積 探掘試掘合計約一四、二四〇、〇〇〇坪。

沿革 往年山縣勇三郎氏の試掘礦區なりしが、其後轉々して大正七年十二月芝義太郎・宗像政藏兩氏の名義となり、試掘十五礦區を以て北海炭礦鐵道株式會社を設立し、鐵道工事並に開坑作業を行ひ、大正十二年一月鐵道の開通と共に運炭を開始せり。大正十三年三月三菱礦業株式會社に於て出資經營することとなり、雄別炭礦鐵道株式會社と改稱、昭和二年全株三菱礦業株式會社の所有となり、販賣は全部同社に於て行ふ。

地質及炭層 地質は下部第三紀層にして主として砂岩・頁岩・礫岩より成り、稀に凝灰岩層及多量

の化石を夾有す。炭層數多きも主なるものは徹別層一・二米、上層一・八米乃至三・〇米、本層一・八米乃至二・四米、最下層一・二米の四層にして、目下探炭中のものは本層なり。傾斜は大体二十二度乃至三十度なり。

炭質及用途 不粘結性にして揮發分多く、質堅硬、火付速く、長焰にて火力強く、硫黄分・灰分共に少きを以て陸上及海上一般汽罐用・窯業用・工場用・汽船燃料、製糸用として好適なり。分析表左の如し。

水分	揮發分	固定炭素	灰分	硫黄	發熱量	該炭性質
三・〇〇	四三・〇〇	四一・五〇	一〇・五〇	〇・三〇	六、八〇〇	不粘結

坑名 一坑（日産三五〇噸）、二坑（日産三五〇噸）、三坑（目下開坑中）

採炭法 片磐距離八〇米の後退式長壁法にして截炭機、電氣ドリルを使用する機械採炭なり。

排水法 坑内出水比較的少く、各種電氣唧筒に依り排水す。

通氣法 主要扇風機としてシロッコ（毎分一五〇、〇〇〇立方呎）を設置、一坑、二坑を共通に排氣をなす。

保安 瓦斯炭塵の發生比較的少く特記すべき事なし。

坑内照明 主としてウルフ帽上燈（七二六個）を用ふ。

運搬法 切羽運搬は鐵板自然流、片磐坑道はテールロープに依り、斜坑は一坑二坑共三〇〇馬力捲揚機、坑外はエンドレスに依る。炭車は〇・六噸木製なり。

選炭法 大曲に選炭場あり、先づ2'以上以下に篩別し、塊炭は手選し、2'以下は六〇應のバウム水洗機にて水洗の上1'篩にて洗中塊及洗粉に篩別す。選炭能力一日千二百應にして、貯炭庫容量七二〇應なり。

動力 北海道電燈會社蘇牛發電所より最大五〇〇キロワットを受電各所に配電す。

職 夫 六月末現在 坑内夫三八八名、坑外夫一二六名、計五一四名。

産 額 最近五ヶ年の産額左の如し。

昭和三年	二一九、三八六	昭和六年	一七五、三五〇
昭和四年	二三五、四八八	昭和七年	一七六、二八二
昭和五年	二二六、三八九		

輸送及積込 前記私設鐵道を以て新釧路貯炭場に搬出す。目下一日貨客混合列車三往復、貨物列車一往復にして、客車七輛、貨車八十一輛を有す。

新釧路貯炭場は釧路川に沿ひ約七千坪あり、四万應を貯炭し得。港内本船に積込む爲め曳船小蒸汽船二、發動機船四、三十噸乃至七十噸の舢二六及浚渫船一を備へ一日の積込能力二千應なり。

尺 別 炭 坑

位 置 釧路國白糠郡音別村に在り、根室本線尺別驛より自社輕便鐵道一一・七軒にして達す。

鑛區面積 探掘試掘合せて約一〇、三九〇、〇〇〇坪。

沿 革 明治四十三年八月田村耕氏探掘權を設定せるも開坑するに至らず、大正七年十月椎葉紘義氏之を讓受け開坑に着手し、大正八年四月北日本鑛業株式會社を組織、同十年四月より營業に従事す。昭和三年十月當社之を讓受け、同時に販賣を三菱鑛業株式會社に委託す。

地質及炭層 地質は上部第三紀層の頁岩・砂岩・疊岩の互層にして、炭層は上部より二尺・板五尺五尺・三尺・四尺・十二尺の六層あり。其内最下層の十二尺層と其上の四尺層は炭質最も優良なるを以て、現在はこの二層を採炭し、他の四層は調査未了なり。傾斜は二十三度乃至三十度なり。

炭質及用途 不粘結性にして、硬度中庸、火付速く、短焰にして火力強く、硫黄分・灰分共に少く一般家庭用として愛用され、又海陸汽罐用殊に道内諸工場・鐵道等に好評を博す。分析表左の如し

炭 種	水分	揮發分	固定炭素	灰 分	硫黄分	發熱量	粘 結 性
十二尺層	七・〇〇	四〇・〇〇	七三・〇〇	九・〇〇	〇・三〇	六、六〇〇	不粘結

坑 名 十二尺斜坑を稼行日産二五〇廬。
 採炭法 前進式長壁法に依り手動オーガー及鐵支柱等を使用す。
 排水法 蒸氣唧筒に依る。
 通氣法 排水用蒸氣鐵管の餘熱を利用せる自然通風なり。
 保安 瓦斯炭塵の發生少く特記すべき事なし。
 坑内照明 ウルフ安全燈(三〇〇個)を使用す。
 運搬法 切羽は鐵板流しに依り、坑道は馬匹、斜坑は蒸氣捲揚機に依り、十二尺斜坑坑口より選炭場迄は延長約一、〇〇〇米の索道に依り搬出す。炭車は〇・五噸木製なり。
 選炭法 六分目篩にて塊・粉に分ち、粉炭は共益社式毎時能力二五廬の水洗機にて精選、洗小塊炭と洗粉炭とす。能力一日二五〇廬。
 動力 各種動力用として直立一、ランカシャー汽罐三臺を設置するも近く電化の計畫あり。
 礦 夫 六月末現在 坑内夫一三三名、坑外夫八六名、計二一九名
 産 額 最近五ヶ年の産額左の如し。

昭和三年	七六、六五七廬	昭和六年	六〇、九〇五廬
昭和四年	七六、二三六	昭和七年	五八、五六三
昭和五年	六九、三四六		

昭 和 鑛 業 所

鑛業權者 明治鑛業株式會社

位 置 石狩國雨龍郡沼田村に在り。鑛區は石狩・天鹽の兩國に跨り、留萌鐵通線昭和驛を中心として、西留萌驛迄六一・四籽、旭川驛迄七三籽・六、小樽驛迄一七八・七籽なり。

鑛區面積 試掘探掘を合せ十一鑛區、面積約一千万坪

沿 革 明治三十一年奈良義路氏初めて試掘權設定、大正七年當社の有に歸し、翌八年に第一回、九年に第二回の調査を行ひ、大正十五年より昭和四年迄約四年間更に精密なる調査をなし、昭和四年出張所を設け、準備を整へ、同年十二月十一日第二水平坑の開鑿に着手、翌五年一月出張所を鑛業所と改稱し銳意採炭準備をなし、同十一月一日留萌鐵道昭和驛の開通と同時に送炭を開始し、十二月より正式の採炭に着手、爾來擴張工事をなし出炭漸次増加しつゝあり。

地質及炭層 地質は下部第三紀層に屬し、砂岩・頁岩の互層より成り、疊岩を交へ、主要なる炭層は白木澤炭層群一番層より十番層に至る十層あり、厚さ〇・九米より四・五米に及び一・二米、一・五米、一・八米、二・一米等多し。走向略南北、傾斜三十度より七十度に及ぶ。佐々木澤、中ノ澤炭層

群は十四番層より二十番層に至る七層、厚さ〇・九米より三・六米に及び、走向略東二十度、傾斜五十度乃至八十度なり。現在採炭中のものは十六番層下層にして、厚さ二・四米なり。炭質及用途 微粘結性にして漆黒の光澤を有し、炭質優良、一般汽罐用・家庭用として好適なり。分析表左の如し。

炭種	水分	揮発分	固定炭素	灰分	硫黄	發熱量	炭質性質
十七番層	三・九七	三七・六八	五・六〇	六・五〇	〇・二	七、三三〇	弱粘結
十六番層	三・三三	四三・二二	四九・〇七	四・四〇	〇・三五	七、三七四	同

坑名 現在稼行中のものは中ノ澤炭層群十六番層にして第一・第二・第三水平坑を稼行す。目下白木澤炭層群に向け掘進中なり、現在日産約四〇〇噸にして漸次増加の豫定なり。

採炭法 第一水平坑道は豎入三六四米にて十九番層、四六三米にて十七番層、五四五米にて十六番層に着炭、同層に片磐坑道を設け、本坑道より上部に各四五米を距て、第二、第三水平坑道を掘進片磐坑道を五五米毎に四十度の傾斜の小斜坑にて貫通せしめ此傾斜面約六一米を拂面とし退却式長壁法に依り採炭し、採炭跡は表土、掘進研及選炭研を以て全部充填す。鑿岩機・電氣ドリル・コールピツク等を使用す。

排水法 現在疏水準以上の稼行多く水準以下少なきを以て大部分自然排水に依る。
通氣法 第一水平十七番層連卸口にシロツコ(毎分二〇、〇〇〇立方呎)、第二水平十六番層にシロ

ツコ(毎分一〇、〇〇〇立方呎)扇風機を設置、各掘進個所には昭和型局部扇風機を使用す。

保安 一般に坑内濕潤にして炭塵の存在少きを以て特別の施設なし。

坑内照明 全部エヂソン帽上燈を使用す、備付數一八〇個。

運搬法 切羽に於ては四十度傾斜を利用し自然流下せしめ、坑道は蓄電池電車又は小捲機に依り、斜坑は捲卸し、水平主要運搬坑道はエンドレスに依り搬出す。炭車は鐵製一噸車なり。

選炭法 機械選炭場を設備、先づ2'以上の塊と中塊・粉に篩別、2'以下の中塊及粉は毎時能力三十噸のパウム式水洗機にて精選、之を1'にて篩別け中塊・粉炭に分ち、一等塊・二等塊・洗中塊・洗粉等とす。貯炭庫容量一六四〇噸なり。

動力 五〇〇キロワット火力發電所を設け各所に配電す。

職夫 六月末現在 坑内夫一四三名、坑外夫九〇名、計二三三名

産額 開坑以來の産額左の如し。

昭和五年	四、七三一噸	昭和七年	一一二、五九九噸
昭和六年	七八、九二六噸		

附帶事業 粉炭中より二十目以下の微粉を除き之を原料として煉炭を製造す、毎月製出高約四五〇噸なり。

雨龍鑛業所

鑛業權者 淺野雨龍炭鑛株式會社

位置 石狩國雨龍郡沼田村に在り。雨龍炭田の門戸を扼し、留萌鐵道淺野炭山驛より數町に過ぎず。西留萌驛迄五二・四杆、旭川迄六四・六杆、札幌迄一三九・三杆なり。

鑛區面積 探掘一、二一七、一〇〇坪、試掘一、八三八、九〇〇坪

沿革 明治三十八年淺野同族株式會社により試掘權設定以來數次の調査を行ひ、大正六年寶澤(瀧ノ澤)に於て試掘開坑をなし本層の有望なるを認めたり。大正七年夏大洪水の爲め數ヶ所に山崩あり、各所に上層・本層及下層の露頭を發見し、大正十年三月より十一年末に互り支線の澤及本流域に數個の試錐をなし、傍ら露頭を發掘して炭層の状態を確め、昭和二年以來地質的に空知煤田との比較調査をなし、昭和三年留萌鐵道株式會社創立と共に淺野同族株式會社所有鑛區の内、三鑛區を分離して新に淺野雨龍炭鑛株式會社を創設し、昭和四年九月より開坑準備に着手し、昭和五年三月東本坑を開坑し、爾來坑内外の設備を終り、昭和六年四月末より營業を開始せり。

地質及炭層 地質は下部第三紀層の砂岩・頁岩の互層より成り、南東端極めて小區域に白堊紀層の露出あり。又南西部は中部第三紀層を以て覆はる。鑛區内に南北に縦貫せる大斷層ありて、炭層は東部に於ては東に傾斜し、西部に於ては西に傾斜す。前者を東翼、後者を西翼と稱す。炭層は十數層に達するも其主要なるもの左の如し。

東翼——上層〇・九米、本層四・五米、下層〇・九米にして傾斜六十度。

西翼——上層〇・九米、本層一・二米にして傾斜六十度乃至二十度。

炭質及用途 粘結性にして火力強烈、一般汽罐・家庭用に適し、且つ揮發分多く硫黃分少きを以て

骸炭及瓦斯原料に適す。分析表左の如し。

炭種	水分	揮發分	固定炭素	灰分	硫黃	發熱量	骸炭性質
東翼本層	三・六〇	四三・八一	四九・七三	七・四六	〇・六三	七、九〇三	粘結膨脹

坑名 主要坑は東本坑にて、第一・第二・第三中切坑を設け、水準以上の探炭を行ひ、坑内斜坑により水準以下の探炭を行ふ。

探炭法 東本坑は豎入一四六米にして東翼本層に着炭、下盤岩石中に主要運搬坑道を開鑿し、各五五米毎に四十度傾斜の斜昇を掘鑿、充填式斜向長壁法に依り探炭す、拂面の長さは五一米とす。第一次に本層十五尺中の下盤付七尺の部分を探炭し、爾後適當の時期に上部の探炭を行ふものとす。主として手掘なるも坑道掘進並探炭の一部には鑿岩機・コールピック・電氣ドリル等を使用す。

排水法 水準以上は自然排水に依り斜坑は電氣唧筒を用ふ。

通氣法 日立多翼式(毎分三〇、〇〇〇立方呎)を一中切整坑口に設置す。

保安 坑内濕潤にして瓦斯炭塵の發生少く特記すべき事なし。

坑内照明 全部ウルフ帽上燈を使用す、備付數三〇〇個。

運搬法 切羽に於ては炭層の傾斜を利用し自然に流下せしめ、坑道は馬匹により、坑外はインクライン及電車に依る。炭車は木製〇・八噸なり。

選炭法 十時間千噸の機械選炭場を有し、塊炭²以上、小塊炭²以下、粉炭³以下に篩別け、

小塊炭及粉炭は各別にバウム式水洗機能力毎時四十噸に依り精選す。尙ほ小塊及粉炭水洗機よりの二號炭は粉碎の上、バウム再洗機毎時能力四十噸に依り精炭を回收す。

動力 北海道電燈株式會社より一五〇キロワットを購入各所に配電す。

鑛夫 六月末現在 坑内夫一四七名、坑外夫八六名、計二三三名。

産額 開坑以來の出炭左の如し。

昭和六年 三七、一五五噸

昭和七年 六六、九四五

彌生鑛業所

鑛業權者 東邦炭礦株式會社

位置 石狩國空知郡三笠山村字幾春別に在り、幾春別驛より二・一軒にして、鐵道線路に沿ひ積込交通共に便なり。

鑛區面積 一、二六二、〇〇〇坪

沿革 大正三年八月村井彌吉氏の開坑に始まり、同五年十月伊澤良立氏の手に移る、當時年産額二万五千噸なり。

其後大正九年二月現鑛業權者の經營する處となり、大正十五年増産計畫の下に新に斜坑を開鑿諸設備の改善をなし、昭和五年更に増産を計畫諸施設を改善年産額十五万噸を産し、昭和七年第二坑を開鑿、探炭準備を完成年産額二十万噸の出炭能力を有するに至れり。

地質及炭層 第三紀層に屬する頁岩・砂岩の互層中に介在する石狩炭田上層群にして、主要なるものは一番層一・五米、二番層〇・九米、三番層一・五米、四番層〇・五米、五番層一・二米にして、六、七、八、九番層は目下探鑛中なり。而して現在探掘中のものは一番層及二番層にして、走向略東西

傾斜は十七度より六十度に及ぶ處あり概して西に進むに従ひ急傾斜をなす。
 炭質及用途 不粘結性にして灰分、硫黄分共に少く、揮發分に富み、燃燒容易、火力強烈なるを以て、工場及船舶用に適し、殊に厨房暖房ストーヴ用として賞用せらる。分析表左の如し。

炭種	水分	揮發分	固定炭素	灰分	硫黄分	發熱量	發熱性質
塊炭	四・四五	四六・五〇	四六・三〇	二・五九七	〇・二二三	七・八二〇	不粘結
中塊炭	四・六二五	四五・八〇五	四五・六八五	一・八九五	〇・二四三	七・七〇〇	同
粉炭	三・二二〇	四六・六〇	四五・五四〇	五・一九〇	〇・二三九	七・二六〇	同

坑名 本坑(日産六〇〇噸)、第二坑(日産二〇〇噸)

採炭法 炭層に沿ふて斜に二十度内外の傾斜に斜坑を開鑿し、約七三米毎に片磐坑道を設け、前進式長壁法又はストール式採炭を行ひ、急傾斜の部分に對しては充填採炭準備中にして、ピック又は鑿岩機を使用して採炭する計畫中なり。

排水法 各種電氣唧筒に依り排水す。

通氣法 機械通風にして、シロッコ(毎分一〇〇、〇〇〇立方呎)を設備す。

保安 瓦斯炭塵の發生少く特記すべき事なし。

坑内照明 ウルフ安全燈を使用中なるも、本年八月より帽上燈に変更の豫定なり。

運搬法 切羽運搬は急傾斜の部分は自然落下、緩傾斜の所は鐵鏈に依り、坑道は手押又はエンドレス、斜坑は二五〇馬力電氣捲揚機(本年末には五〇〇馬力に変更の豫定にして註文中)に依り、坑外は下綱式エンドレスに依る。炭車は木製〇・七噸なり。

選炭法 先づ塊・中塊・粉炭の三種に篩分し、中塊は毎時能力三五噸、粉炭は五〇噸の共益社式水洗機に依り精選、殘炭は更に十噸、十五噸の共益社式水洗機に依り再選す。篩目は2'・1'なり。

動力 北海道電燈株式會社より五〇〇キロワット購入各所に配電す。

鑛夫 六月末現在 坑内六二三名、坑外一八〇名、計八〇三名。

産額 最近五ヶ年の産額左の如し。

昭和三年	九六、一一七噸	昭和六年	一三四、七八五噸
昭和四年	一〇〇、一四一	昭和七年	一四九、〇七五
昭和五年	一一〇、〇四七		

茅沼鑛業所

鑛業權者 茅沼炭鑛株式會社

位置 後志國古宇郡泊村大字茅沼に在り、岩内港の北約一一・八軒、海岸より茅沼川を溯ること約一二軒にして坑口あり、岩内、茅沼間は自動車を通じ、將來私設鐵道敷設の計畫あり。尙岩内間海上約七・九軒は發動機船の便あり。

鑛區面積 九八二、四〇〇坪

沿革 本道最古の炭鑛にして、安政三年四月加賀出生の漁夫忠藏なる者漁具材伐採の爲め登山し石炭を發見せるを始めとす。翌年松前藩人を遣はし之を採掘し呷入三十個を茅沼村に持ち來り直ちに岩内に運搬す。安政五年八月當時歌棄詰の幕吏長谷川儀三郎及下役某々等來り石炭を檢分し下役三名を止めて年々石炭呷入百個を岩内港に運搬せしめたりと云ふ。其後文久元年幕府地質學士ブレイヤ、パンペリーを聘して本道の地質鑛物を調査せしめし時、兩氏此炭鑛を以て調査區域中有用なるもの第一位に置けりと云ふ。之れ本炭田の由來にして又今日迄繼續稼行せる本鑛開發の始めなり。慶應三年幕府は英人イー・エッチ・エム・ガール氏を鑛山師として本鑛開坑の業に着手す。同四

年戊辰の役起り、爲めに本鑛の事業も一時休業に至りしが、明治二年八月鈴木金吾主任となり、米人ガール、スコットの兩氏を雇ひ、柴田正作と俱に前業を繼續す。

此年始めて輪車路を建設し鐵道を敷き四噸車を運搬す、是れ本道に於ける鐵道敷設の嚆矢なり。明治六年六月開拓使雇地質學士米人ライマン氏來りて炭山を測量し煤田區域を標定す。同七年權中主典伊地知季雅主任となる。明治十二年鑛山監督米人ゴージョ氏開坑長英人バレー氏等來り事業の改良を圖り、同年六月煤田開採事務長山内堤雲氏着任す。同十四年坑内に軌道を敷設し半噸車を使用す。同十六年一月茅沼炭山官業廢止の令あり、地元漁業家長濱彦太郎氏等組合を組織し、漁業燃料採掘の目的を以て炭坑並に附屬物件の拜借を受け採掘に従事す。

同二十三年徳田與三郎氏隣鑛區古舗及茶津等の採掘を出願し事業を開始す。以後經營者に屢々異動あり。後者は早く既に澤口汽船鑛業會社の有に歸し、前者は上松民吾、澤口庄助、佐藤正諸氏を経て大正八年四月澤口汽船鑛業株式會社に移り、昭和五年四月現鑛業權者の經營となれり。

地質及炭層 地質は第三紀層に屬し、砂岩・頁岩・疊岩の互層より成り。下部砂頁岩層中に炭層を介在し、炭層は上部より一番層〇・八米、二番層一・八米、三番層一・四米、四番層二・五米、五番層〇・八米、六番層三・一米の六層にして、各二三十尺を距て存し、走向大体南北なるも、北に於ては南西に傾斜十五度乃至三十度、漸次南するに従ひ北西五十度となり、遂に純然たる南方傾斜とな

れり。

炭質及用途 炭質は各炭層により其質を異にし、北部は各層共に著しく粘結性を帯び、粉狀光澤あり、南部は粘結性乏しく、南端に於ては却つて不粘結性となれり、前者は骸炭製造用に適し、後者は汽罐用、家庭用に適す。分析表左の如し。

炭種	水分	揮發分	固定炭素	灰分	硫黄分	發熱量
玉川坑	一・二六	四三・八三	五二・二	七・八〇	一・二九	七、九三〇
第一斜坑	二・二四	四三・六〇	四三・四四	六・七三	二・五二	七、五九〇

坑名 第一斜坑のみを稼行日産四五〇噸なり。

採炭法 第一斜坑は炭層中央部より一番層に沿ひ西南に向つて傾斜二十五度を以て開坑せるものにして、百米毎に片磐坑道を掘鑿し豎入坑道を設けて各層に當て、長壁法又は稀に残柱法に依り手掘採炭をなす。

排水法 斜坑は電氣唧筒に依り、水準以上は自然排水なり。

通氣法 機械通風にしてターボ(毎分三〇、〇〇〇立方呎)扇風機を設置す。

保安 瓦斯炭塵の發生なく特記すべきことなし。

坑内照明 ウルフ安全燈(三三二個)を使用す。

運搬法

切羽に於ては急傾斜の處は其儘落下せしめ、緩傾斜の處は流し樋に依り、坑道は手押又は馬匹、斜坑は捲揚機に依る。坑外選炭場迄は馬匹にて、選炭場より岩内港頭迄約一〇・三軒は架空索道に依り輸送す。炭車は木製〇・六噸車なり。

選炭法 機械選炭場あり、先づ塊²以上、中塊²、粉¹以下に篩別し、塊は手選、中塊以下はレオラゾール水洗機に依り精選す。

動力 電力及蒸氣を併用す。電力は北海水力電氣株式會社より一〇〇キロワット受電、一部自家發電(一五〇KVA)をなす。ランカシャー一、多管式一、コルニツシユニの汽罐を設置す。

礦夫 六月末現在 坑内二八五名、坑外一六六名、計四五一一名。

産額 最近五ヶ年の産額左の如し。

昭和三年	三六、七三〇噸	昭和六年	五一、一六四噸
昭和四年	四八、九七七	昭和七年	八〇、九〇六
昭和五年	四五、二七〇		

輸送及積込 選炭場・海岸貯炭場間約三・二軒は專屬自動車に依り運炭するも、大部分は架空索道に依り岩内港頭貯炭場に輸送す、此能力一時間三十噸なり。港頭には鯨直積棧橋あり一日千噸の荷役能力を有す。又貨車直積用貯炭庫の設備あり。

美流渡 礦業所

礦業權者 北海道協同炭礦株式會社

位置 石狩國空知郡栗澤村字美流渡に在り。萬字線美流渡驛より東北約一・六軒にして、此間軌道を敷設し、馬匹に依り運搬す。

礦區面積 一、四八六、四一三坪

沿革 大正三年七月三菱礦業株式會社に於て採掘權を得、大正六年一月同社より奈良義路氏が借受け請負契約にて稼行せしが、昭和四年七月奈良義一氏礦業權を讓受け、同六年四月當社に移轉せり。

地質及炭層 地質は下部第三紀層に屬し砂岩・頁岩の互層より成り、炭層は石狩炭田上層群にして其數十數枚あり、第一・第二坑の炭層は一番・二番・三番と稱し、走向略南北なれども變化甚だしく、傾斜極めて急峻にして六十度乃至九十度に達し西又は東に沈下す。厚さ一番層一・二米、二番層、三番層は〇・八米乃至一・一米なり。

又幌向川附近の炭層は走向略東西にして十五度乃至二十度東に傾斜し、採掘し得るものは五層にし

て、厚さ〇・八米より二・一米に及ぶ。

炭質及用途 不粘結性にして、質堅硬、火力強く、一般汽罐燃料或は家庭用に適し、又貯炭式ストーブ用として賞用せらる。分析表左の如し。

炭種	水分	揮發分	固定炭素	灰分	發熱量	骸炭性質
塊炭	五・八三	四三・〇〇	四六・九〇	三・七六	七、〇四〇	弱粘結性
洗小塊炭	六・二〇	三九・九〇	五〇・九〇	二・九五	七、二六〇	同
洗粉炭	五・五五	四三・二七	四八・三五	四・〇四	七、四八〇	同

坑名 一坑・二坑を稼行日産一五〇噸(新に第三斜坑掘鑿中なり)

採炭法 炭層に沿ひて斜坑を開鑿し、長壁法及詰掘法に依り採炭す。

排水法 斜坑は各種唧筒を使用し水準上は自然排水とす。

通氣法 機械通風にして第一坑シロッコ(毎分一〇、〇〇〇立方呎)第二坑シロッコ(毎分二〇、〇〇〇立方呎)を設置す。

保安 瓦斯炭塵の發生少なく特記すべきことなし。

坑内照明 ウルフ安全燈を使用す、備付數一九〇個。

運搬法 切羽に於ては炭層の傾斜を利用し自然流下せしめ、坑道は手押又は馬匹、斜坑は捲揚機に

依る。

選炭法 十時間四百噸の機械選炭場を有し塊炭 $1\frac{1}{2}$ 以上、小塊炭 $1\frac{1}{2}$ — $1'$ 、粉炭 $1'$ 以下に篩分け、小塊炭及粉炭はブラケット式水洗機に依り精選す。小塊及粉炭の二號炭は共益社式水洗機毎時能力三〇噸に依り精炭を回收自家用に供す。

動力 各種汽罐を設備動力用とす。

礦夫 六月末現在 坑内一一七名、坑外一一〇名、計二二七名。

産額 最近五ヶ年の産額左の如し。

昭和三年	四二、一四〇噸	昭和六年	四〇、八五〇噸
昭和四年	三九、四六〇	昭和七年	四二、一二六
昭和五年	二六、二八七		

新幌内鑛業所

鑛業權者 昭和鑛業株式會社

位置 石狩國空知郡三笠山村に在り。幾春別線唐松驛より東南〇・三軒、小樽(手宮)迄九一軒、札幌迄五六軒、室蘭迄一五五軒、西留萌迄一三六軒なり。

鑛區面積 探掘一、〇〇〇、〇〇〇坪、試掘一一二、二〇〇坪

沿革 本區域の有望なるは夙くより識られたる處にして昭和二年高久馨氏鑛業權を得、翌三年より日支炭鑛汽船株式會社に於て試錐調査をなし、昭和五年に於て炭層狀態を明にするを得て、昭和六年十一月開坑に着手、翌七年十月當社を組織、同年末より五番層の探掘出炭を開始せるも、瓦斯湧水の多き爲め一時探炭を中止し、爾來三番層炭探掘準備中にて本年九月より營業再開始の豫定なり。

地質及炭層 地質は古第三紀層にて夾炭層は砂岩・頁岩の互層より成り炭層は幾春別炭層群に屬し十一層あり。近く三番層(一・九米)を稼行し、續て四番下層(二・四米)を稼行せんとす。走向略東西、傾斜二十五度なり。

炭質及用途 不粘結性瀝青炭にして發熱量高く、製鐵用瓦斯發生爐、汽車汽船、工場用汽罐、都市瓦斯用並に改良型暖爐、一般暖房用に適す。分析表左の如し。

炭種	水分	揮發分	固定炭素	灰分	硫黃分	發熱量
塊炭	二・五	四九・三	四三・五	五・五	〇・三六	七、五九五

坑名 新幌内斜坑、九月より出炭日産五〇〇噸の豫定。

採炭法 斜坑傾斜二十度全長一、〇六一米（現在七七九米）にて三番層に達し、之より左右沿層坑道を延長し、切羽面約一二一米の前進長壁法に依り採炭する計畫なり。

排水法 湧水少く全部電氣唧筒にて排水をなす。

通氣法 連卸坑口にシロッコ扇風機（毎分二二〇、〇〇〇立方呎）を設置す。

保安 近く風井を設けて瓦斯に對する安全施設を行ひ撒水・岩粉棚等の用意を爲さむとす。又救命器の設備あり。

坑内照明 全部エヂソン帽上燈を使用、備付數一〇〇個なり。

運搬法 切羽に於てはチェーンコムベヤー、坑道はベルトコムベヤーに依り二噸鐵製炭車に積載し電氣捲揚機（二〇〇馬力）を以て捲揚げ、坑外はエンドレスによりて運搬す。

選炭法 先づ2'及1'の篩にて塊、中塊、粉に分け、中塊以下は毎時能力五〇噸のバウム式水洗機

にて水洗す。

動力 北海道電燈株式會社より常時五〇〇キロワットを受電各所に配電す。

職夫 六月末現在 坑内夫九五名、坑外夫四三名、計一三八名。

産額 昨昭和七年中の産額一、八五六噸なり。

遊覽案内

本道の風景は極めて雄大にして、山容、林相、就中廣漠たる農耕地の狀は恰かも大陸を旅行するの趣あり。冬は寒氣強きも暖房の設備全く、スキー、スケートの快技は若人の血を湧かすに足り、夏は爽涼の氣山野に満ちて旅客をして汗と塵とを忘れしむ。本土と海を挟むことが聊か旅情を阻む嫌あるも今や青森函館間に三千五百噸の連絡船四隻を有し、渡航極めて安全快適なり。以下函館を振出し道内東道の筆を進めん。

函館より小樽迄

函館は北海道の玄關なり。寶徳年間、河野加賀守此地に城を築くや、其形箱に似たるを以て人呼んで箱館と稱し後函館に改む。安政六年開港せられて貿易港となり、現在人口二十萬二千、本道第一の都會たり。市街は渡島の南端に拳狀をなして斗出せる函館山（一名臥牛山、要塞あり）の中腹より放射狀に展開し、連絡船上より之を望めば、山高く水深く、其パノラマの如き風光は旅人の第一印象を快適ならしむに足る。

函館の交通機關は電車と自動車なり。電車は函館水電會社の經營にして市内より市外湯の川温泉迄延長し、乗合自動車は驛前より五稜郭を経て湯の川・根崎温泉間及大門前より海岸に沿ひ、根崎温泉間を絶えず運轉す。

市内の主なる旅館はふじ屋・勝田旅館・越前屋・山内旅館・五島軒ホテル等にして宿料は二圓五十錢乃至五圓なり。

函館公園 驛の南西二軒半、電車の便あり。臥牛山裾の高丘に據り、市街港灣一眸に聚まる。園内に圖書館・水産陳列場等あり。圖書館は藏書に富み又石器時代の遺物多し。春は櫻花に名あり。

立待岬 函館山の東端に當り、薄倅詩人石川啄木の墓あり。

東海の小島の磯の白砂に我泣きぬれて蟹とたわむる

啄木

五稜郭 幕末函館奉行の政廳として、蘭學者武田斐三郎の設計に依り築成されたるものにして、五個の土壘星狀をなせるより此名あり。明治初年榎本武揚・大島圭介等之に據り官軍に抗したる史蹟として有名なり。

湯の川温泉 驛の東北七軒、電車・自動車の便あり。大氣清澄、風光開曠にして附近に鈴蘭を産す。泉質は薄黄色を帯びたる炭酸アルカリ性にして、攝氏四十四度乃至五十二度の温度を保つ。旅館は多く料理店を兼ね、設備略ほ整へり。福井館（旅館專業）・兼樂園・小林亭・福住・芳明館等其主な

るものにして、宿料は二圓五十錢より六圓迄種々あり。

根崎温泉 湯の川より約半軒、外海宇賀の浦に臨み風光明媚、泉質は鹽分に富み七十度の温度を保つ。旅館の主なるものはホテル御園・若松・つるや・ニコニコ等にして宿料は二圓五十錢より六圓迄なり。

トラピスト修道院 トラピスト修道院の名、何ぞ魅惑的なる。其女子修道院は湯の川温泉より約四軒、眺望よき高臺に、男子修道院は市外上磯村常別にあり。女子修道院内の參觀は絶対に許さず。男子修道院は午前十一時、午後三時の二回公開す。

大沼公園 湖は周回三二軒、大小二部に分れ瓢形をなせり。湖上百二十餘の島嶼を浮べ、架するに二十一橋を以てす。島に綠樹繁りて水に映じ、風光春秋共に宜しく、加ふるに活火山駒ヶ岳の奇峰水際に聳え景觀を更に雄大ならしむ。旅館は第一紅葉館・第二紅葉館等あり、宿料三圓より四圓、遊覽船の備へあり。

駒ヶ岳 函館本線大沼、駒ヶ岳驛を過ぐる時、車窓近く望むべし。海拔一、一四〇米の活火山にして、昭和四年大爆發をなし、全山熔岩に包まれ、山容甚だ奇なり。

鹿部温泉 大沼驛より電車四十五分にして達す、鹽類泉にして温度百九十五度、胃腸病・神経痛に効あり。旅館は鶴の湯・鹿の湯、宿料一圓より二圓五十錢なり。

昆布温泉 函館本線昆布驛より入る。昆布温泉とは此附近の總稱にして、中に青山・鯉川・紅葉谷・成田・湯本等の諸温泉あり。湯本を除く外は食鹽性炭酸泉なり。青山・鯉川・紅葉谷には乗合自動車・乗合馬車の便あり。其他へは臨時に馬車又は駄馬を備ふべし。附近のニセコアンヌプリ(一、三〇八米)、チセヌプリ(一、一三四米)はスキーの適地にして、先年秩父宮殿下スキーにて御登山遊ばされたるより其名著はる。旅館は各泉にあり、宿料二圓より三圓迄。

蝦夷富士(羊蹄山) 函館本線比羅夫又は俱知安驛より登山路あり。海拔一、八九三米、端正なる缺頂圓錐形をなせる休火山にして、其秀麗なる山姿は東海の富士山に彷彿たるものあり。登山期は七月一日より八月末日迄とす。高山植物極めて多種にして且つ豊富なり。冬はスキー登山を試みるもの多し。

北海道水産試験場 函館本線余市驛の西一軒半、余市町大字濱中町に在り、鯨の基本調査・海洋調査・漁撈・製造の各般に互り貴重の試験報告をなせり、又本場附屬の千歳鮭鱒人工孵化場(膽振國千歳村)は世界に類なしと稱せらる。

小樽より札幌迄

小樽は本道西部の關門にして、小神戸とも稱すべき商港なり。北より西、南へ丘山を以て圍まれ、

港は東に開く。維新前は微々たる一小漁村なりしも、其位置と時運に倖せられて長足の進歩を遂げ今や人口約十五万、本道海運並に商業界に覇を稱ふるに至れり。港は大規模の築港竣成し、石炭積込に付ては目下鐵道省に於て最新式の設備施工中なり。市中に小樽(本線)・南小樽(同)・小樽築港(同)・色内(手宮線)・手宮(同)の五驛、海には北日本汽船會社及近海郵船會社經營の鐵道連帶樺太航路あり。主なる旅館は北海ホテル・越中屋・北陽館・谷旅館・加賀屋・小島旅館・住初館等にして、宿料は普通二圓五十錢より五圓、ホテル・越中屋は二、三圓より六圓程度なり。

小樽公園 市の背部を繞る丘陵の一部にして、地域約三、三〇〇アール、市街港灣を一時に收む。運動場・林間道遙地其他の設備あり。

古代文字 手宮驛附近石炭高架棧橋際にあり。洞窟の岩壁に刻まれたる異形の文字は、西曆六百六十年代肅慎人の手に成れる墓誌にして、鞆語を土耳古文字にて記したるものといはれ、大正十年史蹟名勝天然記念物保存法に依て史蹟に指定されたり。

北海道農事試験場 本線琴似驛北側にあり。廣大なる試作場を有し、種子・種苗・土性・植物病理に關する試験研究を行ひ、本道農事の改良發達に貢献する所多し。道内諸所に支場・特別試験場を有し、火山灰地・泥炭地の農作試験の如きは見事なる成績を挙げ居れり。

北海道工業試験場 農事試験場に隣接し、内部の組織は醸造・窯業・化學・試験・資源調査の五

部に分れ、道産原料を以てする工業上の各種の研究・依頼分析・試験鑑定等をなし、本道に多産する魚油よりのガソリン抽出等、幾多の有益なる研究を續けつゝあり。

札幌及其附近

札幌は本道の首都にして人口十七萬六千を有し、北海道廳・鐵道局・逓信局・鑛山監督局・稅務監督局・控訴院・帝國大學・帝室林野局支局・商工會議所等あり。石狩大平野の西南隅に位し、回山藻岩の峰巒を負ひ、豊平の清流を擁し、街衢整然、建築宏壯にして鬱然たる大都市を成せり。維新前は密林天を蔽ふ一帶の無人境たりし所、僅々半世紀間の發達は蓋し驚異に値するものあり。電車及乗合自動車は市營にして、札幌驛を起點として四方に通じ、定山溪溫泉迄は電車及乗合自動車の便あり。主なる旅館は山形屋・中村屋・静岡屋・佐々木旅館・敷島屋・加賀屋・阿部旅館等にして宿料は普通二圓五十錢より五圓迄なり。

北海道物産館 札幌商工會議所にて經營せしが目下改築の爲め休館中なり。

中島公園 驛より南約二軒、電車の便あり。地域廣く、樹木繁り、池水湛え、風光掬すべきものあり。池畔に本道開拓史料を陳列せる拓殖館あり。附近には札幌放送局演奏場あり。

北海道帝國大學 驛の北約半軒、電車の便あり。明治五年の創立に係り、前身札幌農學校時代よ

り幾多の人材を輩出し、本道の開發に貢献する所多し。今や農學部・醫學部・工學部・理學部を併せ別に大學豫科・農學實科・林學實科・土木専門部・水産専門部等を附設し、居然たる大學園を形成す。其構内は極めて廣くして、昔ながらの老樹茂り、綠芝地に敷き、清流之を繞り、幽雅自ら學風を偲ばしむるものあり。

植物園 驛の西南約半軒、大學農學部の附屬にして、約三六四米四方の廣大なる地域を占め、此地方の原生林を保存し、所々に泉源ありて清流を發す。又世界各地の植物約六千種を移植し、樹林天を蔽ひ、綠芝地に敷き、幽邃閑雅の別天地をなす。

札幌神社 驛の西南約四軒、電車の便あり、明治二年の創建にして、大國魂・大名手造・少彦名の三神を奉祀し、官幣大社に列し、北海道總鎮守たり。境内櫻樹多く、附近に圓山公園・スキー場等あり。

真駒内種畜場 驛より約八軒、市の南郊にあり。北海道廳の所管にして牛馬其他種々の家畜の模範牧場なり。豊平川に沿ふて三十四萬アールの大地積を占め、遠く藻岩・手稻の層層を望み、眺望頗る雄大なり。定山溪鐵道停車場あり。

月寒種羊場 驛の東南約八軒、農林省の所管に屬し、綿羊の飼育・生産・頒布を主とし、斯業の指導獎勵に努めつゝあり、廣袤十一萬アールの高原地にして石狩大平原を一眸に收む。

定山溪溫泉 札幌を距る二六軒、省線白石驛、苗穂驛又は市電豊平終點より接續電車の便あり。又札幌驛前より乗合自動車通ず、豊平川上流谿谷迫る處、溫度九十四度の單純食鹽泉は川岸隨所に湧出し、山に倚り川に臨みて宏壯なる溫泉旅館散在す。主なるものは定山溪ホテル・定山園・鹿ノ湯クラブ等にして、宿料普通二圓五十錢乃至五圓なり。

旭川及其附近

旭川は本道の中央部、四方山を繞らしたる高地性盆地にして、農産豊かなる上川平野を擁す。人口八萬五千、街衢整然として將來の大都市たる規模を示す。電車及乗合自動車の便あり。附近に第七師團・近文舊土人部落等あり。旅館は北海屋ホテル・永樂館・宮越屋・三浦屋・越後屋等にして宿料二圓五十錢より四圓迄。

層雲峽 旭川の隣接驛新旭川より分岐する石北線上川驛の東南二四軒、石狩川の上流嶺巖屏立する約二十軒の間を指す。道路平坦にして上川驛又は旭川より自動車の便あり。峽中温泉湧出し、層雲閣・登仙閣等の温泉旅館（宿料二圓五十錢より四圓）あり、大雪山後に聳え銀河流星の飛瀑懸り、溪谷の美姿に極まる。

室蘭及其附近

室蘭は本道の南西、噴火灣口に突出したる給鞆岬に抱かる、天與の良港にして人口五萬五千、長輪線、青森航路の要衝に當り、背後には日本製鋼所・王子製紙工場・夕張諸炭山を控へ、石炭・鐵・紙・木材・木炭等の移出盛なり。目下鐵道省において改良工事中の石炭積込設備は大半完成し一段の偉觀を加へたり。主なる旅館は福井館・創成館本支店・石川旅館等にして、宿料二圓より三圓五十錢迄。

登別温泉 室蘭本線登別驛より八軒餘、電車の便あり。海拔二〇〇米、峰蟹を繞らし、溪流に臨み、風景賞すべし。温泉は明礬・鹽類・硫黃・鐵等其質多種、湯量極めて豊富にして旅館の設備亦善く備はれり。旅館の主なるものは第一瀧本・第二瀧本・瀧見館・湯本ホテル等にして宿料二圓五十錢乃至四圓なり。又其北西約八軒にカル、ス温泉あり、幽寂の別天地を成す。

白老土人部落 室蘭本線白老驛の南約半軒、戸數八五、人口四三〇餘。主として漁業に従事す。生活様式は今猶舊態を存し、研究資料に乏しからず。

樽前山 海拔一、〇二二米、苦小牧・錦多峰驛附近より其噴煙を望むことを得べし。

支笏湖 室蘭線苦小牧驛より北西二四軒餘、王子製紙専用鐵道に便乗するか、又は札幌苗穂驛より北海道鐵道線千歲驛を經、約八軒間自動車を利用すべし。湖は標高三〇〇米、周回四〇軒、深さ三

六〇米にして、水色飽くまで碧く、湖岸に樽前(一、〇二三米)・フツアシ(一、一〇二米)・惠庭(一、三一九米)の諸嶺峙ち、幽趣比なし。姫鱒及鮭の人工孵化場あり、旅舎一戸宿料二圓内外なり。

洞爺湖 室蘭線蛇田驛より湖畔温泉迄約八軒、電車・自動車の便あり。湖は圓形にして周回四〇軒、深さ一八二米、碧水漫々として中央に鬱蒼たる小島を泛べ、其南岸には有珠岳、北方には蝦夷富士を望み風光一段の趣致を加ふ。主なる旅館は洞爺湖ホテル・觀光ホテル等にして、宿料二圓五十錢より三圓五十錢なり。

有珠岳 洞爺湖畔に蟠踞し、海拔七二五米。敢て高山と稱するに足らざれども、火山學上世界的に有名なり。有珠山上に立つて始めて洞爺の眞景を知るべし。

釧路及其附近

釧路は人口約五萬一千、本道東部隨一の良港にして、築港工事も既に完成し、釧路・十勝・北見・根室地方の物資集散す。主なる貨物は水産物・雜穀・石炭・木材・畜産物等なり。旅館は富士屋・近江屋・山形屋・とらや・輪島屋等にして、宿料二圓五十錢より五圓位。

狩勝峠 本道の中央を南北に縦走する大分水嶺を鐵道根室本線が横斷する所を狩勝峠と稱す。北に旭岳を仰ぎ、南にトツタベツ山堂を俯し、更に東方十勝平原を望めば天悠悠々雲漠々景觀雄大を極む

阿寒湖と阿寒岳、雌阿寒岳は海拔一、五〇三米、釧路・北見の國境に近く、雄阿寒岳と對立する活火山にして、阿寒湖は此兩山の中間に横はる。周回二六軒、毬藻と稱する珍植物を産し、又姫鱒の原産湖なり。通路は釧路驛より雄別炭礦鐵道に乗換へ、途中舌辛に下車、五十一軒間自動車に依るものと、北見網走本線美幌驛より岐るゝ相生驛に下車、二十二軒間自動車に依るものと二途あり。湖畔には山浦・井上及雄阿寒ホテルあり。宿料二圓より三圓なり。

塘路湖、釧網線塘路驛附近、釧路より一時間にして達す、附近一帯の丘陵起伏し疎林綠草の間大、小多數の湖沼隠見す、湖はワカサギ其他の魚族に富み、野鳥多く、特に珍重すべきは丹頂鶴の棲息することなり。

弟子屈・當別温泉及摩周湖、釧網線弟子屈驛より約七百米にして弟子屈温泉、約一軒強にして當別温泉あり、東北約十軒にして摩周湖に達す、湖は周回二十三軒。海拔三百二十五米、水深二百八米の陥没湖にして蒼涼の神秘境なり。

川湯温泉及屈斜路湖、川湯は釧網線川湯驛より約四軒、自動車の便あり。硫黃山麓の火山灰高原に位し、前に硫黃山の噴煙を望み、後に千古の原始林を控へ、二軒にして屈斜路湖に達す。主なる旅館は對岳館・川湯クラブにして、宿料二圓より三圓五十錢とす。屈斜路湖は周回四八軒、水深一二五米本道第二の大湖にして頗る風景に富めり。

帯廣は人口三萬二千、本年四月市制を布かれたる新進都市にして、廣袤九千七百平方軒の大平野を控へ、農産の集散地として洋々たる前途を有す。附近に明治製糖、北海製糖、新田製糖等の大工場あり。旅館は、信陽館、北海館等にして宿料二圓五十錢より四圓位。

根室港、根室本線の終端にあり、人口約二萬、千島・カムチャツカ方面出漁の根據地にして海産物の輸出入として聞ゆ。旅館は二美喜・譽田・渡邊等、宿料二圓より四圓迄。

野付牛及其附近

野付牛は人口約三萬、北見平原の咽喉を扼し交通の要衝に當り、新興氣分潑瀾たる小都會なり。主なる旅館は市川館・黒部旅館にして、宿料二圓五十錢乃至四圓なり。

網走港、人口三萬、オホツク海岸隨一の良港にして、函館・小樽よりの定期航路開け、木材・農産物の集散多し。主なる旅館は松井・高橋二館にして、宿料二圓より四圓迄。

稚内及其附近

稚内は人口二萬に近く、宗谷本線の終端、北海道最北の都會にして、本島・樺太連絡の要路に當れり。大泊及本斗迄何れも八時間にして達す。主なる旅館は菅野ホテル・松尾本店・大谷旅館・井上旅

館にして、宿料二圓五十錢乃至四圓なり。

クツチャロ湖

北見線濱頓別、山輕驛間車窓より望むべし。オホツク海に近き平野の湖水にして

深さ二米に過ぎざるも周回四〇軒を超え、對岸は一帶の大森林を控え、風光明媚なり。シバミ貝を産す。

利尻山

利尻富士と稱し、海拔一、七一八米、北西日本海上に浮べる休火山にして山容極めて秀麗なり。

(了)

地名考

函館 沼 大森 長萬 俱知 余市 小樽

(河野加賀守が居城を築きたるに其の形箱に似てゐるので箱館と呼びしに初まる)
(舊土人語でボロ・トーと云ひボロは「大」トローは「沼」の意である)
(舊土人語のオニウシ「樹木の茂りたる所」を意譯したものである)
(舊土人語のオシヤマンベ「比目魚の居る所」で、昔時鱈の漁獲豊富であつたのである)
(舊土人語のクチアン・ナイ「獵舎のある河」の上部を採つたものである)
(舊土人語のイオチ「蛇多き所」の轉訛である)
(舊土人語のオタルナイ「小石の川」より出づ)

札幌 江別 岩見 砂澤 瀧川 旭川 虹田 登別 室蘭 夕張 留萌 下富良野 帶路 根室

(舊土人語サツ・ボロ「乾きたる廣き場所」の音譯である)
(舊土人語エ・ベツ「膿汁の如き川」より出づ、江別川の褐色を呈するにより斯く稱したるものであらう)
(開拓使時代に使員が温浴して疲勞を癒し湯浴澤と稱したるに始まる)
(舊土人語オタ・シ・ナイ「砂のある大川」より採りて命名したものである)
(舊土人語ソ・ラブチ・ベツ「瀧の掛る川」を意譯したものである)
(舊土人語のチュブ・ベツ「日出づる川」を意譯したものである)
(舊土人語アブタ・ベツ「釣魚に適する川」の上部を採つたものである)
(舊土人語トマク・オマ・イ「沼の後の場所」より轉訛したものである)
(舊土人語ヌブル・ベツ「濁川」の轉訛で、温泉のため登別川の白濁せるにより斯く云ひしものである)
(數説あるがその一を録すと舊土人語モルエラン・ホトエウシ「小坂を下り舟を呼ぶ所」より名付くといふ)
(舊土人語ユウバロ「温泉の出づる口」より出たものである)
(舊土人語ルル・モウ・ベツ「静かなる湖水」より轉訛したものである)
(舊土人語フーラ・メイ「臭き火燭」の轉訛したものである)
(舊土人語オハレメルブナイ「川尻の壊れたる川」より轉訛したものである)
(舊土人語クツチャロ「咽喉」より轉訛したものである)
(舊土人語ニムオロ「樹木繁茂する處」より出しものゝ如くである)

士 別 遊
 名 密 案
 普 威 子 内
 雅 內 府 府
 渚 滑 内
 達 別 滑
 野 付 走
 網 走

遊覽案内

(舊土人語シ・ベツ「大なる河」から来てゐる)
 (舊土人語ナイ・オロ・ブツ「河の傍なる川口」を略したるもの)
 (舊土人語オトイ・ネツプ「濁りたる泥川、漂木の堆積する河口」より出づ)
 (舊土人語ワツカ・ナイ「飲水の澤」を取りたるもの)
 (舊土人語シヨコツ「細長き澤の出口」から来てゐる)
 (舊土人語リケンベツ「高き危き川」を取りたるもの)
 (舊土人語ヌブ・ウン・ケシ「野の端」の轉訛したものである)
 (舊土人語チハシリ「吾等が発見したる岩」より轉訛したものと傳ふ)



昭和八年八月五日印刷
昭和八年八月十一日發行

不許
複製

定價金五拾錢

編輯者 小笠原榮治
兼印刷發行
札幌市北三條西二丁目七番地

印刷所 札幌印刷株式會社
札幌市北一條西二丁目一番地

發行所 北海道石炭鑛業會
札幌市北三條西二丁目七番地
社団法人

373
518

終